

2006年9月第19号

人環フォーラム NO.19

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

インタビュー：京都学派の伝統を背負って

上田閑照 聞き手 高橋義人

特集：リスクに備える

浅野耕太／吉田 純／林 能成・木村玲欧／カール・ベッカー／山本行男

HARD SERRA
RAREN MATERIA
ERIA DEL TIEMPO
ATTER OF TIME

arcelor

n Inperioa
zteca
Empire

IBERDROLA

京都大学大学院人間・環境学研究科

『人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。

「自然と人間との共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科（略称「人環」）は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかわりを模索してゆくため、『人環フォーラム』を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的な豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけてゆきたいと考えています。



● 目次＝人環フォーラム19＝

巻頭言	1
究極の他者	作田啓一
インタビュー	2
京都学派の伝統を背負って	上田閑照
特集：リスクに備える	
BSEのリスクに備える／浅野耕太	18
情報ネットワーク社会のリスク／チャンス／吉田 純	22
地震災害の危険性をいかにして伝えるか／林 能成＋木村玲欧	26
死に至る病のリスクに備える／カール・ベッカー	32
化学物質のリスク管理／山本行男	38
リレー連載：環境を考える	
人間と地球環境の安全保障／松下和夫	42
社会を斬る	
知識人をめぐって／前川玲子	48
フロンティア	
京都からハルカ遠くの京都大学一別府地球熱学研究施設より／齋藤武士	52
スズメダイとイトグサとの栽培共生／畑 啓生	53
奈文研の散歩道	
律令国家誕生の地 飛鳥藤原地域の考古学／松村恵司	54
世界の街角	
シンガポールの街角がスペクタクルになるとき／田中雅一	56
フィールド便り	
吉田南構内の自然緑地の重要性／西川完途＋松井正文	58
『太陽通り』と東への郷愁／浅井晶子	60
書評	
東谷護『進駐軍クラブから歌謡曲へ』／舌津智之	62
伊從勉『琉球祭祀空間の研究』／高良倉吉	63
藤原辰史『ナチス・ドイツの有機農業』／伊藤淳史	64
濱田陽『共存の哲学』／福岡良明	65
橋爪博幸『南方熊楠と「事の学」』／吉川壽洋	66
奥田敏広『トーマス・マンとクラウス・マン』／福元圭太	67
中野昌宏『貨幣と精神』／神野照敏	68
小倉紀蔵『歴史認識を乗り越える』／小針 進	69
人環図書	70
三原弟平『カフカ『断食芸人』〈わたし〉のこと』	
サン＝テグジュペリ／稲垣直樹訳『星の王子さま』	
新宮一成・立木康介編著『知の教科書フロイト＝ラカン』	
M.アンダーソン／太平剛訳『諸刃の援助』	
コラム	
「お国の食べ物」個性豊かな味 Bak Ku Teh／ガン・ショウ・ファイ	31
「お国の食べ物」多民族国家コロンビアの伝統料理／マリア・ルシア・コレア	47
瓦版	71

研究科ホームページ

<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/jinkan/index.html>

『人環フォーラム』ホームページ

http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/jinkan/jinkan_forum/index.html

究極の他者

作田啓一

KEIICHI SAKUTA

「京都大学名誉教授」

社会の最小限の単位は自己と他者の相互作用であるとする社会理論があった。いや、今もある。それは自己と他者をその両方から離れた場所に立って相互に対置させる観察者を仮定している。この仮定のもとでは観察者の立場から見ても自己と他者は等質的であるけれども、自己の経験ではその他者は自己にとって異質な存在である。その異質性をこの仮定はとらえていないのだ。

この社会理論はまた相互作用を媒介する象徴の作用を暗に仮定している。したがってこの象徴作用の仮定にもとづく社会理論は、共有された象徴によって規定された役割占有者間の相互作用にその適用範囲を限定する傾向がある。男と女、大人と子供、夫と妻、親と子、教師と生徒、雇用者と被雇用者、上司と部下、ネイティブと外国人、等々。これらのペアの両項を、それぞれ自己と他者が占有するとされている。この場合、自己は相互に相手がある程度異質的であるとは感じるが、占有する役割の両項が象徴作用を通して相互補完的であるために、相手の異質性に衝撃を受けるところまではゆかない。つまり、一方が他方に強度の他者性を感じることはできないのだ。ということとは、次の二つのことを意味する。一つはこの種の実証理論では他者性がとらえにくいということであり、もう一つはこの種の社会理論はかなり常識化しているため、その常識の中にいる我々は他者性を感じにくくなっているということである。

では真の他者あるいは究極の他者はどのようにして自己の前に現前するのか、またその現前をどのような仮定を通してとらえることができるのだろうか。究極の他者が現前するためには究極の自己が存在しなければならぬ。

私が羞恥というテーマに以前から関心をいだき続けたのは、一つに

は究極の自己なるものを確認したかったためである。羞恥は恥と混同されやすいが、恥とは違う。恥は象徴体系の一部である優劣基準に照らして自己が劣位にあると感じる体験である。これに対し、羞恥は自己が防衛の蔽いを剥ぎ取られ、裸の自己が衆目に曝されている時の体験なのである。だから自己は劣位ではなく優位が注視される場合でも羞恥を感じることはあるのだ。自己はふだんは象徴作用の産物である文化的・社会的獲得物により自らを蔽っている。ところが周囲の注視によりこの獲得物が剥ぎ取られ、ほかの誰でもない自己が感じられることがある。この時の自己が究極の自己なのだ。

羞恥の体験を通して我々は究極の他者を表象することができる。羞恥において我々は象徴化の産物を剥奪された究極の自己を見いだした。それは象徴化から洩れ落ちた自己である。その自己は文化的・社会的に課せられているどんな役割にも、びったりはまっていない自らを感じる。そしてまた、役割を規制する優劣や善悪の基準にコミットすることのできない自己をも感じている。この自己が世界に投影された時、究極の他者の像が見いだされるのである。彼らは世界の中で確固とした地位（役割複合体）を占めていない。その意味で周辺の人物なのだ。レイナスが他者として例示した貧者・異邦人・寡婦・孤児がそれに相当するだろう。彼らは、世界の住民として文化的・社会的産物を身に着けている自己から見ても、裸の他者つまり究極の他者なのだ。彼らは裸の自己の投影である点で自己に身近な存在なのだが、象徴に蔽われた自己にとっては遠い存在でもある。その遠さが自己におどましさを感じさせ、その近さが自己に懐かしさを感じさせる。



インタビュー

上田閑照

Shizutaru UEDA



京都学派の伝統を背負って



●聞き手
高橋義人
Yoshio TAKAHASHI

京都大学というと、湯川秀樹、朝永振一郎らの作る物理学の京都学派と、西田幾多郎、田辺元、西谷啓治らの作る哲学の京都学派の二つが知られています。今日は後者の京都学派について、この学派の代表的継承者である上田閑照先生にお話をうかがいました。

●上田閑照（うゑだ しずたると）

一九二六年、東京都生まれ。京都大学文学部で西谷啓治に師事。京都大学名誉教授。マールブルク大学哲学博士。京都大学文学博士。日本学士院会員。専攻は宗教哲学。著書に『上田閑照集』（全十一巻、岩波書店、二〇〇三年）、「禅仏教——根源的人間」（岩波書店、一九九三年）、「経験と自覚——西田哲学の「場所」を求めて」（岩波書店、一九九四年）、「ことばの実存——禅と文学」（筑摩書房、一九九七年）、「西田哲学への導き——経験と自覚」（岩波書店、一九九八年）、「エックハルト——異端と正統の間で」（講談社学術文庫、一九九八年）、「実存と虚存——二重世界内存在」（ちくま学芸文庫、一九九九年）、「私とは何か」（岩波新書、二〇〇〇年）、「西田幾多郎とは誰か」（岩波現代文庫、二〇〇二年）、「十牛図を歩む——真の自己への道」（大法輪閣、二〇〇二年）などがある。

●高橋義人（たかはし よしと）

一九四五年、栃木県生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学博士。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。著書に『形態と象徴——ゲーテとヘーゲルの自然科学』（岩波書店、一九八八年）、「ドイツ人のこころ」（岩波新書、一九九三年）、「魔女とヨーロッパ」（岩波書店、一九九五年）、「グノーシス異端と近代」（編著、岩波書店、二〇〇一年）、「グリム童話の世界」（岩波新書、近刊）など、翻訳書にゲーテ『色彩論』（工作舎、一九九九年）などがある。

西谷啓治と西田幾多郎

高橋 お年を召されてからも、あいかわらずご活躍されていて、また最近著作集^{〔1〕}も完結されて、おめでとうございます。

上田 ありがとうございます。

高橋 今日は先生のご専門の宗教学についてもおいおい伺いたいのですが、その前に、先生は古き良き京大のことをご存知の少ない方ですので、まずその頃のことを伺いたいと思います。先



〔1〕『上田閑照集』全十一巻、岩波書店、二〇〇一―二〇〇三年。

生は一高のご出身でいらっしゃいますが、そこから京大に来られた理由は何なのでしょう。

上田 これは非常にはつきりしているんです。私が一高に入ったのは昭和十八年ですね。一高に入った昭和十八年の秋に講演会があったんです。その時に、西谷啓治先生が講演者として見えたわけです。その時、そういう看板が出たんですが、当時は西谷啓治という名前も知らないし、どういう方かももちろん知らない。しかし何かに誘われたというか、会場に行つてしばらく待ってたんですよ。すると先生がすつと入って来られた。それが着物を着て、袴も履いたお姿で。それは当時としては考えられないこと、ありえないことだったんですよ。戦時中の非常に厳しい時代だから、みんなもんぺを着たり、防空頭巾をかぶったりしていてね。町で普通に着物を着て歩いている人を見かけるといことはめつたになかった。けれども先生は着物姿ですつと入ってこられた。その趣とかのか、それが何とも言えない感じだったんです。まったくその当時の雰囲気を超えたような感じで、しかも別に奇妙な感じでもなかったんです。むしろ非常に自然な感じでした。これは後からわかったんですが、先生は当時、だいたい着物を着ておられたんです。そのように世の中と無関係にすつと入って来られたんです。それを見たときに、私の中にある感じが生まれたんです。その日の講演で先生がどういうお話をされていたか、もう完全に忘れてしまいましたが、その印象



写真1 三高記念碑
第三高等学校本科予科解散記念碑

は非常に強くて最後まで残りましたね。それで、いよいよ大学に行くことを決めるときに、もうまったく迷いもせず、京大に行つて西谷先生のところで哲学を勉強しよう、そう思つて京大に来たんです。ところが、私は西谷先生を哲学の先生だと思つてたんですが、京大に来てみると、西谷先生は宗教学の先生でした。それじゃ、宗教学にしようと思つて断りました。ですから結局、西谷先生が着物を着て、一高の教室にすつと入つて見えた、その姿に本当に誘われて来たわけですよ。今から考えると、本当に一種の奇縁というんですかね。あと、どういふすばらしい先生なのかということも分かり、自分の意志もだんだんできてくるにつれて、本当によかったなあと思つて、私には非常に恵まれていたと思います。

高橋 私も西谷先生のご自宅には、一度伺つたことがあります。先生のお宅は大学のすぐそばにございましたので、よく教養部のなかに散歩されていました。私がお伺いしたときも着物でいらつしやいましたし、教養部の中を着物姿で散歩されているときも、とても懐かしそうにあたりを見回していらつしやいました。

上田 そうでしょうね。先生は卒業されて、まもなく三高で教えておられました。ドイツ語と何かだったと思います。今はもうすつか



写真2 旧正門
旧三高の正門 のちに総合人間学部正門としても使われた。『京都大学百年史 写真集』より

猛虎一聲山月高

図3-1 西田幾多郎（一八七〇—一九四五）の書。「猛虎一聲山月高 寸心」

すなはち

図3-2 同じく西田の書「廓然無聖 寸心」

り変わってしまいました。三高の古い建物は相当に長いこと残っていたのでね。

高橋 残っていましたね。私も京大にまいりましてからちょうど三〇年経ったんですが、来た最初の頃は本当に古い建物が残っていました、そのときの印象が強いですから、いま、総人のキャンパスを見ると、なにか違和感がありますね。先生のお話を伺いますと、西谷先生はお亡くなりになるまで、なにか世俗を超越されているような方でいらっしゃったんでしょうか。

上田 完全にそうだったと思いますね。そうでありながら、歴史の問題、その頃の世界がどういう時代であるかという点に関しては、非常に深い関心を持っておられたし、そういうことについて書かれた文章や論文も多いんです。世界が現在どうなっているかということについての関心は非常に強い。超越しているようであるけれども、世界の動きに対しては非常に強い関心を持っておられるというのは、西田幾多郎先生もそうでした。私が猛烈に感銘を受けたことの一つに、日露戦争当時のエピソードがあります。明治三八年の一月五日だったと思うんですが、日露戦争で旅順が陥落して、日本中大騒ぎして、それで金沢でも、提灯行列するということがあったんです。そのとき西田先生は、金沢の第四高等学校の講師をしていらした。その日の日記がね、じつに感銘深いんです。その頃はよく坐禅をしておられて、午前打座と、午後打座、夜打座と。そして、言葉通りには再現できませんが、「本日は旅順陥落のお祝いにちょう

ちん行列するとは、まことに浮薄」。軽薄ということですね。「幾多の犠牲と前途遼遠なることを思わずして、こんな大騒ぎするとはなんと情けないことであるか」とはつきり書いてあるんです。その翌日の日記に、やっぱり四高でも行列があるが、それには参加しないと書いてある。そして事実、一日坐禅をしているわけだから、本当に世の中からかけ離れているようなんですが、かえって歴史の流れというのか、歴史のプロセスを見るスケールが大きくなっているんです。前途遼遠と言っておられるのは、実際日露戦争に勝つてもうこれで歴史が終わりというのではなくて、その後もずっと次々に色々なことが起こって、結局昭和時代に入り、敗戦まで行くわけです。もちろん敗戦で終わったわけではありませんが。歴史には長いスケールの変動があつて、一時旅順を占領したというだけで、これだけ大騒ぎするとは…。

高橋 それは西田先生が宗教学をされていた、坐禅をされていたからなのか、ドイツなんかをご存知だったからですか。

上田 西田先生は全然外国に行っておられない。ですからまたすごいんですよ。当時の日本人としてはめずらしいほど、ギリシアの哲学から中世、それから現代の——当時の現代といったら、ベルクソンとかフッサールですね——基本のテキストをきちんと四高の頃によく勉強しているんですよ。だからヨーロッパの精神史の背骨みたいなものを非常にはつきりつかんでおられるんですね。それから、西田先生は明治の三年の生まれですから、明治二〇年頃までの日本のヨーロッパとの接触、ヨーロッパからいろんなものが入ってくる、そういう新しい日本の成立を実際に経験しておられる。それで世界に対する関心というか、センスは非常に強いんですね。だから坐禅をして一切から離れるということ、歴史ということに深く関心を持つということが別々のことではない。これが、人間のあり方として、根本的というか、最も大切なことだと思えます。ちよつと考えると、坐禅なんかするとこの世から離れてしまうように思われます。一方、歴史のことにあれこれかかわる人は、歴史のもつ長いスケールで動く意味みたいなものをあまり深く考えもせず、非常に局所的な出来事を針小棒大にしてしまふばかりか、多くの場合それにイデオロギーを入れて判断してしまふ。西谷先生の場合にはドイツに留学していたから、ヨーロッパというものを身をもって経験して

(2) 俗称「四高」ちなみに「二高」は後の東京大学教養学部、「三高」は後の東北大学教養部、「三高」は最初は大坂にあったが、後に京都に移り、戦後、京都大学教養部となった。

(3) 打座は坐禅のこと。

います。また先生も早い時期に出した本はアリストテレス研究です。アリストテレス、プロティヌス⁽⁴⁾なんかも早くから研究しておられるし、中世だとエックハルト⁽⁵⁾、近代だとシェリング。シェリングの『自由論』⁽⁶⁾の翻訳を岩波文庫でされたのは、二七歳なんですよ。

高橋 そんなに若かったんですか。あれは今でもいい本ですね。

上田 ええ、若かったんです。そういうふうにして、ずっとヨーロッパの思想の要みたいなのをテキストを通してはつきりと見ていくということと実際に経験しているということがあるんですよ。

高橋 シェリングのドイツ語はかなり難しいですね。

上田 難しいですよ。難しいけれども、昔の高等学校の学力というのは、今からだと想像もつかないものだと思うんですね。私のときは、もう戦争中ですから、時間数も減りましたが、私の一学年上くらいまではね、たとえば語学は第一、第二とあるでしょ。第一外国語の場合は一週間に一三時間あるんですよ。それから第二外国語でも八時間。高等学校三年のうちにね、もう語学力はすごいものになるんですよ。しかもその語学力っていうのは単なる語学力ではない。西谷先生なんか『ツァラトゥストラ』を高等学校の頃にドイツ語で読んでおられるというふうですね。だから思想的なテキストを読む力というのは、もう高等学校の頃に、十分に行けるところまで行っていたんですよ。

戦後日本に対する反省

上田 よく戦後に、日本人は外国語を話せないとか、話せる外国語でなくちゃいけないとか、言われるようになったけども、私はこれはおかしいことだと思ってるんですよ。というのは日本人が日本語で自由に喋れたって、物を考えているっていうわけではないですよ。ところが、テキストを読む、しかも外国語で、たとえばアリストテレスを読む、プラトンを読む、トーマス・マンを読むといった形でヨーロッパの思想に触れる場合には、考えられないほどの深い理解が生れてくるんですよ。しかもヨーロッパの思想には、こう考えなければならぬという思考の筋道がある。思想の基本をきちんと知るといことはヨーロッパを理解するためにとっても大切なことだと思うんですよ。外国のものを食べたり、外国の高級服を着たり

しても、そんなことだけではいざというときにどうすべきかわからない。現在の国際的な政治問題の背景にだって、そういうことがあるりますしね。私はだんだんと年をとるにつれて、たとえ外国語が喋れなくても、本だけでじつはとても深いところまで異文化を理解できるんじゃないかと考えるようになりました。異文化理解が大切だつてよく言われますが、外国人とちよつと話をしただけで、ましてちよつと外国に行つて、観光して、何かお土産を買つて、そんなことで異文化が分かるものじゃないですよ。その点を履き違えている日本文化は、全体がもうどうしようもないほど平べったくなつてしまった気がします。

高橋 たしかに外国語をべらべら喋るだけで、自分は外国通だと思つている人、外国の演奏会をたくさん聞いたことがあるというだけで、自分は外国通だと思つている人、外国の食事をよく知っているだけで、自分は外国通だと思つている人は多いですね。特に上田先生のように外国語に堪能な方にそう指摘されると、わが身が恥ずかしい思いがする人が多いだろうと思います。

たしかに外国語は話せたほうがいい。しかし大事なものは、その話に内容があるかどうかということなのでしょう。その点、西田幾多郎の著作を読んでいると、あの方は、当時のドイツの最先端の哲学を意識しながら、ヨーロッパを相手にしてものを書き、自説を主張しておられる。ところが今の日本の哲学や文学研究の多くは、外国の説の紹介の域を出ていないものが多く、欧米の思想と真剣勝負している人が少ない。

上田 それは完全にそうですね。

高橋 今の学者は国際的に通用するようではなく、まず日本国内向けに書く。

上田 明治時代とは違い、日本国内に大学がたくさんでき、それらの大学にどこにでも哲学の先生が要るといふことになる、やはり日本人だけの哲学の世界というものができあがつてしまい、日本語で論文を書いていけばいいという形が成り立つ。しかも日本や東洋の精神的な伝統に無縁なまま。それにともない、哲学的な思想の本当の意味が問われることがあまりなくなつちやうたんですよ。日本でしか通用しない論文を書いて、日本で就職し、それで生活ができるということになるんですね。学問というのは根気のいる仕事で

(4) 三世紀のローマ帝国で後に新プラトン主義と呼ばれる哲学体系を樹立。ヨーロッパ精神史に多大な影響を与えた。主著は死後に弟子が編纂した『エンネアデス』。

(5) 一二六〇―一三三八年。ドイツ神秘主義の代表的思想家。ドミニコ会に属し、パリ、シュトラスブルク、ケルンなどで活躍。その思想はトマス的なスコラ哲学を基礎としながらも新プラトン主義的色彩を強く持つ。没後に教会当局から異端宣告を受けた。

(6) シェリング『人間的自由の本質』岩波文庫、一九五一年。

すが、一生のあいだずっと勉強しつづけるのはなかなか難しく、途中で勉強を放棄してしまう学者も多いですね。ところが勉強しなくても、生活のほうは保障されている。

高橋 今、文部科学省は学問の国際化ということを言っていますけど、むしろ明治時代の大学人のほうがはるかに国際化されていて、外国に行っても対等に渡りあえる人がかなりいた。語学なんかでも、今の時代はできなくて困っている人が多いですけども、昔はできて当たり前だったんですね。

上田 本当にそうなんですね。どこか底が抜けちゃった感じがしますね。

高橋 やはり学問を支える根底の姿勢が、あまりにも浅薄なものになってしまった。

上田 そうですね。しかもこれは小学校教育から始まっている。戦前への反動というのはもちろんあるけれども、しかし戦争を始めたことについてだって、日本では戦争責任ということを本当には追求していませんよ。戦前には「一億総辞」だなどという、戦後になると、軍国主義や軍部が悪かったという言い方で済ませちゃってね。ところが実際にはその時その時に決定する責任者がいて、そういう人の考え方から事態が展開してくることが多い。それなのに、そういうことをはっきり追求することもしないんですね。ドイツなんかは、その点ははっきりしていると思いますよ。

無責任なのは、戦後も同じですよ。戦争が終ると、とにかくもうこれでよくなるというオプティミズムみたいなものが支配してしまっただけで、人間であればそれだけでも立派なものだ、あまり訓練したり、教えたり、強制したり、命令したらいかんと、ほっとけば人間はよいものになるという考え方ですね。そういう考え方が戦後の日本を支配していた雰囲気だったんです。戦前がおかしかったのと同じくらいおかしい。当然のことながら、それは個々の人間に往々にして悪い影響を与える。人間というものはほっといたら何をするかわかんない。そういう考えが始めから全然ない。だからだんだん今みたいになってきてしまって、今となってはもうどうしようもない。これはもう単純には改められませんよ。

高橋 私なんか先生と比べると若い方ですけども、それでも、日本人がこんなに薄っぺらな人間になってしまっただけで、これから先どうな

るんだろうかと思わずにはいられませんね。

上田 昔はそうじゃなかったと思うんですけどね。戦後だと高度成長の頃まで、とにかくみんな、日本をなんとか復興させなければと思って働いてきたけれども、そのときの人たちはみんな戦前に教育を受けた人ですよ。戦前にきちんとした教育を受け、戦前に育った。ところが戦後になり、人間はほっとけば立派なものになるんだという教育観に育てられた人間が、二代目、三代目を迎えるよね。

高橋 人間、どんどんダメになってゆきますね。

上田 だって毎日何か起こっているでしょう。昨日だって、親に学校に行けって言われて、腹が立って火をつけるなんて事件が起きたでしょう。こんな事件がまるで当たり前のようになりつつあった。でも、本当は学校に行けと言うほうが正しい。あまりにも短絡的な犯行ですね。

高橋 今のゆとり教育とか総合学習なども、先生がおっしゃった、ほっとけばいいんだという考え方ですね。

上田 本当にまったくおかしい。ほっといて生徒に何か自分ですることがあれば意味がありますよ。ところが何もすることがないから、おかしくなる。教育の根本というのはやっぱり、人類が何千年にもわたってさまざまなことを経験し、さまざまなことを学び、さまざまな成果を積み重ねて今日にいたっているのだから、人類がこれまでに獲得してきたものを「学ぶ」ということをしないと、もう一歩先へ進むということもありえないはずでしょう。そこどころがどうもはつきりしていない。しかも、はつきりしていないのは、文部科学省だけじゃない。文部科学省のやり方というのは、何とか審議会というのを作り、そこで議論されて出てきた審議会の結論を頼りにする。その審議会には大学教授などの専門家が集まるんですが、彼らの考え方だって少しもはつきりはしていませんよ。

高橋 西田先生が、旅順に日本が勝ったとき皆が浮かれていて、こんなものではないかと思われた、という話が先ほど出ましたね。あのときにはむしろ政府のほうブレイキをかけていて、マスコミやジャーナリズムのほうで浮かれていた。だから戦争責任だって、政府の責任だけではなくて、「鬼畜米英」という当時の風潮を醸し出したマスコミの責任もずいぶん大きいでしょう。

上田 今でもそうなんだけど、ライブドアのことなんかも含めて、



80 西田幾太郎 NISHIDA KITARO 1872-1945

西田幾太郎没後50年記念切手 (1995年)

マスコミの影響力は、今ではもう抵抗したいものになっていますね。そしてだんだんと刺戟的な記事が新聞や週刊誌に溢れるようになっていく。それ以上に、テレビの影響力には抗したいものがあると思います。たしかに新聞には今でも論説のようなかたちで、非常にしっかりした考え方が出ていますよ。ところがそういう議論は、新聞を通して刺激を受ける人たちには、日本では全然通じないんですよ。そして同時に政治や経済に対しても、まったく力を持たないんです。ただ新聞にいい意見が出ているというだけで、社会の現実に対して意味を持ってこない。

高橋 新聞の場合ですと、例えば論説の欄には、あるいは社説の欄には、消費税は導入せざるを得ないとか、ライブドアのようなものは気をつけなければならないとか、書かれているけれども、実際に一面や社会面に書かれてあるのは、消費税値上げはけしからんだとか、ライブドアなかなか面白いだとか。

上田 どんどんそうなっていますね。

高橋 一般の人が読むのはそっちのほうですからね。

学問をするとは何か

上田 そういうわけで、私は西谷先生が着物ですうっと入ってこられたときの印象に誘われて京都に来て、実際に西谷先生のもとで学ぶようになりました。そこで何を経験したかという点、そこで初めて本を読むとはどういうことを学んだんです。戦後直後だから大学のなかもがたがたしていたし、授業もきちんとあるというわけではなかったんですが、一〇人ほど先生にお願いして、テキストを読んでいたんです。そのテキストは、ヘーゲルの『エンチクロペディー』の最初に出てくる『ローギク（小論理学）』なんです。当時、そのローギクのところだけが復刻版になって出たんです。

高橋 普通の授業とは別になされていたんですか。

上田 普通の授業とは別にしていただいたんです。先生のお宅でしたこともありすが、あちこち場所を移していただきました。毎週一回なんです、だいたい一回が、六時間から八時間続くんですよ。そしてそれだけ時間をかけて、一ページも進まないんですよ。とにかく訳せばいいというやり方ではなくてね、一つ一つがどうい

う連関になっていて、どういう言葉がここに使われているかということとをみていく。そこでびっくりしたのは、英語の *and* に当たる *und* というドイツ語、これは何でもないような言葉なんだけれども、この *und* はどうして *und* なんだと聞かれましたね。そういう風に本当に一語一句をおろそかにせず、しかも言葉の意味ということよりも、その思想を全体の脈絡のなかでどのように読むかということに重きを置く。その読み方によって、全体の脈絡がはっきりしてくる。私が高橋の本の読み方というのを習ったのはこのときが最初でした。これは私のその後の勉強の大きな基礎になったと思います。

高橋 ヘーゲルの『精神現象学』や『エンチクロペディー』は、内容がものすごく圧縮されているし、しかも先人の説が随所で暗に批判されていますね。そういうことをきちんと教えてくれる授業を、どこがしているんだろうなと思いますね。

上田 そういう基本的なテキストを使って、本格的な授業をするということがだんだんなくなってきたんじゃないでしょうか。大学そのものの性格が変わってきているから、やむをえないという事情もあるでしょう。しかしもしも学問をするということに意義があるとするれば、それにふさわしい訓練を経なければならぬということとは、はつきり言えると思うんです。ところがそれを大声で言うて人を動かすということは、大学のなかでも難しくなっていますね。だから少なくともそう考える人たちが集まり、眼に見えない共同体のようなものとして仕事していくしかありませんね。それは現在の



写真4 西谷啓治 (1900-1990)

社会にすぐに影響を与えるようなものではないけれども。今のよう
なあり方は、絶対に長続きするものではない。どこかで大きな破綻
が来ると思うんです。そして破綻が来て初めて、ああ、あれではい
けなかったんだということが社会的にも実感される。そうなってか
らようやく、学問にはやはり地道な努力が必要だったんだというこ
とが分かってくる。

高橋 たしかに先生のおっしゃる通りに、今、大学では昔のような
地道な根気のいる教育は行なわれていません。しかも学会そのもの
も肥大化し、学会できつちりとした議論をすることも少なくなつて
きてしまいました。本当にこじんまりとした研究会でも開かないか
ぎりは、勉強が身に付きませんか。

上田 そうそう。だから五人でも一〇人でもかまわないから、本
に共鳴する人たちが集まって地道な研究を続けていくことが大切だ
と思うんです。そうすると、それを伝え聞いた人々が参加したいと
いう形になってくるでしょう。大学はともかく、個人のレベルでは
これではいけないという気持ちを持っている人が実際にはかなりい
るはずです。だからそういう人が集まって勉強できる場というもの
が必要だと思います。それは、誰か一人が発案し、何人かで集ま
って、本を精読していく研究会のようなものではないかと思うんです。

高橋 そういう研究会は私も開いています。東京では三五年前から、
京都では三〇年前から月例会を開き、いまだに続けておりますけど
も、そこには八〇歳くらいの先生も参加されています。たとえば、
二格支配の前置詞のはずなのに三格を使っている箇所があって、お
かしいですね、なんて言うのと、高橋さん、何をおっしゃっているん
ですか、アーデルングの辞書に、これは一七八三年から七年間は三
格支配で使われていたって書いてあるじゃないですか、アーデルン
グの辞書ぐらい調べてこないか、研究会に参加する意義はないでし
ょう、そんな風に叱られてね（笑）。そういう厳しいトレーニ
ングは、私のような年齢になってもすごく勉強になりますね。

上田 そういうトレーニングは個人的な研究会ならば可能なん
です。制度のなかでは今はできなくなっている。それだけに、そうい
う研究会を積極的に作って、そのなかで勉強していくということが
大切になる。そういうグループが実際にあるということが、じつは
社会を本当に支えていると思いますしね。



写真5 下村寅太郎 (1902-1995)



写真6 高坂正顕 (1900-1969)

高橋 学会なんかでは、あなたの発表は間違っていますよと、どこ
まで言ってよいのか分かりませんしね。言われた人は傷つきま
すし、言われた人の先生に恨まれるなんてこともありうる。

上田 そうですね。ところが小さな親しいグループ内では本
当の議論ができます。西谷先生の読書会では、とにかくみんな先生に圧倒
されながら参加していましたね。先生に誰かが当てられるとみんな
冷や汗をかくんですよ。次には自分が当てられやしないかとね。で
もそれ以外に、友だち同士でしていた研究会というものも、とても
意味がありました。本当に自由な議論ができましたし。

高橋 西谷先生はそれだけ深くドイツ語の一語一句の読み込みをな
さることができた。西谷先生はドイツ留学中にそういう力を身に付
けられたのでしょうか。

上田 ご自分の力だと思っていますよ。当時の大学の制度が今よりもき
ちんとしていたということはたしかですが、しかし勉強するとい
うことは自分がすることだから、みなさんそれぞれすごい勉強
をしておられました。西谷先生だけじゃありませんよ。下村寅太郎
先生にしてもね、高坂先生にしてもね。考えられないほど勉強し
ておられたと思いますね。

高橋 下村先生には一度お目にかかったことがございます。何でこ
んなに何でもご存知なんだろうと思うくらい博識でいらつしやる。
私がお会いしたときはもう最晩年でいらつしやいましたけども、記
憶力もずいぶんしっかりされていましたね。

上田 若いときに頭に入ったものは、ずっと残るんだと思いますね。
それでね、その小さな読書会においても、西谷先生は——『小論理
学』自体は小さいテキストなんです——いつも大きな『大論理学』
を持って見えて、必要なところはそこから引用されていましたね。

(7) Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart. 4 Bde. Leipzig 1793.
(8) 一九〇二—一九九五年。哲学者、科学史家、ルネサンス研究者。西田幾多郎、田辺元に師事する。西田哲学を基調として精神的視点を導入し、西洋哲学、科学論、芸術論に新境地を開拓した。ライプニッツ、レオナルド、ブルクハルトらの研究で有名。
(9) 一九〇〇—一九六九年。哲学者。戦争協力の哲学を説いたとして、戦後の一時、公職を追放された。解除後は京大教授職などを経て東京学芸大学学長。カント哲学と西田哲学の強い影響を受け、哲学の京都学派を担った一人。著書に『民族の哲学』『歴史的世界』など。

そんなふうに、先生はじつによく読んでおられました。どうしてあれだけの勉強ができたんだろうか、と時々私が不思議に思うくらいにね。時間というだけでもないと思うんですよ。先生のご家族や小さなお子さんはみんな世間と同じ時間帯で生活していて、朝起きて学校に行く。ところが先生は一晚中起きていて、朝になってから寝て、昼過ぎ頃にやおら起きてみえる。だから奥さんにしてみれば、子供たちに対する三度の食事と先生に対する三度の食事と別々に用意しなければいけないわけですよ（笑）。しかしやはり先生の勉強・生活を見ておられて、奥さんも自ずからそれを助けようというお気持ちになる。

西田・田辺記念講演会と鈴木大拙

高橋 先生が京都大学に入られたときには、宗教学には学生は何人ぐらいおられたんですか。

上田 みんな兵隊から帰って来て、年齢の非常に違うものが一緒になるから、私の頃は割合に多かったですね。相当いましたね。

高橋 そのうちの一部の方だけが先生の家で研究会をされていたんですか。

上田 そうです。宗教学にいた人が同じように勉強するわけではなく、先生のところにかがったのは、ごく一部でした。当時は、学生もてんでバラバラでした。あれもおもしろいことでした。

高橋 京都大学には放任主義というものが慣習としてあると思いますが、西谷先生は気に入られた学生だけはみっちりトレーニングされた。そういうことですか。

上田 そうです。でも、先生が気に入った学生を集めたわけではなくて、学生のほうが勝手に集まってきたんです。

高橋 先生やってくださいと。

上田 そうです。だから最初は何人かでお願ひしました。そうしたら、それを耳にしたそれ以外の学生が段々参加してきたんです。決してわざわざ先生が集めたわけではないんです。

高橋 その会は西谷先生が定年退官されてからも続きましたか。

上田 続きました。ことに定年退官になってからはずっとでした。定年退官後に新しく始まって、先生が亡くなられるまで続いたもの

に、西田哲学研究会というのがあります。西谷先生が退官後に行かれた大谷大学で、その頃習っていた学生が三、四人集まり、先生に西田哲学のテキストを読んでもらうとお願いして始まったものです。それを伝え聞いてだんだんいろんな人が参加してきて、私も途中から知って参加したんです。それは二〇年ほど続いて、先生が亡くなられた後も、今まで続いているんですね。だから参加する方にもそれなりの自発性が必要で、それがないとなかなか続かない。

高橋 西田哲学研究会は、今の西田・田辺記念講演会とは別ですか。

上田 西田・田辺記念講演会というのは、それとはまた違うんです。京都の妙心寺のなかにある霊雲院に、西田先生のお弟子さんたちが毎年一周忌などに法要をする西田先生のお墓があります。西田先生のお墓は、鎌倉の東慶寺と故郷の宇ノ氣とその霊雲院の三ヶ所にあるんですが、西田先生が亡くなられたときに、弟子たちがそのお墓を建てて、そして毎年弟子たちがそこで法要をしたんです。それがただ法要だけではなくて、毎年西田先生を記念する講演会をしようということになって、講演会が始まったんです。一年に一回ね。

最初の講演者が鈴木大拙だったんです。鈴木大拙は西田先生と同じ年に生まれて、生まれも同じ金沢で、四高で親しい友だち同士だったんです。ところが大拙先生の方はお父さまが亡くなられて、全く学費が出せなくなり、中退された。西田先生の方は四高とのあいだに悶着を起して、退学されたんです。これは変わった悶着で、最初の第四高等学校というのは、加賀が地盤になっていて、学生同士、お互いにみんな親しい気持ちを持っていたんです。加賀百万石というのは、江戸幕府の中でも特に大きい雄藩でしょう。明治政府が成立して薩摩と長州が政府を握ると、加賀百万石は目の上のたんこぶになってしまったんですね。あまり政府の言うことも聞かないし。そこで明治政府が断固として、薩摩の方から校長始め、巡査なんかしていた人も四高の教師として連れてきたんです。四高の教員をそうやって薩摩間で突然固めたんです。それでもともと加賀の独自の雰囲気や謳歌していた学生たちと、学校とのあいだに対立が生まれてしまった。西田は目を患ったということもあるんですが、何も勉強は学校でしなきゃならんというものじゃない、自分ひとりでやったほうがいいと思い、辞めちゃったんです。

そんなことがあって西田と鈴木大拙の二人とも退学してしまっ

た。しかもやがて二人とも東京に出てくる。そういうことがあって、二人はずっと親しかったんです。それで西田先生がなくなった後の最初の講演——そのときは、西田先生の号である「寸心」を取って、寸心会講演会といったんです——が鈴木大拙で、後はずっと当時の先生の古い弟子たちが寸心会講演会をやっていた。ところがやがて田辺元先生が亡くなられると、今度は田辺先生の弟子たちが田辺記念講演会というものを企画し、一年に一回ずつ田辺記念講演会を始めました。だからある期間、寸心会の記念講演会と田辺先生記念講演会が年に二回あったんです。ところがそれが相当に長く続き、ある時期になってから、一緒にしようということになって、西田・田辺記念講演会という今のような形になったんです。ですから今は一年に一回、その世話係は今の（京都大学の文学部の）日本哲学史の講座がしています。

高橋 鈴木大拙先生のお墓も東慶寺にございますね。西田先生が先に亡くなられましたけども、いわば死んでからもお友だちで。

上田 これは本当にそうでした。西田先生と大拙先生はただ個人的に親しいというだけでなく、思想的なつながりが色々とありましたね。西田先生は哲学だけでも、しかし若いときからずっと禅をしてもらった。それをヨーロッパの思想と対話できるような形の思想にだんだんと形成していく。鈴木大拙の方はやっぱり禅から出発したんだけど、若いときにアメリカに行つて、アメリカのオープン・コート社という雑誌社の編集員兼校正係をしていたんです。オープン・コート社というのは一種の思想雑誌を出す出版社で、しかも経営者が老子のような東洋の思想に関心を持ち、中国の思想書の翻訳なんかを出していたんですね。

大拙はそこに一〇年いたんです。その間に西洋の社会の仕組み、ことにキリスト教という宗教の在り方に直接触れた。やはり元々は禅から出発しているから、キリスト教と自分のあいだに何か一つのギャップがあると感じたんですね。それをそのままにしておいては相互理解できないわけだから、このギャップにどう橋渡しをすることができるか、それが大拙の思想的な課題だったわけですね。それを大拙は「禅思想」と呼んでいます。禅思想というと一般的な言葉のように思われるけれども、そうではなくてね、「禅思想」という独特の、一つの思想の形態を大拙は展開しようとしたのです。その

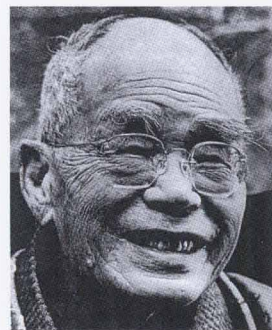


写真7 鈴木大拙 (1870-1966)

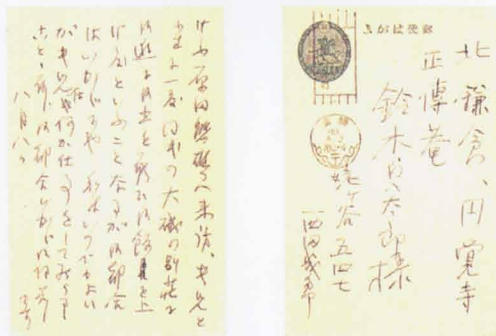
「禅思想」と西田先生の哲学とが、次元は違うけれども響き合っている。だからいつも西田先生は大拙に聞く、大拙は西田先生に聞く。それぞれがやはり違う深度で、一緒につながっている。これはね、思想的に見ても大きな出来事だったと思います。

高橋 鈴木大拙先生はずいぶん長生きされたので、私の学生時代にもご存命で、私の友だちなんかも大拙先生に可愛がられて、時々先生のところに遊びに行っていました。

上田 たしか九六歳で亡くなりましたね。私がお会いしたときは九五歳のときでした。そのときは『臨済録』の臨済の記念の年だったんです。生誕千二百年だったか没後千二百年だったか、そのどちらかでした。そこで大拙先生に、臨済と『臨済録』のお話をしていたということ京都の禅文化研究所が考えて、それで私が先生をお訪ねしたんです。ある日の午前と午後ずっと先生に色々なことをお尋ねしたんですけれども、当時私はまだ若かったんですね。それでも先生の方がはるかにしっかりしておられた感じでした。亡くなられたのがその翌年なんです。これは本当に突然の事故というか、腸捻転で突然に亡くなられたんです。

京都大学での学び

高橋 京大といえますとよく自由な校風といいますが、先ほどのお

写真8 大拙宛の西田の手紙
1935年8月8日付けの西田差出・鈴木大拙宛葉書『西田幾多郎と学習院』より

(11) 中国臨済禅の開祖、九世紀の臨済義玄の語録。現代の本は宋代の再編で、臨済禅の基本的古典。

(12) 主に臨済宗系の禅文化の研究。京都の花園大学内にあり。

話を伺いますと、結構トレーニングが厳しかったようですね。

上田 これは制度的にトレーニングが厳しいというわけではないんです。制度的にいうと、それこそいい加減だと言えるんです。けれども先生の方から教えるというのではなくて、学生の方から勉強したいと思って、先生のところに集まるという場合には、これは猛烈なトレーニングになったと思います。これは西谷先生だけじゃなく、田中美知太郎先生など、ギリシア関係の人たちにとっては同じだったと思いますね。

高橋 吉川幸次郎先生も。

上田 そうそう。もちろん大学というと、講義や演習にある程度そういう訓練があるから、それなりに厳しいものだと思いますけれども、しかし別に出欠を取るわけではなく、出ない人はいつまでも出ない。私はね、おもしろい経験があるんです。どういうわけか大山先生の授業に出ようと思ったんです。なんとなく大山定一先生がおもしろい感じがして、いいなと思ったものですから。ところが大山先生というのはいつ授業するのか分からないんですよ。

高橋 年に二〜三回だったといわれていますね。

上田 それがまたおもしろいんですよ。それでもちつともかまわないうのか、つまりそういうことが大学でありうるんですね。学生の方は、今日は授業があるんだと思って行くんです。それで大分長いこと待っていると、事務室の人が今日は授業がありませんと伝える。するとそのときはがっかりもするんだけど、同時にまたほっとするんです。がっかりしながら、うれしんですよ。次の週になると、また授業を聴きたいと思って行くんですよ。そうするとまた同じように今日はありませんという連絡が入る。そうするとがっかりすると同時にうれしい。大山先生のものをいろいろ読んで、とっても文章もいいですね。だから大学の場合には、単に教室での先生と生徒というだけじゃなくね、思想家と思想家の卵みだいのとの出会いだと思うんです。狭い教育の枠ではなくてね。

高橋 それはおもしろいですね。つまり一般的に大学というところは、組織や制度として教師が学生に教えるわけですけども、そうじゃなくて学生の方から先生に声をかけ、心あるものが先生に近づいていく。そこまでやって先生のところまで行く人はそれなりのものを持つていて、そういう学生が来ると、先生も見所のあるやつがや

ってきたと歓迎し、年齢はだいぶ違うけれども、一人前に扱う。

上田 それによって今度は先生の方も真剣になるんですよ。そうじゃないと先生の方もなまくらになってしまう。もちろん制度だから、ちゃんと先生がいて、生徒がいて、授業があるということはどう当然なんです。それだけが大学というのではない。むしろ実質は先生と出会う一つの機会であってね。いろんな授業に出ていて、この先生から学びたいと思ったら、その先生に近づいて、昔の言葉でいうと親炙し、先生から学ぶ。そういう学生がいてこそ先生の方も、さらに自分で勉強するようになる。この制度外で行なわれる交わりの方が、実際には大きな意味をもっている。

高橋 大山先生の場合には、実際にお弟子さんだった人のお話を伺いますと、先生に親炙されていた学生さんたちが一緒に祇園に連れ行ってもらって、そこで人生論を聞かされ、学んだんだそうです。大山先生のお弟子さんのなかには、「ぼくは京大では大学のなかではなくて、祇園でもつばら教えを受けました」と言われる人がいます。それは他大学ではあまり考えられないことですね。

上田 そういう意味では、やはりいい意味で自由だったと思いますね。

高橋 逆にいうと今の京大は、それがなくなりましたね。

上田 私は最近のことはわからないけれども、やはりないみたいですね。西谷先生の『小論理学』を読んでいた読書会というのは、あっちこっちに場所を移しながらやるんです。大谷大学の近所に武藤一雄先生が住んでおられた家があった、そこでやったりして。そういうことはものすごくおもしろいですよね。この場所その場所がまた勉強の趣きになってくる。

敗戦直後の京都大学

高橋 先生はあれは特別な時代だとおっしゃられましたけれども、結局西田先生から西谷先生までの間の方々が、独自の哲学をつくられ、そして学問の真髄というものを知っておられ、それを心ある学生たちに伝えたいと思っていた。それが戦争でみんなだめになってしまったのでしょうか。

上田 戦争でだめになったとは単純に言えないと思います。実際、

(13) 一九〇二—一九九一年。哲学者。専門はギリシア哲学、西洋古典文献学。文明批評家としても著名。著書に『ロゴスとイデア』『善と必然の間に』『プラトン』など。

(14) 一九〇四—一九八〇年。中国学者。中国古典への深い造詣と実証的学問によって『京大中国学』を集成したとされる。『論語』や杜甫などの唐詩の翻訳もよく知られる。

(15) 一九〇四—一九七四年。ドイツ文学者、評論家。日本におけるゲーテ研究の先駆者として知られる。リルケ、マッ、カロッサなどにも精通。

『ファウスト』や『マルテの手記』の翻訳でも知られる。

戦時中といわれる時代における一人一人というのは、以外にも自由だったんだと思いますよ。これは一人一人をとってみると完全にそういうことが言えると思います。たとえば新聞なんかに出ている面からすると、たしかにもうすべてが戦時色一色だと見えるのだけでも、実際に一人一人の人間をみると、おそらくあんまりそういうことは無関係に自由に生きていたという人が多いんじゃないかと思いますね。これはおもしろいところですね。たとえばよく出される例が、永井荷風は戦争に全然関わらず、レコードを好きなように買っていたと言われますね。ということは、そういうことができたということですよね。永井荷風だからそういう風に名前が出てきますけれど、多くの人はみんなそういう生き方をしていた。またそうでないと生きられないということもあった。こうしろと言われたことだけをして生きられるもんじゃないですよ。そういう意味では、決して西田先生のお弟子さんたちの思想が戦時中だから特に制約されていたということは案外ないんじゃないかなと思うんですよ。みんな相当に自由に考えていたと思いますよ。

霧囲気が急にがらっと変わったということはあるんですか。

上田 西田先生のお弟子さんたちに聞いているということはいいんだけど、やっぱり社会や大学に聞いていると、戦後はものすごく変わりましたね。戦後すぐ、私は昭和二〇年（一九四五年）の四月一日に正式に大学に入りましてね。二週間ほどは授業に出たんです。戦争の最後の年でも授業というものはあったんです。私が聴いたのは社会学の白井二尚先生と山内得立先生（とつりあき）のギリシア哲学。その二つでした。そうしたら赤紙が来て、兵隊に行っただけです。だから私が兵隊に行つた最後の世代ですよ。

高橋
どちらに行かれたんですか。

上田 和歌山です。本籍が当時高野山にありましたから。ところが二百人の中隊の中に大学生は二人しかいないんですよ。それでもうに生まれちゃってね。というのは、昔の高等学校、大学の学生にはすぐに将校や士官になる道があつて、ほとんどの人はそちらに行くんです。赤紙をもらつて一卒兵になつて入隊するというのはほとんどないんですよ。私は別に反軍思想をもつていたわけじゃないけれども。そして敗戦が八月でしょ。一〇月の終わりに兵隊から帰つてきました。もうその年には大学に行けないですよ。

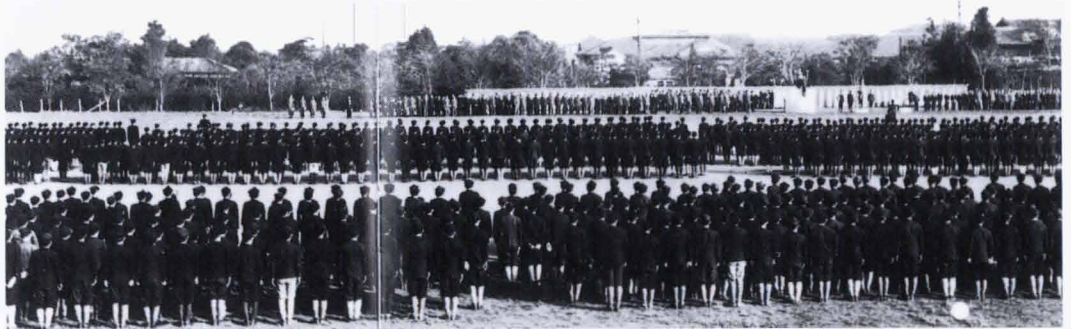
ですから一九四六年の翌年の四月からまた正式に大学に行っただけです。その頃、つまり敗戦の直後から、社会主義系統と、まあアメリカ派というのが、この二つが最初からはっきり分かれていましたね。学生たちはもちろんのこと、社会のあらゆる面でそうでした。これは完全に対決以外の何ものでもないんです。ことに教育の現場でそうでした。当時は日教組と文部省という形でした。だからこういう制度を作ったって、きちんと作れないんです。両方から別々の反対意見が出てくるから。これが日本の戦後のものすごい大きな空白、実際的な空白になる。そして現在になっても誰もその責任は取らない。私も覚えてるんだけど、昔の広い木造の第一講義室というのかな、そこで当時、学生たちのなかでは社会主義派の人たちがものすごい長広舌をふるっていました。

高橋 ¹⁸ それで西田先生や高山岩男先生がだいぶつるし上げられて。

高橋⁽¹⁸⁾ それで西田先生や高山岩男先生がだいぶつるし上げられて。

上田　そうですね。とにかく「京都学派」といつて十把一絡げにされて、もう完全に戦争派だということにされちゃってね。ところが実際西田先生なんかは戦時中は逆に戦争に協力しないと批判されていたんです。だからそういう歴史の状況のなかでの評価、社会的な表面的な評価というのは、全くそのときだけのものですね。

高橋 つまり信念が問題にされたのではなくて、政治に利用された



という感じでしょうか。

上田 完全にそうですね。一方ではそういうことがあって、しかし学生たちはね、また一人一人はまったく違うんですよ。そういうのに完全にコミットしている人と、そうでない人がいて。たとえば、高坂正顕先生ね、戦後すぐパリジになりましたが、お宅が鴨川の辺りにありましてね。高坂先生のところで、最初は三人から五人くらいで、ハイデガーの『Sein und Zeit』を読んでいただいた。そういうところでは世の中とはまったく無関係に学問をしているわけですね。そういうのがあちこちにあったと思います。

宗教学についての歩み

上田 復員してからは、西谷先生がパリジになったということもあり、先生に読書会をお願いしました。これは先生が復学されてからもずっと続きました。そのころ私がよく聴いていた授業というのは、山口益（すけ）という大谷大学から来られていた非常勤のチベット語の講読の授業でした。今から思うと横道だったとも思うんだけど、私は元々仏教に関心がありましたので、山口益先生のチベット語の小さなテキストの講読に出たのです。それに始めると、だんだん面白くなってきて、山口先生が大谷大学でしておられる『中論』²⁰のインドで書かれた代表的な注釈をテキストにした演習なんかにも出て、四年間くらい猛烈に熱を上げてやっただけです。ところが語学というのは——特に古典語は——ものすごく時間がかかるでしょう。ことにチベット語は、今はみなローマナイズするけれども、当時はまだチベット文字でした。チベット文字というのは絵画的な面を写していた。だから猛烈に時間がかかる。四、五年間、西谷先生と高坂先生の読書会には欠かさず出ておりましたけれども、後の時間は他の授業には出ないでチベット語とサンスクリットばかりやっていました。

ところがやはりあるとき非常な不安を感じて、一体私は何をしようとしているのか、というのが自分への大きな問いになりました。というのも、仏教学を自分の一生の仕事にするのならいいけれども、そうでないのならこれだけの時間をそれに使っているのはどうだろ

うかと思ったわけです。それであるとき、思い切ってもう一切サンスクリットとチベット語をやめたんです。そのころ、高坂先生にハイデガーを読んでいただいたこともあったし、西谷先生も復学されてからハイデガーの晩年の小さなテキストを毎年読んでおられ、それにはきちんと出ていたので、それでやはりハイデガーを自分でもきちんと勉強しなければいけないと思ったんです。そのうちにだんだんエックハルトに関心を持った。それは、西谷先生が戦後に出版された『神と絶対無』——日本で初めての本格的なエックハルト研究書で、今でも思想的にこれを越えるものは出ていないと思います——という本があって、それを読んだのも大きな刺激になったんでしようね。しかしやはり今から考えると、ハイデガーからエックハルトへ向かうのも、ある種の歴史を遡る筋道になると思うんですね。同時にそのころ、自分でも相国寺の専門道場の居士禅会に加わって坐禅を始めたんです。西谷先生なんか昔参加しておられた居士坐禅会で、自分でもそういうことをしてみたいという気持ちがあつて坐禅を始めました。他方ではハイデガーやエックハルトの勉強をつづけ、そこからだんだんと現在の自分にまでつながってくるんです。そしてそのうち、ドイツに行こう、ドイツにいるうちはエックハルトを専門にやろう、という気持ちになってゆきました。

古今東西の思想の結びつき

高橋 一度お伺いしてみたのですが、ハイデガーとエックハルトはだいぶ違いますし、それらと西田哲学や禅もだいぶ違いますね。先生のなかではそれらはどう結びついているのでしょうか。

上田 私の中では結びついているんです。ただし、すぐに直接結びつくというのではなくて、ある種の立体的な構造になっているんです。西田哲学の出発点である『善の研究』——もう少しあとに「場所」という論文が出て初めて「西田哲学」となるのですが——では、いわゆる純粹経験が出发点になっていますね。純粹経験というのは、テキストの上では「色を見、音を聞く刹那、未だ主もない客もない」と、言われています。普通だと花を見る、音を聞くということは経験の感性的な素材とされていますし、カントなんかでもそうですが、ところが西田は「色を見、音を聞く刹那」というところにすべてが

(19) 一八九五—一九七六年。仏教学者、真宗大谷派僧侶。フランスでサンスクリット語とチベット語を修め、大谷大学、京都産業大学教授を務める。後に大谷大学学長。
(20) インド大乘仏教の代表的論書で、ナーガールジュナ（龍樹）による四五〇の偈頌とそれに付けられた注釈とを合わせていう。インドの中観派と中国の三論宗の中心典籍。クマールラジバ（鳩摩羅什）によって漢訳された。



写真10 九鬼周造の墓に刻まれたゲート「さすらい人の夜の歌」西田幾多郎訳⁽²¹⁾、京都法然院

根底的にこめられていて、それを基礎として全てのものを説明してみようと思った。これが『善の研究』です。

ところが「色を見、音を聞く刹那」にはさまざまな区別も、ましてや説明の手立てというものもない。「色を見、音を聞く刹那」と、全てを説明してみたいという両極端のあいだには、猛烈な落差があるわけですね。この両極端が大切なんです。全てを説明するというのはヨーロッパの哲学の最も基本的な関心です。そして「色を見、音を聞く刹那」というのは、禅のなかで体験されるような最も原初的な根本経験です。西田にとってはこの両方が人間にとっては欠かすことのできないもので、これをつなぐとした。だけれども単純にはつながらない。それがどうつながるのかということを、私なりに見たいと思ったんです。

「純粹経験を唯一の実在として全てを説明してみたい」、これは『善の研究』の序文に出てくる言葉です。「純粹経験を唯一の実在とする」とは、ヨーロッパの哲学で言えば哲学の原理に当たるものです。デカルトでは *Cogito ergo sum* (われ考ふる、ゆえにわれあり)、あるいは中世でいえば *Esse est deus* (有は神なり)。西田において、「純粹経験が唯一の実在である」ということを哲学的原理として、そこから全てを説明してみる、ここまではヨーロッパの哲学と同じ体裁なのです。ところが「純粹経験が唯一の実在である」という根

本命題、哲学の原理は、原理である以上はテーゼの形で出されていくけれども、しかしそのなかにある純粹経験は、「色を見、音を聞く刹那」ですから、まだ言葉がないところ、あるいはむしろ言葉が破られたところになります。だから、ここでは哲学の原理そのものを破るものが含まれている。こういう三つのレベルを想定し、そのレベルとレベルのあいだを展開していくのです。

この展開はヨーロッパの哲学とパラレルです。しかしこの展開は禅の伝統に即して行なわれるんです。禅から出てきたさまざまな言葉があるでしょう。「花は紅」だとか、「水は流れる」といったような言葉がね。ただし「水は流れる」と言っても、禅ではそれは水だけの話ではなくて、同時にそこですべての実在が一拳に言い表されている。これは禅のなかでも一番上のレベルとその次のレベルで現実に行なわれてきたことです。しかし、それと哲学とをつなげるということは西田が初めて試みたわけです。それはやはり、西田が禅をしなから哲学をした、哲学を勉強しながら禅をしたということに よると思います。最初からつながっていたということではない。西田が一〇年間金沢にいた間は、やはり絶えずこの分裂があつたわけで、西田自身もそれに悩まされていたのです。自分自身が引き裂かれるほどに深く。しかし引き裂かれながらも、結局、西田という一人格のなかで、引き裂かれていた両極端が結び付けられ、私の言い方だと、一つの磁場みたいなものが成立し、そこからああいいう独自の哲学の立場が生まれてきたのだと思います。ハイデガーにも基本的には同じような事情があります。伝統的なヨーロッパ哲学の体裁とそれを越えて問題になるところのつながりが、ハイデガーの難渋する思索の場でした。Das Sein (有) を、伝統的な形而上学のように *das Seiende* (有るもの、たとえば「最高の有るもの」とか「究極の根拠で有るもの」としてしまわないで、どのように思索しうるか、それがハイデガーの生涯の間でした。

高橋 それで、言葉の破れたところを言葉にしようとして、ハイデガーの場合には非常に難しい言葉が出てくるわけですね。

上田 そうなんです。そしてエックハルトの場合もそうです。

高橋 でも、エックハルトは、さらに上がありますよ、ということを示していますね。

上田 そう、そう、はっきり示していますよ。「突破」(Durchbruch)

(21) 墓石の側面には左記のように記されている。

ゲートの歌 寸心
見はるかす 山の頂
梢には風も動かず鳥も鳴かず
まてしばし やがて汝も休はん

において、神に対して特に「神性の無」と言ったり、魂に対して「魂の根底」と言ったりしています。そういう意味で、西田哲学をこういう三レベル間のダイナミックな動きと捉えたと、やはりここにハイデガーやエックハルトとつながる道が見いだされてきます。この点を突きつめていくと、「エックハルトとハイデガー」というだけではなくて、西田とハイデガー、エックハルトと禅、要するに、東洋と西洋の伝統の両方を担っているもの同士が相互に照らしあう地点、そういう地点が見いだせるのではないかと思うのです。

言葉にならないもの

高橋 私がしているゲーテもそうなのですけれども、エックハルトといい、ハイデガーといい、禅といい、最終的な地点は言葉にならない、しかし言葉にならないところに一番大事なものとあると言っています。ところが学問の厄介なところで、言葉にならないものは学問の相手にできないんですよね。

上田 そうそう、そうです。だから学問などという以前に、言葉にならないものに触れ、それをあえて言葉にすること、が、本当のことだと思ふのです。言葉にするにも色々なやり方があるでしょう。詩であらわすとか、学問だとか。私はやはり詩のほうが大本に近しいと思いますね。けれどもしかし、学問の意義というものもある。学問の一番大きな意義というのは、全く違ったいくつかの考え方をどう関係づけるかというところにあると思うんですね。ただ自分はどう考えるというのではなくて、自分はこう考える、けれども彼はああいう風に考えている、彼がああ考えるのはどうしてなんだろうと、そこまで言えて初めて学問になる。詩の場合はそうではなくて、ぱっと心に浮かんだことがそのまま言葉になるんですね。

高橋 なるほど。たとえばゲーテですと、自然界やこの世にはどうしても究めたいものがあり、究められないものは究めずにそのまま大事にしておきなさい、と言って済むのです。世阿弥の『花伝書』には花の美しさについて書かれています、花の美しさというものは言葉では言い表せないんだ、あくまで心で会得しなさい、ということになっていますね。茶道や剣道なんかでもそうだと思うのですけれども、結局、言葉にできないものがいっぱいあり、それは言葉

では伝えられない、皆さんそれを身体で会得してくださいというのが、日本の茶道や剣道でしょう。ところが学問のほうはそれを言葉にしようとする。

上田 学問にとっても本当は言葉も、言葉にならないものも両方とも必要だと思うんです。人間として必要だということです。言葉にならないものが大事なのですが、言葉にすることによって、それを忘れる危険性も大きくなりますね。一方、言葉にはならないものを会得しなさいと言ったけれども、会得した人は会得した人で、いわく言いたいものについて何かが言えるようになると思うんです。だからやはり、本当に言葉にならないものに真に触れて、しかもそれが言葉に出てくる、そうなるのが本当だと思いますね。

高橋 それはもちろん最高ですけれども、しかし学問をしていても、言葉にならないものがあるんだということを知っていて学問している人と、それを知らないでしている人とは、ずいぶん違いますね。**上田** これはもう、全く違ってくると思う。同じ学者同士のあいだでも違うし、それこそ話が通じないということがしばしば起こってきますよね。

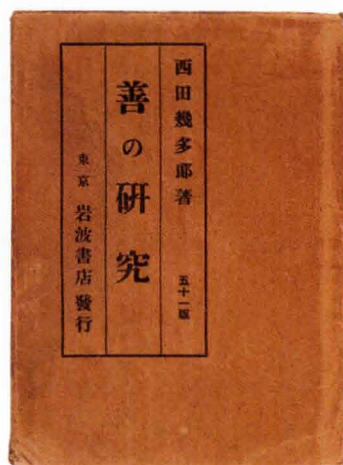
高橋 ドイツの学者なんかでも昔の人のほうが言葉にならないものを知っていたんじゃないかと思うんです。今の若い人は何でも言葉にしようとするでしょう。

上田 言葉というものは一種の記号として、記号の意味や働きもありますが、しかしそれだけではないと思うんですね。言葉には記号性と同時にある種の響きがあり、その響きまで含んでいるのが言葉なんです。言葉のなかにただ記号化して整合化したものだけを見るところというのは、本当はおかしいんですね。

仏教の教えと現代日本

高橋 仏教の教えには、生の根底にあるのは苦しみだという考え方がございますね。それが分かっているかないと宗教学をすることができない。それについてはいかがお考えでしょうか。

上田 これもやはり学問というものの、宗教学をどう考えるかという問題ですね。宗教そのものは目に見えな



西田幾太郎『善の研究』岩波書店、大正10年11月20日、第51版

いものに触れていないと成立しないものだけれども、見えないものに触れて表現されたものは、言葉によって表現されることもあれば、行為で表現されることもある。表現されたものはそれとして客観化できるから、宗教学という学問のなかにはそういう客観化できるものを対象にするものもあって、これはこれで学問として成り立つわけです。しかし、宗教哲学となると、ちよつと違つてきます。

高橋 西田先生や上田先生が坐禪をされながら、ご自分の宗教観を深めていかれる。これは個人的な営みですが、それと別に、宗教学には、宗教が持つ社会的な役割を問うという側面がありますね。

上田 そうですね。いわゆる宗教社会学だけでなく、現在では宗教学が一般に社会的関心に強く動かされているように見えます。

高橋 アメリカのようにキリスト教の原理主義的思想が非常に強い国では、宗教が自国の政治、そして世界の政治まで動かしています。また、吉田神道⁽²²⁾なんかも江戸時代には強い政治的な力を持っていたが、いま、仏教には社会を動かす力がほとんどないですね。

上田 そうですね。ことに仏教集団の場合にはないですね。ない、というよりも、まったく違った形で政治的な力にコミットしているんだと思いますよ。現在の仏教の形態というのはやはり宗団で、この宗団というのは江戸時代の宗門制度、誰もがどこかのお寺に属さなければならぬという制度から来ている。だからお寺が町役場みたいな意味を同時に持っていたわけですよ。お寺と信者、お寺と檀家の結びつきは本来、宗教的でなければならぬですけれど、制度的に保証された結びつきにだんだんお寺のほうがあぐらをかいちゃったんですね。お寺が町役場的な役割を持っていたということ、それは大きな政治的脈絡のなかに位置づけられていたことですよ。それは現在でもまだ残っていると思います。だから、国会議員の選挙の時にある宗団が特定の宗派の人を応援するといったことが起るんですね。

高橋 新宗教の場合にそれは強いですよ。

上田 それは非常に強いですね。新宗教というのは、宗教的な活力というのが新しく出てきて、人と人をつなげるようになった集団ですし、しかもはっきりと社会的立場を持つようとして政治にかかわるんですからね。新宗教の場合には、ヨーロッパの宗教のあり方はそんなに違わないと思います。ただ、仏教の江戸時代からの宗門

的なあり方は、もう存在しないようにいて、実際にはなかなかならないですね。

悪と空とニヒリズム

高橋 先ほども話に出ましたが、西田幾多郎の出発点は『善の研究』でした。他方、西谷啓治先生はシェリングの『自由論』に取り組まれました。『自由論』というのは悪についての本ですね。西谷先生は悪の問題についてはだいたひ話されましたか。ヨーロッパの宗教では、原罪をはじめとして悪は宗教の中心的なテーマだと思いますが、日本ではそういう伝統はあまりないのではないのでしょうか。

上田 そうですね。お若いときに悪をテーマにする論文がいくつかあったと思いますが、それ以後はあまりないと思います。ヨーロッパで悪として問題になってくるものは、仏教で言う煩惱の問題に帰着するでしょう。悪は煩惱から起こってくる。そして煩惱の一番の根本は、仏教で言うところの「我」ですよ。西谷先生はやはり「我」というところまで問題を突きつめていって、そこからその転換として自分の哲学として「空の哲学」を生み出された。しかし単に「空の哲学」を打ち上げるといふのではなく、先生の場合にはニヒリズムという問題が非常に大きな思想上のネガとしてあって、「空の哲学」はそのネガがあつて初めて出てきた。そしてまた晩年は「空」というだけには終わらない。仏教の「空」は「空もまた空なり」と言つて、現実を「妙有・妙用」として捉え直すわけですが、最晩年には西谷先生もそつちのほうに強調点が傾いていく。だから悪の問題から始まつて、ニーチェのニヒリズムに猛烈に共感し、さらには仏教で言う煩惱の「我」が突きつけられた結果、今度は「我」の空しさとニヒリズムとが結びつく。そしてその克服の道としての「空」、仏教で言うところの「色即是空、空即是色」にたどり着くんですね。

哲学者として仏教の根本語を哲学の原範疇にしたのは西谷先生が初めてです。西田先生ももちろん「空」という言葉を論文のなかで使われることはあつたけれど、西田先生の場合には最初からきちんと「絶対無」という言葉を哲学の根本語として出されている。しかし、その時には同時に仏教の「空」をも意味しうるようなもの

(22) 吉田神道 室町期に吉田兼俱がおこした神道の一流派。卜部神道。古代の神祇官であった卜部氏は、平安時代には吉田、平野両社の神官となつていたが、兼俱は、従来の神道に対する卜部氏の神道の正統性を主張し、様々な策をめぐらして吉田家の勢力を拡大し、吉田家は近世には全国の神官のほとんどを傘下におさめた。

として出されたんです。西田先生の場合にはやはり「哲学」という独自のあり方をはっきりと考えておられたから、仏教の言葉をそのまま使うことはなかったんですね。ところが西谷先生がニヒリズムと言われるときには、ニーチェが言う意味でのニヒリズム、つまりキリスト教との関わりのなかでのニヒリズムだけでなく、哲学に關してもニヒリズムと言われるようになった。つまり哲学の言葉そのものが意味を失うところまで行ってしまうんです。

ところが西谷先生は論文のなかで時には「絶対無」という言葉を使いはするけれども、ご自分の立場を打ち出すときには「絶対無」という言葉は使われないんですね。「絶対無」というのは、西田先生がご自分の哲学の立場を確立するために生み出された言葉ですよね。ところがそういう言葉がいったん生み出されてしまうと、後世の人々がそれを使いだすんですね。「絶対無」という言葉自身が一種のジャルゴン（隠語）になってしまふ。だから、西田先生と西谷先生の立場の大きな違いは、やはりニヒリズムにあると思います。西田先生の場合は、ニヒリズムはまだ問題になっていないわけですよ。

西田先生の時代は、ヨーロッパでは新カント派の時代、科学の基礎づけが問題になっていた時代でした。しかし西田先生は、ヨーロッパの脈絡における科学の基礎づけを問題にするのではなくて、まったく違う点から出発したときに科学がどういう形で意味を持つのか、を問題にされたんです。西田先生にとっては、近代科学と大乘仏教との統合ということが根本の関心だったんですね。ところが西谷先生の場合は、もう科学という学問のあり方そのものがすでにニヒリズムの影のなかで捉えられているんですね。簡単に言えば、科学的に見るということは、すべてを殺して見るということです。だからそこで西田先生と西谷先生の立場は非常に違ってきますね。しかし「空」の立場で西谷先生が自分の哲学の立場を出されたときには、西田先生の「絶対無」も生かせるようなものになっています。

学問における師との出会い

高橋 今日お話しをうかがって、西谷先生のような途轍もなく偉い先生がおられて初めて上田先生の学問も可能になったという気持ち

がしきりにします。

上田 私はね、近頃になってようやく西谷先生が本当に偉い人だったなということが理解できるようになった気がしますね。今はまだ、片づけなければならぬ仕事がたくさんあるのですが、最後にはやはり西谷先生のことをきちんとしたいな、と思います。

高橋 先生の第一の恩師は西谷先生だということですね。

上田 そうですね。直接的には西谷先生ですね。けれども、思想の系譜から言うと、西田—大拙—西谷、ということになるでしょうね。これはもうはつきりしています。やはり自分の関心からすると、西谷先生は直接の先生だけれども、西田が西田の時代に持った関心、大拙が世界のなかで持った関心、それから西谷先生が西谷先生の時代に持った関心。これら三つが自分のなかでつながって働いている感じがします。だから、この「西田—大拙—西谷」をもう一度自分としてやり直そう、そういう気持ちがあります。強くなっています。

高橋 過去の偉大な先生方が残された学問的な遺産を自分の課題としながら、それを深め、発展させることによって自分は学問をしている、そういう学生さんがたくさんいればいいのですが、残念なことにそういう学生さんの数はずいぶん減ってきてしまいましたね。

上田 求めるということがないと、出会いはないと思いますよ。学生と教師の両方が求めあっていないとね。たとえば一〇人で同じ先生について学んでも、その先生に本当に食いついていったのは一人だけなんてことはざらにあることです。後の九人にとつての先生は、大学時代には誰々先生に習いましたというだけの先生になってしましますね。やはり出会いというのは不思議なもので、学生と教師両方からのものですね。

高橋 今日貴重なお話をどうもありがとうございました。

上田 こちらこそ、ありがとうございました。

BSEのリスクに備える

浅野耕太 KOTA ASANO

1. はじめに

我々が狂牛病という禍々しい言葉に身近な恐怖を感じはじめたのは二〇〇〇年九月一日であった。その日の朝刊で牛海綿状脳症（bovine spongiform encephalopathy、以下、BSE）の疑いのある牛が日本ではじめて見つかったと報じられたのである。その日の夜には同時多発テロで崩れ落ちるビルの映像に我々は釘付けになる。新たなリスク社会の到来を世界に知らしめた歴史的な日の朝、一足先に我々は憂鬱な記事を目にしたのであった。そして、資料映像としてたびたび放映された、おぼつかない足どりで、やがてへたりこむ牛の姿は我々の網膜にぬぐい去ることのできない鮮やかな像を焼き付けた。

実際に我々の生活を脅かすリスクにはさまざまなものがある。その中でもBSEのリスクは特有の不気味さを持っている。この不気味さはどこからきているのか。そして、その不気味さの意味を的確にとらえることが公共政策を考える上でいかに重要かを明らかにすることが本稿の課題である。リスクに対してどう備えるべきかについては、資源配分上の効率性の観点からは、



浅野耕太（あさの こうた）
一九六二年高知県生まれ。京都大学農学部卒業。京都大学博士（経済学）。農学部助手、地球環境学堂助教授を経て、二〇〇五年より本研究所助教授。専門は環境経済学。環境問題や資源問題に興味を持ち、経済学のツールを使って、実証的な研究を行っている。主な著書に『農林業と環境評価』（多賀出版、一九九八年）がある。

既に答えが出ている。あらゆるリスクは希少資源の使い道に影響を与え、一種の社会的費用をもたらす。この社会的費用が最小化されるような状態が目指されるものである。いいかえると、我々はリスクに対して何もできないわけではない。一定の費用をかければそれを削減させることができる。問題はどの程度このリスクを削減させればよいのかを考えることである。図1をのぞいていただきたい。縦軸に金銭額を、横軸にリスク水準をとっている。リスクをある水準より一単位小さくするためにかかる費用がリスク削減の限界費用であり、リスクを小さくすればするほど対策が難しくなると考えられるので、右あがりとなっている。

一方、右さがりの線はリスク削減の限界便益である。これはあるリスク水準での追加的な被害を表すものであるが、リスクがいまの水準よりも一単位小さくなるとこの被害が回避されることから、リスク削減の限界便益ともみなすことができるのである。

ここでリスク管理の全くない状態を考えてみる。一見してわかるようにリスク削減によってもたらされる便益と比較して、かかる費用はずっと安い。このような状態ではリスク削減をすすめることが望ましい。同様の思考実験を続けていくと、最終的に

限界便益と限界費用が同じになる点までリスク削減の努力を続けることが望ましいことになる。そして、この過程が最終的にたどり着いた先が最適な状態であろう。この時、リスクのもたらす総被害とリスク削減にかかった費用の和で表されるリスクの社会的費用は最小化されている。図1から、

このとき削減された総被害額、すなわちリスク削減の総便益、から総費用を引いたものが最大化されていることがわかる。この状態のリスク水準が社会的に最適である。この資源配分上望ましいリスク水準こそが公共政策の基準となる。マスコミなどで無責任に求められる絶対に安全な食品などは資源配分上は少なくとも正当化することは難しい。このように最善なリスク管理の手段が講じられた後でも、我々はリスクとともに生きることを宿命づけられている。

2. 標準的思考の限界 — リスク下の意思決定 —

人生からすべてのリスクを取り除くことは不可能であるし、必要でもない。それは望ましい水準のリスクという意味でもそうであった。リスクは一方ではチャンスの源であり、人生の可能性を意味する場合もある。あるいは、明日どうなるかわからない

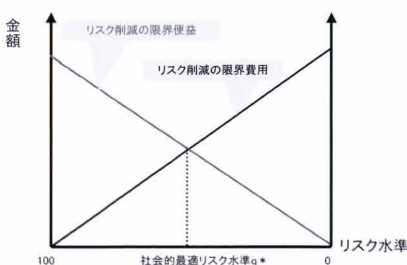


図1 社会的に最適なリスク管理の状態

からこそ日常の退屈さを我慢できているのかもしれない。当然のごとく、さまざまなリスクがあるからといって、日々の暮らしは中断されるわけではない。リスク下でも日常生活、あるいは選択は滞りなく行われる。現代統計学の第一人者であるC・R・ラオは、リスクなどの不確実性が生じる原因として、「情報の欠如」、「入手可能な情報の不正確さ」、「必要とする情報を取り出す方法がないこと」、「必要な測定を行うことができないこと」をあげている。このことからリスクのある状況は我々の日常の例外というよりも、むしろ常態ととらえることがふさわしい。

期待効用仮説

リスク下の意思決定を取り扱う基本的枠組みのひとつが期待効用仮説である。リスクの本質は意思決定の段階で、先に挙げた諸原因により、意思決定の帰結を一意に知ることができないことである。このような状況では、何らかの形で、この可能性の束であるリスクを集約して考える必要がある。まず考えられることは不確実な出来事の代表値を考えることである。その候補となるのが期待値である。しかし、この期待値は不確実な出来事の確率的性格のみから計算されるので、我々のリスクに対する態度を反映しておらず、現実には我々がリスクに直面してとる行動について説得的な説明を与えられないことが多い。その代表として聖ペテルスブルグの逆説 (St. Petersburg paradox) がよく知られている¹⁾。これに

る効用関数を想定し、不確実な出来事を一度主観的な満足感である効用に変換した上で、期待値をとる方法が考案された。これがリスク下の意思決定の期待効用仮説である。これによって、きわめて多様な状況に對して一貫性を持つてリスク下の意思決定の定式化が可能となった。次にオーストラリア産牛肉と米国産牛肉の選択を例にとつて、期待効用仮説の下でどのように選択行動が描かれるかをみてみよう。

期待効用仮説のもとでの意思決定

ある個人が精肉店にステーキ肉購入に行ったとしよう。話を簡単にするために選択肢はグラムあたり同じ値段のオーストラリア産牛肉と米国産牛肉であったとする(図2)。折しも米国ではBSE感染牛が発見され、大騒ぎになっており、一方オーストラリアは最もBSE感染可能性が低いとお墨付きを国際機関より与えられているものとする。すなわち、BSE感染確率は添え字のAがオーストラリア、Uが米国を示すものとし、 $P_A > P_U$ である。また、この個人は味にこだわり、飼育条件の違いが現れた食味の点からは米国産を好むものとする。すなわち、それぞれの結果が実現した後では、アメリカ産の牛肉のもたらす満足感が高い。それぞれの牛肉の消費がもたらす満足・不満足を表す効用に関して次の不等号が成り立つ。 $U(\text{nonBSE}_U) > U(\text{nonBSE}_A)$, $U(\text{BSE}_U) > U(\text{BSE}_A)$ である。やっ

が食味の差より小さければ、この人は米国産牛肉を選ぶ。リスクの差が食味の差より大きければ、オーストラリア産牛肉を選ぶであろう。この行動の定式化は、一見すると我々の直観と矛盾していないように見える。同様の考え方は、食品の選択のみならず、リスクにかかわるあらゆる選択に適用できる。

ここで思い出されるのは、日本への米国産牛肉の輸入再開を交渉するために来日した米国の政府高官が「BSE感染のおそれは自動車事故の確率より小さい」と報道関係者の前で述べたという話である。そう聞いて、それなら安心だと思った人がどのくらいいるであろうか。車の便利さのためにもっと大きなリスクを甘受している国民が、なぜBSEをおそれておいしい米国産牛肉を輸入しないのかといっているのであろうか。もしそうであれば、実は期待効用仮説の下でも、車社会の便利さと引き換えに、交通事故の大きなリスクを引き受けるのはそれ自身合理的で、BSEリスクを引き受けるほどには米国産牛肉は十分に魅力的とは日本人には思えないだけであるといつて反論は可能である。しかし、このような議論は肯綮にあたっていないような気がする。今まで説明してきたような期待効用仮説の考え方は、BSEをめぐる我々の戸惑いをうまく説明しえない。それは、どうもBSEのもたらすリスクの特殊性からくるようである。具体的にいうと、それはまず期待効用仮説の基本要素であるBSE感染の確率がうまく算定できないのではないかということである。これは客観確率の意味で

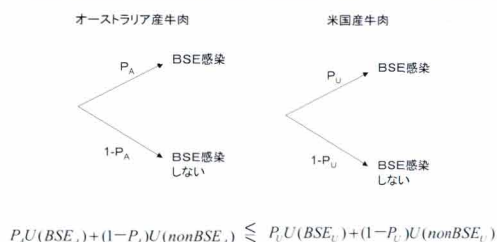


図2 期待効用仮説における選択

(1) 聖ペテルスブルグの逆説については、酒井(一九八二)の三四―三六頁を参照。

も、主観確率の意味でもそうである。人は、デタラメな事前確率の下でも、事実を下に、ベイズの公式を用いて、安定した主観確率を形成するということは思考実験としてはありうるが、この際どのような事実をもとに人々が確率を改定していくのか実際のところよくわからない。このことはBSEがその発病メカニズムにおいてまだ仮説的段階であることと無関係ではない。あるいは、この状況でさまざまな情報にさらされる我々に主観確率が複数形成されうるようなケースともいえようが、このようなときには期待効用仮説はそのままでは使えない。

リスクとあいまいさ (ambiguity)

リスクと同義で用いられる表現に不確実性がある。不確実な出来事に関してその確率分布が既知の場合とそうでない場合では我々の対応が本質的に異なる可能性があるということは古くから知られてきた。この事実を世に知らしめた研究はエルスバークによる壺の選択実験である⁽²⁾。その実験結果は、確率がわからないようなリスク、あいまいさ(ambiguity)とも呼ばれるものよりも確率のわかるリスクを圧倒的多数の人好むという事実を示した。BSEの恐怖あるいは不気味さの根はこのあたりにあるのかもしれない。実は曖昧さと先に挙げた複数の主観確率の間には意思決定モデルの次元で密接な関係があることも知られている。しかし、BSEの特殊性はこれにとどまらない。感染・発病の確率以外に、発病したときの我々の効用をどのように考えたらいよいであろうか。テレビでみた牛のように、

暴れ、ふらふらし、やがて倒れていく自分。いったいいつ頃から記憶はなくなり、自分としての統一性が失われるのであろうか。医療経済学の実証研究の結果においても、死のリスクをさける行動は死に至る症状に關わらないわけではなく、ガンなどの辛い死に様(bad death)をさけるために人は追加的な医療費を支払ってもよいと考えていることが知られている。この状況は期待効用仮説においても発病時の状況に依存して効用関数を特定することで思考実験の俎上に載せることはできるが、我々はBSEに感染した自分の状況をどのくらい具体的にイメージできるであろうか。そして、それを日々の意思決定に活用できるであろうか。この作業を真剣に行うことは、天が落ちてくるのを心配した杞の国の人の憂いとなにやら似ているような気もするのである。どうも期待効用仮説はBSEになじまない。

3. 事例ベース意思決定からみる BSEの恐怖

BSEと期待効用仮説はなじまない。期待効用仮説の適用には、二種類の情報が不可欠である。一つは不確実事象の確率分布、もう一つは不確実事象の結果の詳細(とそれに対する個人の主観的評価)である。これらは抽象的には確率空間と呼ばれる数学的構造で表現される。確率空間が個人の現実の意思決定にうまく利用可能になっている場合、期待効用仮説は力を発揮する。確率空間を問題に即してうまく作り、活用することができない限り、他の方法を考えた方がよい。このような状況で使えそうなの

が、事例ベース意思決定理論である⁽³⁾。この理論は、我々の日常の意思決定を見直すことからスタートする。人生は選択の連続であり、多くは新たな局面での選択である。そこではあらゆる可能性を網羅した詳細な確率空間を機械的に作り上げ、その中で最適化を行うよりむしろ、経験に学ぶという方法をよくとる。それではどのように経験に学ぶか。まず、自分の直面している問題と類似の問題を思い出し、その経験が活用できないものかと考えることは自然である。いまとまったく同じ状況はこれまで経験したことがないとしても、似たような、あるいは参考になるような状況は子供の頃から無数に経験しているはずである。この経験を呼び起こし、意思決定を行うという考え方は大変魅力的である。このアイディアは少なくとも一八世紀のイギリスの哲学者ヒュームまでさかのぼることができる。

BSEに関しては我々の頭の中のどのような経験が記憶によりみがえるであろうか。イギリスでの狂牛病騒ぎ、それから世界に広がったBSE騒動、死亡者も出した病原性大腸菌O157、雪印事件、他の食中毒、東海村やチェルノブイリでの原発事故による食品汚染など人それぞれに異なる状況が思い出されよう。

いま簡単化のために、ある人はBSEのリスクを〇・一五七やチェルノブイリの原発事故による食品汚染と類似していると考えているとしよう。この類似の程度を〇から一までの数値で表現したものが類似度である。一に近いほどいま直面しているリスクと似ていることを意味する。その類似度

(2) エルスバークの壺については、小島(二〇〇四)の一〇一―一二頁を参照。
(3) 考案者による著書、ギルボア・シユマイドラー(二〇〇五)が翻訳されている。ぜひ参照されたい。

が、〇―一五七とチェルノブイリの原発事故の食品汚染のそれぞれで、〇・一と〇・四と考えられたでしょう。さらにこの個人は、〇―一五七においては疑いをもたれたカイワレ業者のカイワレを続けて消費し続け、リスク回避の行動をとらなかった。一方、チェルノブイリ事故の後では予想される発ガンリスクをさけるために、カスピ海産のキャビアをとらなかった。それぞれの行動の結果得られた効用は、一〇と五であったとする。ここで選択されなかった状況でもたらされる効用を知る必要はない。

このような経験を持つ個人が牛肉をどのようにに選択するであろうか。ここで行動は、類似度で重み付けられた過去の類似の経験の効用の和で評点され、この大小に応じて選択が行われる。すなわち、経験からの類推、具体的には図3に示されたような計算の結果、この個人は米国産牛肉を選ばず、安全なオーストラリア産の牛肉を消費することになる。原発事故による汚染の不気味さの記憶が死に至るかもしれない急性中毒に勝ったというべきであろうか。繰り返しになるが、ここではリスクの水準はあまり重要な役割を果たしていない。一方、類似度が大きな役割を果たしている。

我々がもしこのような意思決定を行っているのであれば、テレビの報道が人々の行動に大きな影響を与えることよくわかる。間接的な経験の源としてマスコミ報道の重要性を過小評価することはできない。また、日本のみならず、各国で食品スキャンダルが頻りに繰り返される、大臣が笑顔で食しながら行う、政府の安全宣言の効果がな

ぜないのかはよくわかる。安全宣言後の新たな危険情報の公開を見る限りでは、パフオーマンスをしている当事者と我々のおかれている状況が変わったためではないという経験を既に持っているのである。パフオーマンスに意味がないことを経験として知っているわけである。先の米国政府高官の発言が同感を得ない理由もセールストークがいかにあてにならないかを経験的に知っていることからくるといった方がよほどそれらしい。

リスクの問題とはほぼ無関係に米国産牛肉の輸入禁止政策を多くの国民がなぜ支持をしているのか。期待効用仮説の枠組みから考えると不思議なことであるが、経験に我々が学んでいるとしたら、うなずけることである。この意味で、輸入禁止政策に対する賛同には政府への大いなる不信感が浮き彫りにされているようである。ここで政府がすべき重要なことは信頼を取り戻すように行動することである。このような状況で、客観的なリスクの水準自身を明らかにすることは唯一の解決策ではない。ただし、BSEをめぐる科学的な曖昧さが事例ベース意思決定理論を妥当なものにしているかもしれないので、我々が本当に知りたい日本でのBSEの感染経路や感染・発病メカニズムなどの科学的事実を的確に政府が解明・公表していくことは重要である。その後はじめてリスク水準そのものを議論して意味のある状況が生まれるのである。

4. むすび

BSEの不気味さを考え、それにかかわる政府の対応をみてきた。最後に政府が胸を張る全数検査についてふれてみたい。全数検査は日本だけで行われている特別な政策である。その政策には資源配分以外の必要性があったのかもしれない。すなわち、国民から信頼されていない政府の行える唯一の政策手段であったということである。しかし、全頭検査が、検査能力の限界以外にも、米国から科学的でないと非難される理由は、「1. はじめに」で示した最適なリスク水準を妥当とする標準的な考え方からの違和感がその一因かもしれない。図4にBSE感染リスクをほぼ〇に近づけることが望ましい状況を描いてみた。未だBSE感染牛の感染経路もわかっていない状況で、全頭検査済みとされる国産牛がBSEの感染のリスクを〇にすることができかどうかはわからないが、はたして多くの国民が一頭あたり決して安くはない費用がかかる全頭検査をどう考えているのであろうか。皮肉にも、投入されている予算の額は政府の信頼のなさの対価として長く記憶されるべきものなのかもしれない。

【引用文献】

- ギルボア・シュマイドラー（二〇〇五）『決め方の科学 事例ベース意思決定理論』勁草書房
小島寛之（二〇〇四）『確率的発想法』日本放送出版会
酒井泰弘（一九八二）『不確実性の経済学』有斐閣

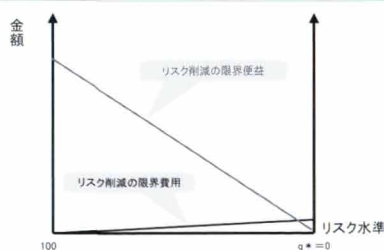


図4 リスクをほぼ0に近づけることが社会的に望ましいケース

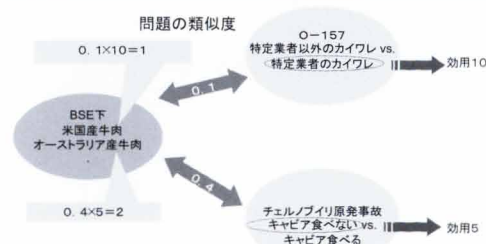


図3 事例ベース意思決定による選択

情報ネットワーク社会のリスク／チャンス

— 社会学的リスク論の視点から —

吉田 純 JUN YOSHIDA



吉田純（よしだじゅん）
一九五九年生まれ、大阪市出身。京都大学大学院文学研究科博士後期課程退学。現在、京都大学大学院人間・環境学専攻教授、専攻は社会学・社会情報学。著書に『インターネット空間の社会学』情報ネットワーク社会と公共圏（世界思想社、二〇〇〇年）、共著書に伊藤守・林利隆・正村俊之編『情報秩序の構築——社会情報学の接近3——早稲田大学出版部、二〇〇四年——ほか。

二〇〇六年前半頃に続発した、ファイル交換ソフト「Winny」に感染するコンピュータウイルスによる一連の情報流出事件は、個人情報のみならず警察、自衛隊など——社会的セキュリティの維持そのものを目的とする組織——の「機密」情報の流出にまで被害が拡大したことで、現代の情報ネットワーク社会におけるリスクの広がりを顕在化させたといえよう。それらの事件では、職員が「機密」情報を自宅に持ち帰り個人所有のパソコンに保存していた点、さらにその同じパソコンで、不特定多数とのファイル交換を目的とするWinnyを使用していた点で、組織・個人両レベルでのセキュリティ意識の甘さが指摘され、さらにはWinnyによる情報流出の防止が政府の政策課題として議論されるまでに至ったことも記憶に新しい。

Winnyに関してはそれ以前から、著作権問題の文脈での議論があることも周知のとおりである。開発者である元東京大学助手・金子勇氏は著作権法違反幫助容疑で逮捕・起訴され、七月三日、京都地裁で開かれた論告求刑公判で検察側は、「「Winnyは」違反行為を助長するためにつくられており」「インターネット社会での無政府状態を引き起こすもので、社会的影響

は深刻だ」として、懲役一年を求刑した。一方、金子被告は公判で「開発は技術的な興味から（おこなったもので、著作権侵害の意図はない）」と述べ、無罪を主張している。これに先立つ二月の公判では、「日本」のインターネットの父」とも呼ばれる村井純・慶應義塾大学教授が弁護側証人に立ち、Winnyは大規模なファイル共有のための高い性能をもった洗練されたソフトウェアであり、「効率の良い情報共有のメカニズムが、著作権法違反行為を助長させることに結び付くということ（検察側の主張）は理解できない」「開発すること、運用すること、それがどのように利用されるかということとは、分けて考えるべきだ」と述べている。

Winnyをめぐるこれらの議論に共通しているのは、インターネットが可能にした自由な情報共有のチャンスの追求が、意図せざる結果として、組織や個人の情報流出あるいは著作物の「違法な」交換というリスクを発生させているという構図である。自由な情報共有を基本理念としてきた運動体としてのインターネット開発者たちにとって、それが著作物の違法な交換に利用されることは意図せざる結果であり、またWinnyの利用者たちにとって、自らの個

人情報や属する組織の「機密」情報が流出したこともやはり意図せざる結果であった。

「それ自体コンティンジェント（選択的）な意思決定に基づく行為に伴う未来の意図せざる副次結果」——ニクラス・ルーマンの社会システム理論に基づく社会学的リスク論では、リスク概念はこのように定義される。ルーマンによれば、近・現代社会はコンティンジェンシー（不確実性）という構造的な特性をもつ。近代化は伝統的社会的共通の世界像を解体させ、人々の行為を一元的に方向づけてきた指針や基準は消滅し、世界は「かくあらねばならない」という必然性を喪失した。このようなコンティンジェントな世界の中では、意思決定はそれ自体もコンティンジェントなものとしておこなわれざるをえない。なぜなら、可能なすべての選択枝を吟味しその結果を予測することは、時間的・物理的に不可能だからである。このようないわば「見切り発車」としての選択の結果が必然的にはらむ未来の不確実性が「リスク」と呼ばれる。その意味で、リスクとは「近代人と近代社会がその未来を経験するときの様式そのもの」でもある。そして選択＝意思決定がつねになんらかのチャンス（意図した結果）の追求の

(1) ここでは「機密」という用語を、防衛用語としての厳密な意味ではなく、組織がその成員に守秘義務を課すような重要情報という広い意味で用いている。

(2) <http://www.asahi.com/kansai/news/OSK200607030060.html>

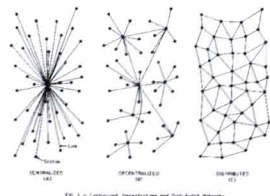
(3) <http://internet.watch.impress.co.jp/cda/news/2006/02/16/10925.html>

(4) 山口節郎『現代社会のゆらぎとリスク』（新曜社、二〇〇二年）、一六七頁

(5) 同、一六八頁



ニクラス・ルーマン
(<http://www.mediamente.rai.it/home/bibliote/biografi/luhmann.htm>)



ポール・バランによるコンピュータネットワークの模式図：右がインターネットのモデルとなった分散型ネットワーク
(<http://www.cybergeography.org/atlas/historical.html>)

そのようにして大学の研究者コミュニティの中で運営されてきた初期のインターネットは、あえてシステム理論の用語を用いれば科学システムの内部で発展してきたといえるが、それは次第に科学システムを超えて、その外部にある諸システムを横断するカタチで拡大していく。インターネットは新たな市場となりさまざまなビジネスの場となることで経済システムの中に浸透し、またインターネットを舞台としたさまざまな犯罪や社会問題が増加するにつれて、それは政治システムの政策的関心や法システム

よく知られているようにインターネットの開発は、一九六〇年代のアメリカ国防総省による軍事用通信技術の基礎研究を出発点にしている。インターネットの基本構造を考案し軍に提案した人物とされるポール・バランは、アメリカ本土が核攻撃を受けても軍の通信を維持するような新しい通信システムを開発することがその目的であったと述べている。⁽⁶⁾ 中心になるコンピュータあるいは交換機が全体を統制しているようなシステムではそこが攻撃されればおしまいが、中心をもたない広域分散型のネットワークであれば、どこかが攻撃されても全体は生き残り続けることができる、と

ためにおこなわれる以上、リスクとチャンスとはつねに表裏一体の関係にある。小論ではこのような社会学的リスク論の視点から、インターネットを中心とする情報ネットワーク社会におけるリスク／チャンスの構造について若干の考察を試みたい。そこで焦点となるのは、上述した自由な情報共有という基本理念こそがリスク／チャンスの二面性を産出しているという点である。この基本理念の背景を明らかにするには、インターネットの開発の歴史を遡らなければならない。

いうわけである。こういった中心のない「分散型ネットワーク」というアイデアが、当時のアメリカ西海岸の若者を中心としたカウンタカルチャー、とくにその一環をなしていた「ハッカー文化」の思想と偶然にも合致し、ハッカーたちが初期のインターネットの開発の現実的な中心を担ったことが、その後のインターネットの発展の方向性を決定した。ハッカーという呼び名は、現在ではコンピュータ犯罪者あるいは不正侵入者というネガティブな意味で使われることが多いが、当時の「ハッカー」はむしろ彼ら自身の——プライドを含んだ——自称であり、非常に高度な知識と技術を持ったコンピュータの使い手を意味した。彼らハッカーの思想的目標は、コンピュータの能力を市民に開放することにより、市民社会における自由な情報の共有を実現するというところにあり、それはアメリカンデモクラシーの思想的伝統のラディカルな部分を継承するという意味を含んでもいた。この自由な情報の共有という思想と、軍事技術研究からスタートした分散型のネットワークという二つの一見異質な流れが合流したところから生まれたのがインターネットであった。

実際に初期のインターネットの開発を担ったのは、西海岸の大学の大学院生や助手クラスの若手の研究者であった。⁽⁷⁾ 国防総省の予算で運営されてはいても、実質的な開発の内容については政府のコントロールは及ばず、研究者たちの自発性に大幅に委ねられていた。研究者グループによる技術開発は、ボトムアップで一人ひとりの研究者の自発的な提案に基づいて、その提案をグループの中で共有し討議を重ねることによって、新しい技術を標準化していくというやり方がとられてきた。インターネットの標準的なプロトコル（通信方式）となったTCP/IP、OS（オペレーティングシステム＝基本ソフト）のUNIX、そして電子メールやWWWといった現在までインターネットで使われている基本的な技術のほとんどは、このように非政府・非営利の形態で、個々の研究者・技術者の自発的なアイデアに基づいたオープンな議論の中から生まれてきたものである。

(6) ニール・ラングダール『インターネットヒストリー——オープンソース革命の起源』（村井純監訳、オーム社、一九九九年）、一六―一九頁。
(7) 国防総省の予算で開発が進められていた時期のネットワークはARPANET（アーパネット、ARPAは国防総省高等研究開発局の略）と呼ばれていた。ARPANETは一九六九年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、同サンタバーバラ校、スタンフォード大学、およびユタ大学の四大学を結んだネットワークとしてスタートした。

ムによる規制の対象ともなっている。このように複数のシステムにまたがってインターネットが拡大するにつれて、とりわけ個々のシステムとその外部のあいだの境界面において、さまざまなリスクと危険が顕在化してくる。

それは社会システム理論の視点からみれば、個々のシステムがそれぞれ固有の「コード」に従って作動していることに起因する。ルーマンによれば近代の社会システムは、機能分化した複数の部分システム（政治、経済、科学……）の相互依存によって成り立っており、それらのすべてを統制する中核となるようなシステムは存在しない。個々の部分システムはそれぞれの固有のコードにしたがって世界を観察し、情報を処理加工し、システム自身を再生産する。コードはつねに二分法のかたちをとり、システムの選択肢のどちらがより望ましいかを指し示す物差しとして用いられる。たとえば経済システムのコードは「支払うか／支払わないか」（言葉を変えれば「投資するか／投資しないか」、「儲かるか／儲からないか」という二分法であり、経済システムはつねにこのコードにしたがって作動する。そのため、個々の部分システムは環境（他の部分システムを含む外部世界の全体）に対する配慮を欠いたまま自己増殖し、自らの内部にリスクを産出するのみならず、環境に対しては予測不可能な危険を産出しつづける。このように、システム内部の意思決定に帰責される負の影響を「リスク」と呼び、外部に起因する負の影響を「危険」と呼ぶとすれば、リスク／危険の対立、す

なわちシステム内部の意思決定者とシステム外部の（意思決定から排除された）被影響者との対立は、社会の機能分化（部分システムの分化）が進行するほど増大することになる。

インターネットの発達にともなって顕在化してきた、このような意味でのシステム内部／外部の対立の中でも代表的なものとしてここで注目したいのは、知的所有権（知的財産権）をめぐるコンフリクトである。従来の経済システムの論理は、ソフトウェア、音楽、映画、テレビ番組のようなコンテンツをすべて商品であり法的に保護されるべき知的財産であるとみなしてきたが、インターネットの自由な情報共有の理念は、こうしたビジネスの論理とはしばしばコンフリクトを起こしてきた（それは冒頭にあげたWinnery開発者をめぐる裁判事件でもみられるとおりである）。この問題に関して、アメリカの憲法学者・情報法学者ローレンス・レッシングは、インターネットが今日に至る成長と技術革新を可能にできたのは、人々が自由にアクセスできる「コモンズ」（共有地）と呼ばれる共有の場所を持つていたからであり、現在、インターネットに対して知的所有権の面での規制を強めつつある法システムや経済システムは、このインターネットの成長の根源を破壊しかねないと批判している⁸⁾。

ここで注目したいのは、この視点の対立は単なる経済システムとその外部にある、いわば運動の論理との対立という側面だけではなく、経済システム自身にとって、そもそもビジネスチャンスとは何か、いかに

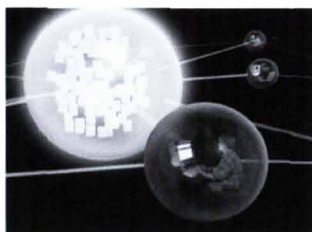
してそのビジネスチャンスを獲得するのかという方法論における対立という側面もあわせもっているという点である。レッシングの批判は、知的所有権の規制強化が、経済システム自身にとっても新しいビジネスチャンスを生むインターネットという土壌を破壊してしまいかねない、いわば「角を矯めて牛を殺す」リスクを含んでいるのではないかということをも含意している。

インターネットが可能にした、従来の伝統的な経済システムのビジネスモデルとは違う、新しいビジネスチャンスを先駆的に体現したのは、Linuxに代表されるオープンソースソフトウェアである。OSとしてのLinuxと商用OSの代表であるWindowsとの基本的差異は、前者ではソフトウェアの設計図ともいえるソースプログラムがインターネット上で公開され、腕に覚えのある技術者であれば、だれでもその開発に参加できる点にある。公開されているソースプログラムを一人一人が自由に手に入れ、そこに新しい機能を付加し、あるいはプログラム上の問題を改善するといったことができる。この発想はいうまでもなく、上述のようなインターネットの自由な情報共有の理念を継承するという意味をもつが、それと同時に、設計図そのもの



ローレンス・レッシング
(<http://cyberlaw.stanford.edu/spectrum/sponsors/>)

（8）ローレンス・レッシング『コモンズ——ネット上の所有権強化は技術革新を殺す』（山形浩生訳、翔泳社、二〇〇二年）



Linuxの開発のイメージ：中心にあるコアがソースプログラム（NHKスペシャル「変革の世紀」（2002年放送）より）

をオープンにすることで、技術的なセキュリティや信頼性を向上させているという側面がある。この点も、Windowsと対照して考えてみれば理解しやすい。Linuxのソースプログラムは、オープンであるために悪意の改竄を受ける可能性もあるが、同時に、バグやセキュリティホール（プログラムの欠陥やセキュリティ上の脆弱性）に善意の技術者もアクセスでき、そして、すぐに改善されたプログラムを開発することができ、Windowsに絶えず間なく発見されるバグやセキュリティホールを考慮合わせると、クローズドにすることとオープンにすることのセキュリティ面でのメリット／デメリットをそれぞれ勘案すれば、オープンにすることのメリット（クローズドにすることのデメリット）の方が相対的に大きいという結果がすでに出ているといえよう。

このようなオープンソースのモデルが経済システムに新たなチャンスをもたらすのは、ソースプログラムを独占することによって得られるであろうチャンスを最初に放棄することによって、それまでは考えられなかったような新しいビジネスモデルが生まれ出され、さらには新たな市場が開拓され

るからである。たとえばLinuxは、サーバ（インターネット上の情報のやりとりの拠点として用いられるコンピュータ）や家電用のOSとしてしばしばハードウェアに組み込まれ商品化されている。そこでは、とくにセキュリティ面でLinuxの信頼性の高さがしばしば採用の理由となっている。また、Linuxも含め無償のソフトウェアには原則的にアフターサービスのサポートがつかないというデメリットがあったが、アフターサービスのサポート込みでパッケージ化された商品版のLinuxも存在する。こうしたさまざまな新しいビジネスモデルがオープンソースという土壌の上で可能になったのである。

上述のような、インターネットの自由な情報共有の理念とそれを継承したオープンソースの発想は、現代社会における不可避のリスクに対してどのように「備え」、対処すればよいのかという問題を考える上で興味深い示唆を与えている。社会学的リスク論ではリスク問題への対処の方策として、「意思決定者と被影響者の相互了解の構築」「ゼロ・オブション」「一次的観察と二次的観察の往還」などいくつかのモデルが提案されているが、オープンソースは、それら複数のモデルを（いくぶんかずつ）兼ね備えた成功例とみなせる内容を含んでいる。「意思決定者と被影響者の相互了解の構築」とは、この二つの視点の相違からくる「リスク／危険」の対立を緩和するためのモデルであり、これはオープンソースにおいては、ソフトウェアの利用者が意思決定（開

発）の被影響者であるにとどまらず意思決定者の側にも参加することによって可能になったといえる。「ゼロ・オブション」とは、システムがチャンスをあえて放棄することによって合理的な「自己抑制」をおこなうことによりリスクを軽減するというモデルであり、これはオープンソースが経済的チャンスを（いったんは）放棄し、セキュリティと信頼性を向上させている点に合致する。また「一次的観察と二次的観察の往還」とは、システムが自らのコードによる世界の観察（一次的観察）にのみとどまるのではなく、システム外部の視点をも取り入れる（二次的観察）ことにより、二つの観察を相補的に組み合わせることによってシステムの視野を拡大することを意味する。ただ、システム自身がこのような一種の自己反省へと向かう方向性は、システムの内的発的な動きとしては発生しにくい。それを発生させるための触媒として有効なのは、「機能分化し、多文脈化した社会のなかにあつて、唯一、機能に特殊化されず、機能を越えた区別でもって社会を観察することができる」ような「新しい社会運動」であると考えられる。初期インターネットの形成において自由な情報共有の理念を基底に据え、オープンソースへの底流をつくりだした（本来の意味での）ハッカー文化は、まさにそのような意味で、システム（とくに経済システム）の自己反省を促す触媒として機能してきたということができる。

(9) このようなオープンソースの発想は、狭義のソフトウェア開発以外でも、インターネット上の百科事典Wikipediaなどにもみられるが、さらに最近では、オープンソースを起点とするインターネット上の新たなビジネスモデルを包括する概念としてWeb2.0というキーワードも提唱されつつある。Web2.0とは、「ネット上の不特定多数の人々（や企業）を受動的なサービス享受者ではなく、能動的な表現者と認めて積極的に巻き込んでいくための技術やサービス開発姿勢」を意味し、検索サイトGoogleがその先駆的な成功例としてあげられている（梅田望夫「ウェブ進化論」ちくま新書、二〇〇六年）。

(10) 山口節郎「現代社会のゆらぎとリスク」（前掲、二二九頁）。「意思決定者と被影響者の相互了解の構築」「ゼロ・オブション」についても詳しくは同書二四二―二四三頁を参照。なお「新しい社会運動」とは一般には、経済的な財の配分の問題を争点とする労働運動に代表される「古い社会運動」と区別される、一九六〇年代以降に増加してきた環境保護運動、フェミニズムなどの、生活世界における意味や価値をめぐる問題を争点とする運動をさす。

地震災害の危険性を

いかにして伝えるか

林 能成・木村玲欧

YOSHINARI HAYASHI, REO KIMURA



林 能成（はやし・よしなり）
一九六八年生まれ。現在、名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手（災害対策室担当）。博士（理学）。専門は防災地震学、火山地震学。
木村 玲欧（きむら・れお）
一九七五年生まれ。現在、名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手（災害対策室担当）。博士（情報学）。専門は防災心理学・社会心理学。

なぜ阪神・淡路大震災だけではダメなのか

現在、国や地方自治体、企業、学校、町内会、家族、個人など様々なレベルで防災対策が進められている。これら防災対策の根拠には、十年前に起きた阪神・淡路大震災がある。阪神・淡路大震災は、高度に発展した日本の現代都市において初めて発生した都市巨大災害である。家屋の倒壊、火災の発生、鉄道など輸送路の途絶、避難生活における混乱、住まいや暮らしの再建の難しさなど震災の持つ複雑さや多様性を多くの市民に知らしめることとなった。しかし、この震災で起こった出来事に備えれば、地震対策は万全なのだろうか。

二度とおこらない。未来の災害に備えるためには、時代や社会環境の異なる様々な災害事例を現代的な災害科学の視点で見直し、想像力を養うことが必要である。

三大地震災害である。阪神・淡路大震災による死者は六四三三人で、これらに続く四番目に死者数が多かった地震災害と位置づけられる。

この図で注目すべきことは、阪神・淡路大震災の前には五〇年近く大きな地震災害が発生していないこと、一九四〇年代に死者が一〇〇〇人を超える大きな地震災害が五つ連続して発生したことである。この五つの地震は、一九四三年鳥取地震、一九四四年東南海地震、一九四五年三河地震、一九四六年南海地震、一九四八年福井地震

災害は「外力」と「社会の防災力」との相対関係でその規模や特徴が決まる。ここで重要なのは「外力」の強弱だけでは災害の様相は決まらないことである。同じ大きな地震でも、地震が襲った地域の社会環境によって災害は大きくもなれば小さくもなる。阪神・淡路大震災から十年がたち、被災地においても携帯電話の普及や高齢化の進展など、もはやあの時と同じ社会環境ではない。いわんや他地域においてはである。つまり阪神・淡路大震災と同じ災害は

歴史から葬りさられた震災 一九四五年三河地震

図1は、明治以降に発生した日本の地震災害による死者数である。最大の死者数を数えた地震は一九二三年の関東大震災で、一〇万人を超える方が亡くなっている。ついで明治時代に起きた一八九六年の明治三陸地震津波では二一九五九人、一八九一年に起きたわが国最大級の直下型地震である濃尾地震では七二七三人の方が亡くなった。この三つが明治時代以降のわが国における

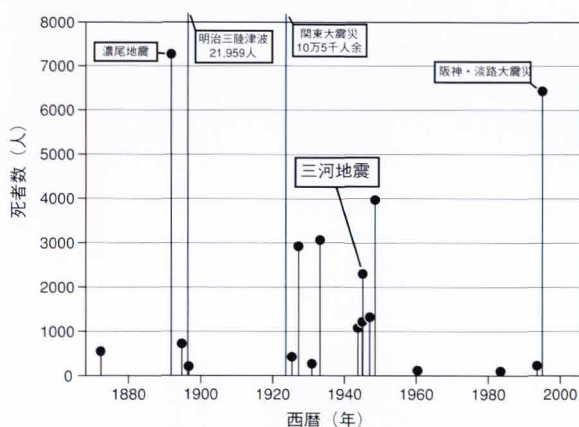


図1 明治時代以降の日本の地震災害による死者数

- (1) 阪神・淡路大震災
一九九五年（平成七）年一月一七日五時四六分に発生した兵庫県南部地震（M七・三）により、もたらされた戦後最大規模の地震災害。神戸市を中心に淡路島北部から西宮市・宝塚市の範囲で大きな被害となり、死者・行方不明者六四三三人、負傷者四三九二人、全壊した建物は二〇四九〇六棟におよんだ。
- (2) 林春男「いのちを守る地震防災学」岩波書店、二〇〇三年。
- (3) 関東大震災
一九二三年（大正一二）年九月一日一五時五八分に相模湾で発生した関東地震（M七・九）によってもたらされた大震災。地震の揺れによる被害に加え、火災による被害が大きかったのが特徴。本所被服廠跡で四万四千余人が焼死するなど、犠牲者は一〇万人を超えた。鈴木淳著「関東大震災」（ちくま新書、二〇〇四年）に災害対応の様子が詳しく記されている。
- (4) 明治三陸津波
一八九六年（明治二九）年六月一日一四時頃発生。震源に最も近い三陸海岸でも震度三程度の揺れしかなかったにもかかわらず、三十分後に最大波高四〇メートルにも達する大津波に襲われ、多くの死傷者が出た。断層がゆっくりと動いた「津波地震」であったと考えられている。
- (5) 濃尾地震
一八九一年（明治二四）年一月二八日六時三十八分発生。岐阜県根尾村付近を震源とするM八・〇の地震。日本列島の内陸に発生した地震では最大級の地震として知られる。岐阜県の根尾谷では八メートルにもおよぶ地面の食い違いが現れ根尾谷断層と名付けられた。死者七二七三人、建物全壊一四万戸余りにおよぶ被害が出た。

で、戦中戦後の混乱期に発生したため被災記録がきちんと残されていないものも多い。特に一九四四年東南海地震と一九四五年三河地震は、ほとんど記録が残っていない。敗戦色が濃厚となった時期に、軍需産業が集中する東海地方を襲った地震であったため、戦時報道管制によって被害の報道にも厳しい規制がかけられたのである。また、地震後も被災地では空襲が続き、終戦後の社会的な混乱も重なり多くの記録が失われてしまった。まさに歴史から葬りさられた震災なのである。

この一九四〇年代の五つの震災は、今ならば被災者は存命であり、当時の話を直接伺うというフィールドワークが可能である。このことは、もはや文献資料でしか調査ができない明治・大正時代の震災との決定的な違いである。そこで、我々は地元・愛知県に大きな被害をもたらした一九四五年三河地震に注目して、被災者へのインタビュー調査を進めてきた。この地震が発生したのは、昭和二〇年一月一三日午前三時三十八分。地震の規模を示すマグニチュードは六・八となっており、これは地震学的には特別大きな地震ではない。しかし故飯田淑事・名古屋大名誉教授の後の調査で明らかになった二二〇六人という死者数は明治時代以降の地震災害で八番目の多さで、まさに大災害である。ところが地震翌日の朝日新聞には「昨払暁、東海近畿方面に地震 愛知県下被害は僅少」とあるだけである。また気象台で観測された震度は、三重県津で五、名古屋は四にすぎないこともあって、全国はおろか同じ県内の名古屋市でもその

被害の大きさはあまり知られていない。

この三河地震ではごく狭い範囲に激しい被害がもたらされた。多数の犠牲者が出たのは、現在の愛知県安城市、西尾市、蒲郡市の一部など二〇km×一五km四方程度の狭い範囲の町村に限られる(図2)。これは兵庫県南部地震や福井地震などと共通した、いわゆる直下型地震に共通する被害の特徴である。人々が生活を営む地面の真

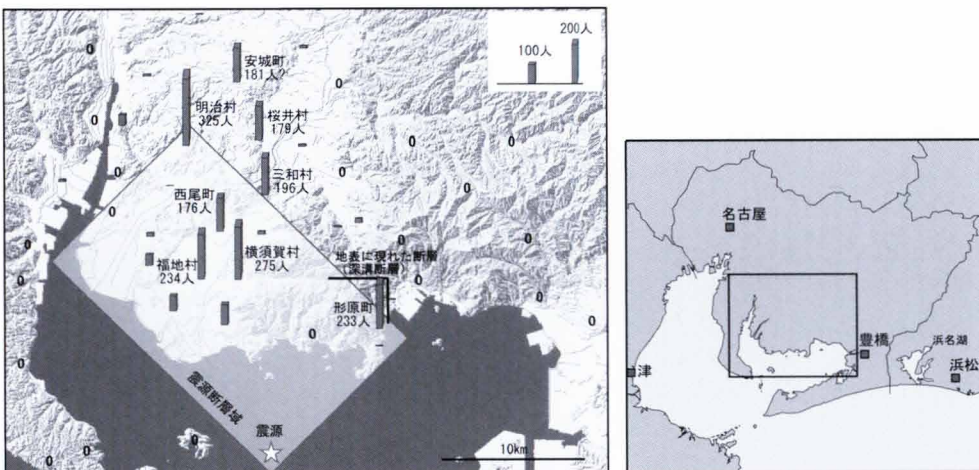


図2 三河地震の市町村毎の死者数 概略地図の中のワクは詳細図の範囲を示す。

下で活断層が動き、強烈な地震波が放出されるため、断層に近いところでは非常に激しいゆれとなる。そのため、一部の集落では家屋全壊率が九〇%以上という甚大な被害に見舞われた。たとえば桜井村藤井集落(現、安城市藤井町)では全一七戸中一〇七戸が全壊し、全人口六一人中七十七人が死亡している。さらにこの地域では、わずか一ヶ月ばか

(6) 鳥取地震

一九四三(昭和一八)年九月一〇日一七時三六分発生。鳥取平野内を震源とするいわゆる直下型地震で鳥取市を中心に大きな被害が発生した。M七・二。鳥取市を中心に死者一〇八三人、家屋全壊七四八五戸。

(7) 東南海地震

一九四四(昭和一九)年二月七日一三時三六分発生。紀伊半島沖を震源域とするM七・九のプレート境界型地震。強い揺れと津波により愛知、静岡、三重の三県を中心に死者・行方不明者一二二三人、住家全壊一七五九戸という被害が出た。愛知県半田市と名古屋市中ではレンガ造の戦国機工場が倒壊し多くの学徒動員の若者が亡くなった。

(8) 三河地震

一九四五(昭和二〇)年一月一日三時三十八分発生。愛知県南部を中心に大きな被害がでたが、戦時報道管制下で起き、また被災範囲が非常に狭かったために、その被害の実態が国民に知られなかった。M六・八という規模としては珍しく地表に断層が現れ、深溝断層と名付けられた。

(9) 南海地震

一九四六(昭和二一)年二月二日四時一九分発生。紀伊半島から四国沖の南海トラフを震源域とするプレート境界型の地震。M八・〇。中部地方から九州までの広い範囲で被害が発生し、死者は一三三〇人。津波による被害が目立つが、高知県中村市では家屋倒壊などで二九三人が犠牲になった。

(10) 福井地震

一九四八(昭和二三)年六月二八日一六時一三分発生。被害は福井平野とその周辺域に限定されるが、福井市を中心に死者三七九人、家屋全壊三六一八戸、焼失三八五一戸という激甚な被害が発生した。当時、日本に駐留していた米軍によって被災調査が行われており、多くの写真が残されている。M七・一。



図3 インタビュー調査の様子

りの間に、二度連続して大きな地震に襲われた。三河地震の三七日前には紀伊半島沖を震源域とする東南海地震が発生しており、静岡県・愛知県・三重県を中心に一二〇〇名以上の死者を出す大災害になっていた。愛知県三河地方でも震度六、場所によっては震度七の揺れがあった。この地震によって家屋が損傷し、復旧作業が遅れているところに、三河地震に襲われて全壊してしまった家も多かった。

この地震について、戦後四〇年近くたった一九七〇年代から八〇年代に、飯田汲事、山下文男、中日新聞社会部、蒲郡市教育委員会などによる被害調査が精力的に進められた。しかし地震後の対応の様子など未だ

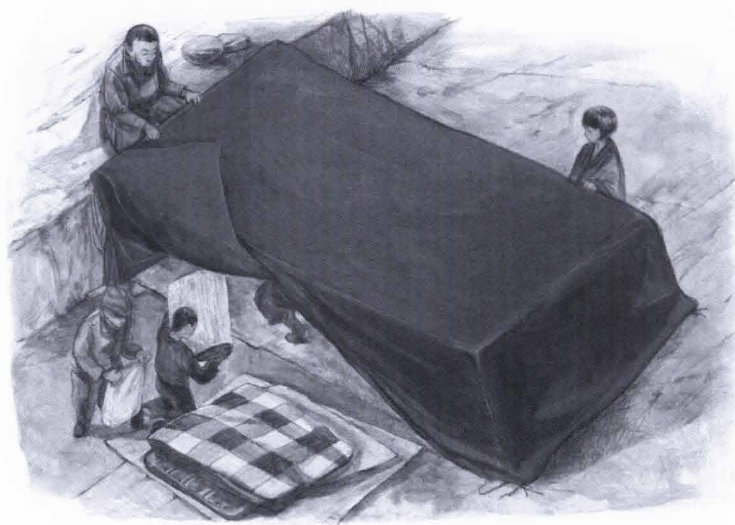
いかにイメージしてもらおうか

不明な点も多く、インタビューなどのフィールドワークでしか明らかにできない課題が数多く残されている。

被災者へのインタビューでは、1. 家族・集落にどのような被害があったか、2. 地震が起きてから時間を追ってどのような意識をもち・行動したか、3. どのような人・組織に助けられたか、という三点を重点的に聞いている。災害の全貌を明らかにするために、地表に現れた地震断層の様子や建物被害の様子といった物質的な事柄のみならず、被災者の意識・行動や行政等

による支援の様子といった人間心理や社会制度なども重要な調査項目である。従来からの理系・文系の敷居を越えなければ、総合的に災害を理解することはできない。今回の調査では、出身が理系・文系と異なる我々二人がそれぞれの専門知識をいかして災害の全貌を漏れなく記録できるようにインタビューを行っている。

被災体験の見せ方にも工夫をした。せっかくインタビューを行っても、その成果を文字で残すだけでは、子供たちをはじめ、地震にあまり縁がない多くの市民には興味を持ってもらえない。そこで被害状況や災害対応の様子を絵で再現することを考えた。これは、当時の社会情勢から被害写真がほ

図4 前震活動があったため仮のテントをはって外で寝た
(三浦昭六さんの体験談を元に作成、藤田哲也画)

(11) 活断層

最近数十万年間に繰り返し活動した断層を起した断層。過去に地震を繰り返し発生させ、地形を作ってきたことから、今後は地震を起こすと考えられる。その活動間隔は最も活動度が高いものでも千年に一回程度であり、数万年に一度しか地震を起こさないものも多い。政府の地震調査研究推進本部では主要な九八活断層を選定し、その地震発生確率を調査公表している。しかし示される確率の数値が小さく、数値の幅も広いいため、自治体や個人では対応しようがないという批判も多い。

(12) 飯田汲事「昭和二〇年一月一三日三河地震の震害と震度分布」愛知県、一九七八年。

(13) 山下文男「戦時報道管制下隠された大地震・津波」新日本出版社、一九八六年。

(14) 中日新聞社会部「恐怖の真相」東南海、三河大地震の真相」中日新聞社、一九八三年。

(15) 蒲郡市教育委員会「わすれじの記」三河地震記念事業奉賛会、一九七七年。

とんど残っていないために考え出した苦肉の策であったが、写真には残せないことや、被災直後は残そうと思わない出来事までも画像で表現できる効果をもたらした。

体験談だけから実際に絵を描くことは難しい。絵の作成には災害に関する知識や、第二次世界大戦中の生活についての深い知識も必要不可欠である。幸いなことに愛知県立芸術大学日本画専攻で非常勤講師をされている阪野智啓さんと藤田哲也さんという二人の若手画家がこの試みに協力してくれることとなった。二人は創作活動のみならず、歴史や文化にも幅広い知識と興味を持っており、余人を持って変えがたい存在となっている。

絵の作成には次のような手順を踏んでいる。まず、インタビュには画家の方も必ず同席して被災者の話を聞きながらラフスケッチを書いてもらう(図3)。生の声を聞き、被災者の人となりを感じることによって被災体験のイメージを共有するためである。その後、我々と画家が相談して絵に残すべきシーンや教訓を選び、必要な資料なども探して絵を描くこととなる。そして完成させた絵を持ってもう一度インタビュールに行き、記憶と異なる点などを指摘してもらって修正または書き直しを行う。このような手続きを経ることで絵の完成度を高められるばかりでなく、被災者の六〇年前の記憶がより鮮明になり、記憶の奥底にしまわれていた体験が開ける場合も多い。

知見・教訓に昇華させる

現在(二〇〇六年八月)までに二十回の正式インタビュを行い、一〇〇枚を超える絵が完成した。ここでは紙面の関係もあるので、三河地震における避難に焦点をあてて体験談を紹介したい。三河地震では本震の数日前から顕著な前震があり、震源に近い形原町(現在、蒲郡市形原町)では震度三から四程度の揺れが何回か感じられていた。この地方は普段はほとんど地震がない地域である。そのため、三浦昭六さんの家では、父親が「今日はどうにも気持ちが悪い」ということで、地震前日の一月一二日に運送屋から借りてきたシートで空地にテントを張り、そこへ布団を持ち出して家族全員で寝た(図4)。このように事前に避難をしていた中で三河地震が起り、三浦さんの家では家が半壊するという大きな被害を受けたにもかかわらず怪我をした人はなかった。前震活動が顕著だった一月一日や一日の晩には同じように外で寝た家が多かったそうだが、地震前日には揺れが少なくなったため家の中に戻ってしまった人が多かったという。そのため、不幸にも被害にあった人もいた。「避難をいつやめるべきか」という判断の難しさを示すエピソードである。

逆にいつもと違う場所で寝たために、かえって大きな被害をこうむってしまった人もいた。同じく形原町で地震に遭遇した小笠原とよさんの家では、「二階は揺れるし逃げられないので一階で寝よう」というおばあさんの意見に従って、家族四人で一階に寝た(図5)。当時は地震のときは急いで外に逃げ出すという考えがあったのだ。

しかし三河地震のような直下型地震では揺れ始めてから強く揺れるまでの時間は数秒しかなく、また睡眠時間中に発生した地震であったこともあり、とても逃げ出すことはできなかった。小笠原さんは「カタカタ、カタツ、カタツって揺すれたので、窓を開けて外に出ようと思いきや身を起こした瞬間、ピシャツと家が倒れた。あつという間だった。気がつくのと、左足が挟まっていて逃げ出せない。おばあさんも下敷きになったが、隙間に入って助かった。でも、子ども二人は息がでんようになつたとみえて死んでしまった。」と証言している。

以上のような体験談からは、六〇年前の人々が自主的に災害に備えようとした姿勢が感じられる。現在では、震度三程度の地震を連続して感じたことを理由に、自主的に外で寝るという判断を下し、実際に行動する人はほとんどいないであろう。また、安全のために外で寝ようと思っても、都市化が進んだ地域ではそのようなスペースはほとんどない。結局のところ、報道される地震情報を正確に把握したうえで、必要があれば子どもや高齢者を遠隔地の親せき等にしばらく避難させたり、事前から地震でも倒壊しないような丈夫な家に住んでおくことや、家の中ではなるべく安全な場所です生活したり寝たりするというのが、現代における実際的な解決策となる。

また、三河地震では前震もさることながら、比較的大きな余震が多数発生し、しかも長く続いたことが知られている。そのため、本震で家が壊れなかった場合でも、ほとんどの人は家の中に戻って生活する気

(16) 前震
大きな地震の前に、その震源の近くで起きるより小さな地震のこと。内陸直下型地震では、本震に先立って前震が観測される事例も多い。しかし、後になって前震があったと判定される場合が多く、本震に先立ってそれが前震であるのか否かを判断するのは難しい。



図5 地震が起きたら即座に外に逃げようと考え、家族全員が一階で寝た。
(小笠原とよさんの体験談をもとに作成、藤田哲也画)



図6 余震が激しかったため自宅が倒壊していなくても仮設の地震小屋に避難した
(宮村攝三、元東京大学地震研究所教授が撮影し保管していた写真)

がしなかったという。人々は戸板やむしろを使って、庭などに仮の「地震小屋」を作り、しばらくはそこで暮らした(図6)。このようなことができるのは、やはり庭などの広いスペースがあったからである。都市におけるオープンスペースの確保は、火災対策だけではなく余震対策としても重要な側面を担っていることがこのことからわかる。まだ記憶に新しい二〇〇四年新潟県中越地震では、三河地震に匹敵する激しい余震活動があった。そのために地震からしばらくの間は、たとえ自宅が無事であっても外で夜を明かした人が多かった。寒さを避けるために車の中で寝た人も多数いた。

新潟では、田畑や河川敷などの空間が有効利用されている。

地震時における食料も大きな問題である。鈴木敏枝さん・杵名美代さんの姉妹は地震発生当時一五歳と一一歳で、明治村和泉集落(現、安城市和泉町)で被災した。自宅は全壊し周囲の家もほとんどが倒れてしまったが、幸いなことに家族に犠牲者はいなかった。しかし、家屋が全壊し庭もガレキに埋まってしまったため、炊事はとてもできない。ところが、近所に倒れなかった家が一軒だけあり、外に井戸もあったので水も確保できた。そこで、その家の庭に炊事小屋を近所で協力して造った。地震後数日

の間は、近所の人たちが交替でご飯を炊いて、一人あたりおにぎり二個ずつを配り、みんなで一緒に食べた。また、家屋の下敷きになって死んだ牛を食べることもできたので、震災時でも食料に困ることはなかった。このように家族がそろって、暖かい食事をとれたことは、つらい震災の思い出の中でも数少ないよい思い出であり、「あの食事は美味しかった。こんなこと言うのも変だけど、子ども心にも楽しかったね。」と当時を回想している(図7)。

以上の体験談からは、家族あるいは隣組といった日頃からのコミュニティの活用が、震災直後の混乱した中で生活を維持す

(17) 余震

大きな地震の後には、中小の地震が多数発生し、これを余震と呼ぶ。一般に規模の大きい地震ほど、規模の大きな余震が発生し、その数も多い。また、震源が浅い地震ほど余震が多いという傾向もある。本震が発生した場所がいくつもの地層が複雑に折り重なっているような構造を示すところでは、規模の大きい多数の余震が発生する場合もある。二〇〇四年新潟県中越地震はそのような例と考えられている。

(18) 新潟県中越地震

二〇〇四年(平成一六)年一〇月二三日一七時五十六分発生。M六・八。山古志村、川口町、小千谷市、十日町市などの中山間地を中心に被害が出た。死者六五人、家屋全壊三二七五棟。

するためには重要であることがわかる。現在の都市社会においても、行政の支援などの公助だけでは乗りきることができず、近所づきあいなどの共助も活用しながら震災を乗りきる必要がある。しかし、もちろん一番大切なのは自助努力であり、公助や共助に頼りきりにならないで、早く本来の家族単位での生活に戻れるような備えをしておくことが生活再建への第一歩になると考えられる。

インタビュー調査は現在も続けており、今回紹介した事例以外にもさまざまな教訓が得られている。¹⁹⁾ インタビューをした方の中には、自らの体験談を元に作成された絵

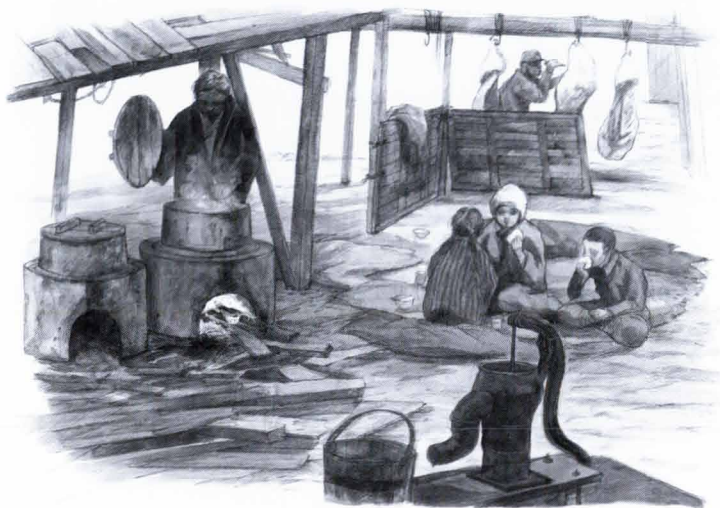


図7 外にかまどを作り、隣組の家族が共同で炊事した。
(鈴木敏枝・杵名美代さんの体験談を元に作成、藤田哲也画)

も使って、町内会や小学校などで震災を語ってくれた人もいと聞いている。災害教訓の世代間伝承に、この絵が使われているのはうれしい限りである。また我々も地元自治体と協力して「被災者と研究者が壇上で対話することによって、聴衆者である地域住民の災害イメージをふくらませる」講演会なども開催している。今後は他の地震にも調査対象を広げて、地震対策に備える教材の整備を進めていきたいと考えている。

コラム「お国の食べ物」 バクチャー 個性豊かな味 Bak Ku Tod 肉骨茶 ガンシウフイ

共生・同僚専攻・人間社会論講座D2

肉骨茶とは、骨付き豚筋肉、香料とスパイス（クローブ、ニンニク、茴香、当帰陳皮、肉桂、八角、甘草、枸杞）、レタス、マッシュルーム、乾燥豆腐などを煮込んだ、ハーブの薫り高いマレーシア華人の鍋料理です。

この料理の起源には諸説ありますが、一般的には、一九〇〇年頃東南アジア、とりわけマレーシアで錫採りの華人苦力（中国の新移民）が、長時間の肉体労働をする活力の源として朝ごはんに食べたというものが有力です。今日では、虚弱体質の改善や滋養強壮として人気があります。

実は、今日の肉骨茶は必ずしも純粋な華人料理ではありません。初期の華人苦力は故郷の食べ物があったという理由で、現地の食材を使い、中華の手法で故郷のものと似た料理を作りましたが、時間が経つにつれ、スパイスや香料の使い方はマレー系とインド系のものが取り入れられ、それが定番となりました。薬味としての細かく切ったニンニクとチリパデ（Chili Padai、非常に辛い唐辛子）が入っている醤油はその一つの例です。また、国内の様々な民族はこの肉骨茶をそれぞれの流儀で食べています。マレー半島の北側にあるペナン州では白飯ではなくて、マレー人の影響で紫芋とご飯を混ぜた深い紫色のご飯と一緒に食べるのが普通です。また、イスラム教の人々は、豚肉の代わりに鶏肉や羊を使い、ハラール（Halal、イスラム法に従った料理法）を施した肉骨茶店も少なくありません。

このように肉骨茶は、もともとは華人料理でしたが、今ではマレーシアのどの民族も、それぞれの料理法でアレンジしながら好んで食べる、多民族国家マレーシアならではの、まさに多民族的料理といっても差し支えないでしょう。この料理の持つ文化的背景の多様さに思いをはせながら、一度是非皆さんにも食べていただきたい一品です。

(19) これまでの調査結果やインタビュー記録の一部を「三河地震六〇年目の真実」（木股文昭・林能成・木村玲欧著、中日新聞社、二〇〇五）にまとめた。また、林能成・木村玲欧「一九四五年三河地震の被害と海軍基地の対応について」（歴史地震、第二十一号、および、木村玲欧・林能成「一九四五年三河地震の被災者心理と行動パターン——災害発生後一〇〇時間 失見当、救助・救出、安否確認——」（歴史地震、第二十二号）などにも調査結果が記されている。興味をもたれた方は一読いただきたい。

死に至る病のリスクに備える

カール・ベッカー CARL BECKER



カール・ベッカー
一九五一年米国シカゴ生まれ。ハワイ大学東西センターより一九七三年に東西比較哲学の分野で修士号を得たのち、数年にわたって京大等にて研究し、一九八一年に同センターより博士号を取得。阪大、ハワイ大、筑波大等の教歴を経て、現在、京都大学大学院人間・環境学研究科教授。日本研究により、国際教育研究学会（Society）の国際理解賞、ロンドンやボンベいの大学より名誉博士号を受賞。環境を含む生命倫理、医療倫理等の研究で国際的に活躍。日本宗教学会理事、日本生命倫理学会理事、日本人倫学会理事、自然治療研究協会理事、生存科学会評議員等。著書に「死の体験」「法威館」「生と死のケアを考える」「法威館」「死」と臓器移植」梅原編、朝日文庫」等多数。

古代から江戸時代に至るまで、疫病とは目に見えない怨霊や疫神（えやみのかみ）が外からもたらすものであると日本人は信じていた。そこで、注連縄で境界線を守ったり、村内を清めるために疫神の化身として人形を流したりした。我々現代人も、外からやってくる、目に見えぬウイルスや細菌を如何に国境で食い止め、国内をできるだけ殺菌できるよう挑戦しているところである。とはいえ、疫病は怨霊や疫神の悪戯ではなく、我々人間の仕業、つまり人間の行動に起因するものであると我々現代人は認識しつつある。また、今も昔も人々は急性病を恐れ、それに対する関心が集まる一方で、中期・長期間患う病の死亡率の方が高いことが、明らかになっている。そして、これらのリスクが一番高い病も日頃の注意によって予防が可能であるので、我々が更に先見の明を持てば、かなり予防できることを、我々は認識しつつある。

本稿では、死に至る病のリスクを、（１）急性でもリスクが低いもの、（２）慢性的でリスクが高いもの、（３）現代社会全体が直面せざるをえないものという三群に分け、それぞれに対する予防策を端的に考えてみたい。

なお、本論である病理論に入る前に、統

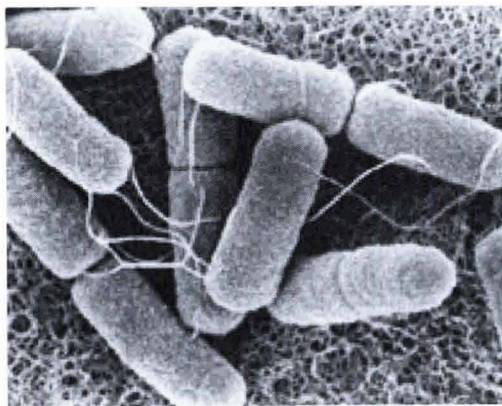
計や数値について若干断つて置きたい。計算を中心にしたシミュレーションなどからリスクを論じた意義深い論文も数多く発表されているが、筆者が人文系の研究者であることと、紙面の関係から、本稿は統計計算を中心に論ずるものではない。統計計算の研究の価値は大いに認めるところであるが、数字は印象的で確実そうに見えても、リスク論になると、無数の不確定要因が絡んでおり、実際の応用は困難な側面もある。正確に数字を示したところで、年齢、性別、地域環境等が少しズレただけでも、結果が全く異なったり、計算不可能になったりすることもある。例えば、風邪を引く確率二・三％と「正確に」計算できたとしても、実際にその数値を特定の個人に当てはめるのは無理である。ある個人が風邪を発症するかしないかは、計算とはほぼ無関係に、生活環境、免疫力、食習慣、睡眠、風呂、冷暖房等々によって決まる上に、その個人にとっては二・三％の確率で発症するのではなく、あくまでも引くか引かないかということになる。

更に、人間のリスク認識と、実際のリスク計算とが、大幅に異なることは、不思議な現象としてよく知られている。例えば、毒蛇や毒蜘蛛に噛まれて死ぬリスクは数字

的には皆無に等しいのに、「怖い」というイメージが先走りするので、他人に注意されなくても恐れられるのに対し、ヘルメット、無しのバイク運転や救命胴衣無しの釣り、アルコールと薬品の併用、コンドーム無しセックスなど、統計上かなり危険度が高いとされる行為を、殆ど恐れることなく毎日繰り返す人は数多い。つまり、統計計算は、リスクのイメージ作りの一要因にしか過ぎず、計算不可能なイメージとは同じ天秤に掛けられない面もあるわけである。以上のような理由で、本稿ではリスクの順位などは取り上げるが、統計的数値にはこだわらず論を進めてゆきたい。

1. 急性病・微生物に因る低リスクの「死に至る病」とそれぞれの対策

日本のマスコミで一番報道される急性病の例としては、O・157やBSE「ウシ海綿状脳症」（俗に言う「狂牛病」）が代表的であろう。ニユース性は高いのだが、国内でこれらの病気になる人数はごく僅かである。いずれも肉食と不衛生に深く関連しているもので、下水の管理、食物の熱処理、調理場の消毒、そして米国産牛肉の検査を徹底すれば、今後増える恐れは殆ど無いと言えよう。アメリカの杜撰な管理体制にウン



大腸菌 O-157 撮影倍率：20,000

ザリだが、そもそも魚介類中心の和食を徹底すれば、BSEの発症の恐れはまずない。

世界的に見ても、現代の日本人が急性病によって死亡する確率は極めて低い。特に感染に弱いのは新生児だが、日本の乳児死亡率・出産期の死亡率は類を見ない程に低率である。しかし、青年・中高年のウイルス感染者は陰で着実に増加している。パニックを避けるためか、日本政府は、ウイルス性型肝炎患者を百万人台、エイズ患者を一万人台と推定しているが、後者はその一〇倍を超えるという認識は、国連や研究者の間では常識となっている。最近では、これらのウイルスに輸血や注射器によって感染することが知られるようになり、スクリーニングや加熱製剤を用いた輸血が普及し、日本では輸血や注射器からの感染はごく僅かとなった。その結果、現在の感染の殆どは性行為に因るものとなっている。従って、セックスを避けるか、皆がコンドーム使用を徹底すれば、流行は起こり得ないはずで



狂牛病処分

あるが、性病や性行為によるウイルス感染に関する日本人の認識は極めて低い。そのために、肝炎やエイズの感染者が増加し続けているのである。

最近更に恐れられているウイルスは、SARSや新型鳥インフルエンザ等、空気感染をするウイルスである。インドネシアやナイジェリア等で既に数十名の鶏の所有者が死亡し、世界中に鳥自体がウイルスで死んでいる事実から推測するに、インフルエンザが大流行してもおかしくない事態となっている。現時点では、鳥の死亡原因となっているウイルスは、感染した鳥や実験動物との接触が無ければ、せき・くしゃみ等で人間が新型インフルエンザにかかることは無いと言われているが、将来的には、その可能性は否定できない。（肝炎やエイズのウイルスも、実験動物の体内で空中感染可能な種類に突然変異を起こしているので、ネズミやサルの子・くしゃみによって人間も感染する可能性があると考えられている



SARS対策

る。）では、くしゃみなどで感染可能なタイプに変身した場合、どのようなリスク管理が必要なのだろうか。中国のSARS流行時は、徹底した消毒と隔離によって、死亡率を抑え、流行を限定できた。せき・くしゃみする者が徹底的にマスクを付け、定期的な口と手の消毒をさえ行えば、スペイン風邪のような流行を恐れる必要は無いはずである。

とはいえ、将来的には、流行病の可能性を完全には否定できない。例えば、微生物の進化に因る感染の恐れは、新型ウイルスには限らないからである。根絶あるいは収束したと思われる西ナイル熱、デング熱、黄熱、マラリア等が、最近再発症している。そして、これらの細菌は進化した結果、従来の抗生物質に対して抵抗力を持っている。日本で発症が見られないのは、これらの病原菌を運ぶ蚊が日本の冬を越せないからだと思われるが、地球温暖化によって気温が二度上がれば、九州や四国をはじめ

め、千葉などからも、新型西ナイル熱、デング熱、黄熱、マラリア等が流行するのは時間の問題であろう。農業に対して抵抗力を持つ蚊と、抗生物質に抵抗力を持つ病原菌が日本に上陸する前に、何とか地球温暖化に歯止めを掛けるためには、個人レベルの予防対策よりも国家・地球レベルの協力対策が急務であると言えよう。

以上見てきた流行病は、確かに「怖い」が、食生活と衛生、消毒と性行動に徹底的に注意を払いさえすれば、日本人が大量に死ぬリスク（危険度）は極めて低い。現時点では、交通事故、火事、食中毒、転落などによる死亡率の方が、以上の感染病による死亡率よりは遙かに高い。しかし、交通事故や火事よりも更に十何倍も危険な病気が、身近なところで流行している。次に、その危険度の高い病気について考えてみよう。

2. 高リスクの「死に至る病」とそれぞれの対策

明治政府は軍事医療を出発点とし、西洋の医療を新国家の模範とした。その結果、日本の公衆衛生は大幅に改善され、バクテリアによって起こる結核、ペスト、ジフテリア、チフス、コレラ等の病気は日本から殆ど姿を消した。殺菌された部屋で患者をゆっくり休息させ、栄養を補給すれば、殆どの場合、二、三週間の内に患者が回復するか否かの結果が出た。この百年の間に、バクテリア感染によって死亡した日本人の数は激減した。そのかわりに、癌、脳内出血、心臓病のような生活習慣に起因する病気で死亡する日本人が急増した。ところが、

大変皮肉なことに、これらの生活習慣病に明治時代に導入された西洋の救急医療を適用しようとする医師が、現在でも少なくない。当然のことながら、その治療の成果は芳しくない。殺菌消毒された病室で、薬と栄養を施し、患者を安静にさせて急病は治っても、癌、脳卒中、動脈硬化などは治らないからである。そのために入院が何年間に及び、最終的には元の慢性病ではなく、病院で感染した風邪等によって亡くなる老人が多いのが現状である。以下では現代の日本人の死因となっている四大病を見て、その原因と予防策を考えよう。

日本人の第一番目の死因は悪性新生物（癌）で、第二番目の死因は脳血管疾患であることはよく知られている。ただし、第三死因である心疾患（動脈硬化、心臓病、心筋梗塞）や、糖尿病による腎不全等は、食生活の急変に伴い、西洋諸国並に急増しつつあり、脳血管疾患を越えてもおかしくない程である。一般的に、癌は煙草やアスベスト、アルコールのような毒物の摂取により、脳梗塞は塩分の摂取により、心臓病・心筋梗塞は動物脂肪の摂取により、糖尿病は糖分の摂取による、というように認識されている。しかしながら、リスクはそう単純比例するものではない。急性流行病の場合は、一種類の微生物による単一原因説が強い（実は、そこでも免疫などの要因も大きいことが最近になって論じられている）。だが、日本人の死因となる慢性病は、単一原因説では片付けられず、同時に複数の要因が絡んでいることが殆どである。即ち、毒物摂取、塩分・糖分・脂肪酸摂取、

ストレスと運動不足が複合的にリスクを高めているのである。もし自分自身のリスク計算をしてみたいと思うならば、英文ではあるが、ハーバード大学医学部のホームページを開くと、ゲーム感覚で簡単なアンケートに自分のデータを打ち込み、癌、糖尿病、心臓病、骨粗鬆症、脳梗塞に関するリスクを自分で試算できる（<http://www.yourdiseaserisk.harvard.edu>）。慢性病のいずれについても、注意すべき因子として、

(1) 肥満、(2) 運動不足、(3) タバコ、(4) 悪食習慣が挙げられている。

人類の長い歴史を遡ってみれば、百年程前までは、人類は殆ど変わらぬ生活を送ってきた。太陽と共に寝起きをし、自給自足に近い自然生活を営んできたのである。ところが科学技術の著しい発展により、先進国諸国の人びとは時刻を問わず電気を付けて働き、好きな食物を遠くから輸入して好きなだけ食する贅沢さを享受している。そこで幾つかの歴史的な教訓が見えてくるのである。ごく最近まで、人類は毒物である煙草やアルコールは勿論のこと、塩分、糖分、動物脂肪分の多い食物を食べることは減多になかった。現代人は無意識の内にこれらの摂取過多となっており、癌、高血圧、糖尿病、動脈硬化等のリスクを高めている。日本人の喫煙率と飲酒率は世界でも高い方で、最近男性の喫煙・飲酒率は多少下がったものの、若い女性の喫煙・飲酒率が上昇傾向にある。なお、腸の長さや腸内微生物から腎肝機能まで、日本人の身体は欧米の白人の身体と様々な点で異なるので、欧米人と同じ食生活をすれば、日本人の方が不



糖尿病は日本の高齢化に伴って急増している

純物を体内に蓄積し、肥満や糖尿病を患いやすいことは、よく知られている。西洋においてでさえも、伝統的な和食が健康的であると賛美される時代となったが、誰よりも日本人にこそ青魚、海藻や野菜、伝統的な和食が身体的に合っていると見えよう。

一見楽そうに見える座りっぱなしの生活が慣習化したのも、第二次世界大戦後のことである。運動不足によってストレス解消が十分に出来ないために、胃潰瘍や動脈硬化を患う日本人が増え続けている。骨や筋肉の増進の為、更には高齢での健康の為に、適切な有酸素運動を若い頃からし続けることが重要である。

動物や原始人は攻撃や危険に出会うと、「戦うか逃げるか」という選択に迫られた。その結果体内では様々な変化が起こり、例えば胃酸が急に殖え、消化活動を中止し、アドレナリンやコチゾン等が動脈に分泌

され、肉体運動が出来る体勢に入った。そこで体を動かし運動をすると、これらのホルモンが吸収されたり消耗されたりしたのであった。しかし、現代人の体内でも不快感やストレスによって原始人と同様に様々な変化が起こるものの、運動をしない。すると体内の胃酸やホルモンはいつまで経っても消耗されず、結果として胃潰瘍や動脈硬化等の原因となる。タバコ、アルコール、テレビ等は「ストレス解消」だと思われているが、頭は一時的にストレスを忘れても身体にはストレスは蓄積されたままで、むしろ逆効果である。

唯一の完全ストレス解消方法はやはり有酸素運動である。猿をみても分かる様に、動物は絶えず動くものであるのに、現代人は朝から晩まで座りっぱなしの生活を送っている。運動不足による肥満、筋肉の弱体化、骨粗鬆症などは、一時的な病に終わらず、高齢になる程深刻な慢性病となる。従って、リスク論的に言うならば、高齢になつてから骨折、脳梗塞、癌、心臓病、糖尿病や痛風の治療に高額をかけるよりも、若い時からその一%でも投資をして、生涯健康に過ごせる方が幸せばかりか、公衆衛生上経済的である。若者の体力が運動不足などにより毎年低下していることは、残念ながら、彼らが高い確率でやってくる将来の病気に対して免疫力を備えていない証拠である。

日本の場合、リスクの高い癌や心臓病で痛い目に遭うのは患者本人だけではない。その医療費を捻出し、負担しなければならぬのは国民、つまり納税者全員である。

「喫煙は自分の勝手」と言う人は、極論を言えば、無断で自分の医療費のために周りから金を集めているのである。喫煙は飲酒運転の様なもので、たとえ直接的に被害を受けるのは運転手自身だけであつたとしても、間接的には国民全員が支払われる保険料を奪うことになる。であるから、リスク論から見ると、タバコやアルコールの中毒を「個人の自由」と許容せず、病理学的な対応をすべきであるということになる。小額のタバコ税や販売利益だけでは、タバコの害による全国の死亡・医療費・生産ロス・経済負担を賄えないので、スウェーデン等はタバコに一箱千円ぐらいの値段を付けている。タバコに限らず、個人レベルでも国家レベルでも国民の死因に関わる全てのリスクを、再検討・再教育する必要がある。じている時代が到来したと言えるだろう。

3. 不可避の「死に至る病」とそれへの備え

以上、日本人が抱えている健康問題として、微生物が原因で低リスクの「死に至る病」と、生活習慣に起因する高リスクの「死に至る病」を、リスクの病理論の観点から考えてきた。しかし、このような議論には、「くかも知れない」という数値的な確率論に終わってしまう危険性がある。数十年以内に地震、新型インフルエンザ、エイズ、或いは自分の脳梗塞・心筋梗塞が起こる「かも知れない」のであるから、それらのリスクに対して徹底した予防策を講じるべきである。公衆衛生の更なる改善や、耐震構造住宅の普及と合わせて、ウイルス

肝炎やエイズ感染、狂牛病、温暖化、喫煙や飲酒、生活習慣病の防止対策を推し進め、国民をリスクから守る義務が日本政府にはある。しかしながら、以上のいずれもが「起こるかも知れない」リスクであるのに対し、「起こるのがほぼ確実」、つまり不可避なリスクが見落とされている。このようなリスクを視野に入らずにリスクを論じては、片手落ち以外の何物でもないだろう。よって、最後にその不可避の「死に至る病」と対策を考えてみたい。不可避なリスクを起す要因には様々なことが考えられるが、ここでは医療に関連する死亡リスクに限定し、(1)医療財源不足、(2)看護師・介護師不足、(3)資源・食糧不足を簡単に検討してみたい。

(1) 医療財源不足

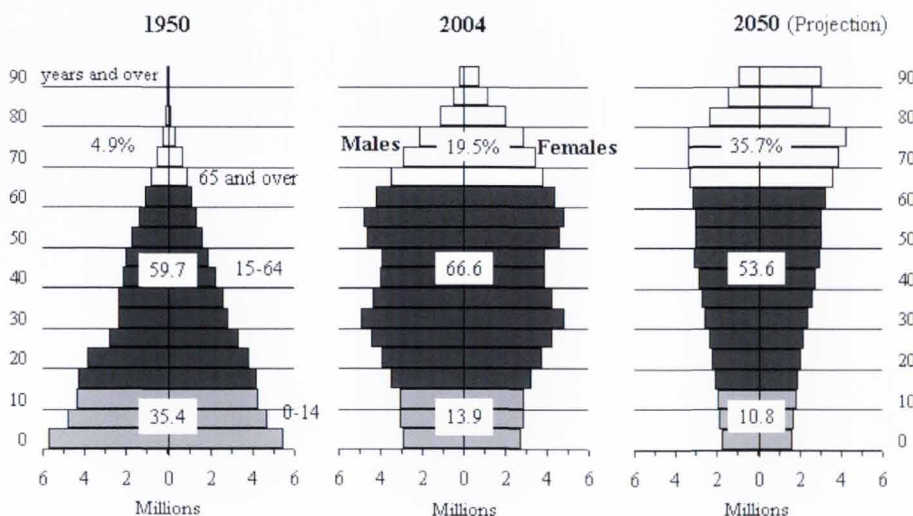
北欧やカナダは、日本レベルの医療福祉を維持するために国民に年収の五、六割もの所得税と一、二割もの消費税を課しているが、それでも現在ではパンク寸前の状況にある。日本は、医療福祉を全く軽視している米国並みの課税（年収の三割程度）しか取らないので、医療福祉出費と収入の不均衡を補うために毎年三〇兆円もの公債を発行して、何とか制度を維持している。そのために、日本は財政的に既に借金地獄に陥っている。生涯の医療費の半分以上は死亡する前の約二年間に使われるという統計結果を考慮に入れば、高齢社会では現在の何倍もの医療費が必要になることになるが、その予算の財源は存在しない。日本は、これまでどの先進国にも増して、透析患者・痴呆症患者・寝た切り老人・エイズ患

者の治療を国家が支えてきた。しかし、国家医療制度の財政的な破綻によって、これらの高度医療を必要とする患者は他国並に自己負担せざるをえなくなるばかりか、多くの医療サービスが切り捨てられることになるだろう。これは悲しい現実ではあるが、日本人に収入の六・七割にものぼる金額を税金として払う覚悟がなければ、ゆとりの医療は許されなくなるのである。

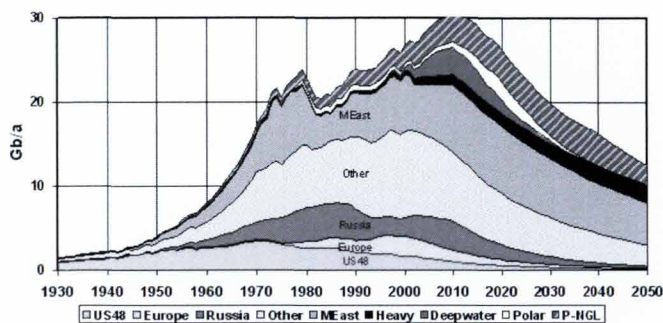
(2) 深刻な看護師・介護師不足

看護師・介護師不足は、若者の数が少ないからでも医療費が不足しているからでもない。たとえ子供が沢山産まれたとしても、看護・介護に進んで従事する若者が増えるとは限らない。そこで、対策として、次の二つの選択肢しかないように思われる。一つは、壮健な老人に介護の必要な老人の世話をしてもらうこと、もう一つは、若者に対して、一、二年程度の看護や介護を義務付けることである。先進国の中にはスイス、イスラエルなど、高校を卒業した男女に、一、二年ばかり国のために働く義務を課している国がある。労働の内容は、農業、林業、病院、介護・福祉、道路や公園の整備、その他手の足りない分野に及ぶ。国の指導管理下、共同生活や体力作りの訓練をはじめ、実社会を支える一番根源（基本）的な労働を経験すると同時に、自分を育ててくれた社会は皆の協力によつてはじめて成り立つということを、若者は身をもって学ぶのである。最低限の衣料や食事、宿泊のほかに、ごく僅かな基本給も支給される。若者の中には、このような奉仕事業を通じて、更に農業や福祉の道をライフ・ワークにし

たいと思う者も現れるし、そうでない者でも農業や福祉を当たり前とは思わなくなる。現在、日本の一八、九歳の半分以上の若者は、無目的に大学で暇をつぶしているか無職であり、いわゆるニートが急増している。それに対し、二年ほど実社会で厳しい労働を経験すれば、人生の目的や価値、大人としての責任を学び、無職・無目的の若者や彼らによる犯罪は激減するはずである。更に、経済的には、労働不足の改善と政府の



日本の人口ピラミッドの変化（厚生労働省WEBサイトより）



原油および天然ガスの減耗予想図 (2003年度ベース)
(Newsletter of Association for the Study of Peak Oil, May 2003より転載)

支出の削減に貢献できるだろう。

看護・介護不足に対してロボットや外国人に頼るべきであるという意見は存在するが、ロボットや外国人は、患者が必要としているコミュニケーションなどを提供できないばかりか、財政的にもロボットや外国人には多くのコストがかかるため、たとえロボットや外国人の介護を欲しがる患者がいたとしても、非現実的である。

(3) 資源・食糧不足

日本の人口は、およそ一億三千万人である。出生率は減っても、平均寿命が延びているために、この数字は今後長期間にわたって大幅には変わらないだろう。他方、日本は食糧の八割、エネルギー資源の九割、日用品の殆どを外国からの輸入に依存している。石油による化学肥料とトラクターな

どの機械を前提にして日本列島が維持できる人口は、多めに見積もっても三千万人前後であると言われている。石油と科学肥料が確保できない場合、無論その人数すら養うことは無理なわけである。人類の歴史を見ても、国土が支え得る人口の四倍もの人びとを維持する実験を試みた国はない。では、この極端に超過した人口を支える食物を獲得するための最低条件とは何なのであろうか。単純化して言えば、食物を海外から輸入するのに十分なほどに国際貿易収支を黒字とし、食物を海外から運ぶだけの燃料も確保することであろう。隣国である韓国、フィリピン、中国をはじめ、東南アジア諸国の多くは、人口増加と飽食により、現在では、穀物輸出国から輸入国に急変している状況にきている。リスク・シミュレーションしてみると、一〇年後にお米をはじめとした穀物を日本に対して輸出できる国はおそらく北米と豪州くらいであろうが、両方とも労働コストが高く、運送距離も長い

ため、高額を支払わなければ輸入は実現しないだろう。

更に致命的なのは石油資源の枯渇である。石油を日本が確保できなくなると、国内の交通網・化学肥料・石油に依存しているビニールハウス栽培は不可能になる。食物輸出国の北米や豪州から食物を運ぶ燃料がなくなると、運送手段もなくなってしまうことになる。その結果、三千万人くらいの人口しか支えられない国内生産力しか残されない日本が取れる選択肢は、計画的に人口を毎年四、五百万人ほど減らすか、二十数年前に北朝鮮の飢饉を遥かに超える危機的

な飢餓状態を覚悟するかのいずれかしかなだろう。

つまり、日本人の死に至る病の最大のリスクは、熱帯伝染病でも癌でもなく、食糧不足である。国土と国力が支え得る四倍もの人口が存在する以上、それを徐々に減らす以外に国が存続する道はない。若い人が足りないという論者もいるが、バブル時代に建設した新空港が石油のない三〇年先にはゴーストタウンになると同様で、日本列島で人を殖やせば殖やす程、将来確実に到来する飢餓は悪化するのみである。

持続可能な状況を達成するには、エネルギーと食糧自給自足を目標とし、不足分を輸入する為には、隣国を上回る低コストで高い生産力を実現する以外にない。言い換えると、急性流行病に対する備えは大事であるし、慢性疾患に対して個々人が生活習慣の改善を心がけると共に、国家として医療福祉と保険制度の再編も不可欠である。しかし、これらのリスクに個々人が遭遇する確率は三割以下である。それに対し、資源のない日本列島が数十年先に一億もの人口を支えきれなくなるのは、ほぼ一〇〇%に近い確率である。計画的な人口減少と、他国以上の輸出を引き続き実践する以外に、この死の危機を避ける道は無い。

流行感染病、末期疾患、食糧危機などを考えると暗くなると言う人もいる。しかしリスク論はそれらの危険を予防・軽減するためにある。今の内に、流行感染病、末期疾患、食糧危機などを真剣に考えてはじめて、有効な対策を選択・実践することが可能になるのである。

化学物質のリスク管理

—食品残留農薬からの安全確保—

山本行男

YUKIO YAMAMOTO



山本行男（やまもと ゆきお）
一九四九年京都市生まれ。京都大学農学研究科博士課程（農芸化学専攻）中途退学。京都大学化学研究所助手、京都大学教養部助教授を経て、現在京都大学人間・環境学研究院教授。専門は生体関連物質の有機化学。主な著書「クリック！有機化学」（化学同人、二〇〇五年）など。

本稿の内容は著者の専門領域というわけではないが、独法化以降めつきり厳しくなった安全管理の役目の一端を担わされている立場から、最近この辺のことを考えることが多くなった。その一部を述べたいと思う。

平成一七年一二月、食品安全委員会はアメリカ産牛肉の安全性は国産牛肉のそれとほぼ同等であると認め、その結果アメリカ産牛肉の輸入が再開されることになった。

それも束の間、平成一八年一月、輸入肉の一部にBSE危険部位が残っていることが分かり、輸入は再度停止された。この輸入が再び始まり一般市場に回るには、またかなりの時間がかかると思われる。今、食に対する消費者の不安は極に達しているが、冷静に考えてもらいたい。どんなものにも「一〇〇%安全」ということはありえず、一定のリスクを抱えながら、それを利用するベネフィットを享受するものである。すなわち、安全性が十分高く、これ以上費用をかけても安全性向上はわずかであるという、図1に示した領域Aにあるなら「これでよし」とすることである。総論としては賛意が得られると思うが、各論となると、たとえば生産者と消費者という立場の違いや、ものごとに対する価値観の違いから、納得しない人は多い。また、このグラフに

目盛りを入れること、何かを尺度にして安全性を数値化することはきわめて難しいが、それなしでは冷静な議論はできないので、ここで数字を少し紹介してみたい。

イギリスにおけるBSE感染牛は数十万頭と推定されるのに対して、vCJDによって亡くなった人は一五〇数名である。一方、アメリカではBSE感染牛がせいぜい数十頭から数百頭でvCJD患者はいない。すなわち、ヒトがウシから感染する確率は低く、また感染牛が輸入される確率もきわめて低い。全頭検査を実施し、牛の年齢を一頭ごとに押さえている国産牛肉よりアメリカ産輸入牛肉のリスクが高いのは事実であるが、この問題が領域Aにあるなら大騒ぎする必要はないはずである。専門家や一部の冷静なマスコミを除いて、一般には「危険だ危険だ」とあたかも領域Bにあるかのような議論ばかりが目立つ。そのくせ、アメリカに行ったら「牛肉を食べるな」と誰も言わないのも変な話だ。こんなことよりずっと大きなリスクは他にもいっぱいあると言いたい。たとえば、アスベストによつては二〇一〇年までに一万人以上の死者数が予測されている。これにしても一時は大騒ぎしたが今はほとんど報道されなくなつてしまった。「人の噂も七五日」いずれは

みんな外食牛丼や牛タンを「おいしいおいしい」と食べる時が必ず来ると思う。

表1は平成一六年の食中毒の原因物質別統計である。例年だいたいこのような数字になり、これが食に関するリスクの実態である。「注意しなさい」と普通に言われるサルモネラ菌、ブドウ球菌、ノロウイルス等が最大のリスクであることが分かる。また、自然のものは安全で合成化学物質は危険と思われるが、実際はその逆であることも読み取られるだろう。自然毒とはフグ毒、キノコ毒等であるが、この年騒がれたスギヒラタケによる死亡事故（約一〇人）は原因が明確でないため、統計には含まれていない。しかし、合成化学物質たとえば食品残留農薬の危険性はこういうことではなく、「体の調子がじわじわおかしくなってくるというものだ」と言われるだろう。これからこの慢性毒性のリスク管理について述べてみたい。

意外に思われるかもしれないが、農業に対して要求される安全性基準は医薬に対するものより厳しい。副作用が少々あつても、これしかないという医薬は許されるが、農薬では許されない。医薬は医師や薬剤師という専門家の管理下に使用されるが、農薬は一般の農家の人が使用する。医薬と違つ

（1）vCJD…変異型クロイツフェルトヤコブ病。牛海綿状脳症（BSE）の牛肉や牛製品を食べたことが原因であるとされている。

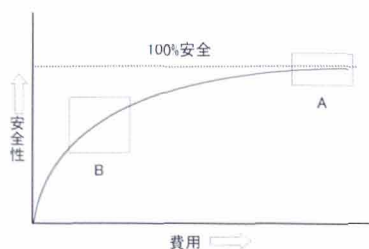


図1

平成16年 病因物質別食中毒発生状況
厚生労働省

原因物質	総数		
	事件	患者	死者
総数	1,666	28,175	5
細菌	1,152	13,078	2
ウイルス	277	12,537	-
化学物質	12	299	-
自然毒	151	433	3
その他	5	8	-
不明	69	1,820	-

表1

て農業は環境中に広く散布されるため、環境にダメージを与えるようなものは使用できない。以上が農業の安全性基準の厳しい理由である。慢性毒性試験は実に多くの項目について行われ、ある種の試験では親だけではなくその子についてまで観察が続けられる。まず、試験する農業の用量を変えて実験動物に一生毎日与えて、まったく影響の現れない用量（無影響レベル）を見つける作業から始まる。農業をはじめとする一般の化学物質の用量と毒性の関係は一般的に図2のようになり、毒性はある用量を超えてはじめて現れる。言葉を換えると、一定量以下の用量では毒性はないとするもので、これを「閾（しきい）値あり」モデルと呼ぶ。すなわち、生体には防御機構があり、その能力を超えたとき、はじめて障

作物	最大作物残留量 (ppm)	基準値 (ppm)	フードファクター (g)	推定摂取量 (mg)	許容摂取量 (ADI × 50)
①	0.97	2	55.9	0.1118	ADI 0.08 mg/kg/日 日本人の平均体重 50kg として計算
②	0.87	2	1.4	0.0028	
③	0.47	1	15.7	0.0157	
④	0.31	1	4.6	0.0046	
⑤	0.82	2	23.4	0.0468	
⑥	0.33	1	30.0	0.03	
⑦	0.46	1	24.6	0.0246	
⑧	0.38	1	2.1	0.0021	
⑨	0.16	0.5	0.1	0.00005	
⑩	0.15	0.5	0.4	0.0002	
合計				0.23865	4.0 mg/人/日

表2

害が現れるという考えに一致している。この実験動物での無影響レベルに、種が異なるため、ヒトの中でも性別や年齢が異なるため、安全係数 $1/100$ をかけて一日摂取許容量（ADI）³が定められる。すなわち、毎日、体重 1 kg あたり、ADI（mg）摂取しても安全であるとするわけである。

次に、ADIを各作物に振り分けて、そ

の農業の残留基準値を定める作業に移る。ある農業が作物①～⑩に使用される場合を考えてみよう（表2）。その農業が効果を発揮するために必要な処置量と、消費者の口に入るまでの分解率を考慮して、実験的に最大作物残留量（ppm）を求める。残留基準値（ppm）がこの値より小さくないといふ農業として効果を発揮できないので、この値より若干大きな値にまずは設定する。作物ごとのこれを合計すると、口に入る残留農業の量が推定できる。それには、どの作物がどれほど摂取されているが知らなければならぬが、この目的に国民栄養調査によるフードファクター（g）が利用される。すなわち、平均的な日本人が普通に食事をしたとき、一日あたり摂取する各農作物の平均的重量である。農業の推定摂取量（mg） $\parallel$ 残留基準値（ppm） $\times$ フードファクター（g）を計算し、これを使用する作物①～⑩で合計する。この値とADIに日本人の平均体重をかけた値、すなわち許容摂取量と比較して、合計推定摂取量が許容摂取量より少なければこれで「よし」とする。もしこの条件をクリアできないならば、使用できる作物を制限することになるが、そのような農業は敬遠される。このように農業（殺虫剤、除草剤、殺菌剤）としての活性が強い一方、ヒトを含めた哺乳類に対する毒性が小さいものしか使用できない仕組みになっている。

このADIを中心に据えた農業の慢性毒性についてのリスク管理は、農業の使用基準と残留基準値の順守によって保証されることになる。「作物○○に残留基準値を上

（2）一般の化学物質とは異なり遺伝子に直接障害を与える放射線や特殊な化学物質に対しては「閾値なしモデル」、すなわち、どんなに低レベルであってもそれなりに毒性があるというモデルが用いられる。この場合、限られた数の実験動物を用いた実験から、実質的安全レベルを数学的に推定する。

（3）ADI：Acceptable Daily Intake。ダイオキシン類に対して用いられるTDI（Tolerable Daily Intake）も同じ意味の用語である。



図2

回る農薬△△が検出され、回収されることになった。既にこれを摂取した場合でも、健康上直ちに悪影響を及ぼすものではない。」と報道されることがあるが、この記事の前半部分がリスク管理である。基準値オーバーの一つの農作物を食べたとしても他の農作物では問題ない、その農薬のADIを急を超えるとは考えにくい。また、一生摂り続けてどうかという観点からADIは設定されているので、たとえADIを超えたとしても短期間なら影響ないと考えられる。すなわち。これが記事の後半部分である。通常行われる調査は、個々の農作物に対する個々の農薬残留量であるが、平均的な食事について残留する農薬量を合

	農薬A	農薬B	農薬C	農薬D	農薬E	農薬F
残留基準値 (ppm)	作物①	0.2	5.0		3.0	
	作物②	0.5				
	作物③	0.5	5.0	2.0		
	作物④	0.2	2.0			
	作物⑤	0.2		0.5		
	作物⑥	0.2		2.0		
	作物⑦	0.5				

表3

	農薬A	農薬B	農薬C	農薬D	農薬E	農薬F
残留基準値 (ppm)	作物①	0.2	5.0	0.5	3.0	0.01
	作物②	0.5	0.01	1.5	2.5	0.5
	作物③	0.5	5.0	2.0	0.01	0.01
	作物④	0.2	2.0	0.2	0.01	3.0
	作物⑤	0.2	0.01	0.5	0.01	3.0
	作物⑥	0.2	0.01	2.0	0.01	2.0
	作物⑦	0.5	3.0	0.2	0.01	2.0

登録保留基準 コーデックス基準 海外の基準 一律基準

表4

計した調査もある。この調査はすべての農薬について実施されているわけではないが、調査の範囲内では、いずれもADIの数%以内というかなり小さな値となっている。⁴著者は慣行農法で作られた普通の野菜や果物になら不安を感じないが、どうも少数派らしい。食の安全に関するどのような調査でも、大多数の消費者は残留農薬に大きな不安を抱えている結果が得られている。消費者にとって農薬は直接的メリットがないこと、既に使用されなくなった古いタイプの農薬のイメージがまだまだ強いこと、天然物に対する安全神話等々、いろいろな要因が考えられるが、この不安が国を動かす、平成一八年五月さらに厳しいリスク管

理「残留農薬のポジティブリストによる規制」が実施された。

ポジティブリストとはそのリストにあるものは使用できるが、それ以外は使用できないという管理方法で、食品添加物がポジティブリストで管理されている。⁶これと対極にあるのがネガティブリストで、そのリストにあるものは使用できず、それ以外は使用できるという管理方法であり、化粧品成分がネガティブリストで管理されている。⁷今までの残留農薬規制方法とは「この農薬はこの作物にこれ以上残留してはいけない」という規制方法であり、一種のネガティブリスト方式と言える。現実使用される作物についての基準を積み上げて作られた規制方法であり、それ以外、すなわち使用を想定していない作物について基準値は設定されていない。基準がないということとは「何でもありか」ということで、「これではザル規制だ」という批判があった。五月以前は、二四四種類の農薬と約一三〇種類の農作物の組み合わせにより八〇〇〇あまりの基準があった。これをすべての農薬とすべての農作物の組み合わせ（700×130＝91,000）に基準値を設定して、それ以内なら残留してもよいという方式、ポジティブリスト制に移行したわけである。この移行を表3と表4にモデル的に示す。それにはまず、今までブランクであったところに基準値を設定しなければならぬが、以下の優先順位で既知の値を埋めていく。⁸①コーデックス基準、②登録保留基準、③諸外国の基準。それがない場合は一律基準値〇・〇一ppmが設定される。これで

(4) 普通の食事から摂取する残留農薬の量は「マーケットバスケット方式」で調査される。それは、食品群ごとに食品それぞれの平均的な喫食量で混ぜ合わせ、ミキサーにかけて分析する方法である。
(5) 有機農法や無農薬農法に対して、合成農薬や化学肥料を使用する普通の農法を慣行農法と呼ぶ。
(6) 食品添加物の安全管理も残留農薬と同じように、ADIと国民栄養調査を基盤において実施されている。普通の食事をすると人が摂取する食品添加物の量がADIに比べかなり少ないことは残留農薬の場合と同様である。その中で、硝酸塩はADIに近い値となっている。しかし、この大部分は野菜がはじめから含有していたもので、食品添加物として後から加えられたものに由来するのはごく微量である。
(7) ここで言う化粧品とは薬事法で定められた化粧品であり、一般に言う化粧品より範囲が広く石鹸やシャンプーも含まれる。製造物責任法が整備され、また貿易障壁をなくするための国際スタンダードの流れに沿うよう、二〇〇一年ポジティブリスト方式からメーカーの裁量の幅が広がるネガティブリスト方式に変更された。これに伴い、消費者が内容物についての情報を得られるよう全成分を表示することになった。
(8) コーデックス委員会が定めた基準。コーデックス委員会は、「自由貿易の推進」と「消費者の健康保護」を目的として、食品の国際規格を設定する機関で、一九六二年FAO（国連食糧農業機構）とWHO（世界保健機構）によって設置された。
(9) 今回の残留基準の変更は食品衛生法の改正によるものである。農薬の残留基準については農薬取締法でも「登録保留基準」があり、これがある場合はこれを用いる。

農薬の不適切な使用がすべてチェックできることになるが、この一律基準値 0.01 ppm は極めて厳しい値であるため、生産者を苦しめ、消費者を混乱させないか心配されている。

平成一四年中国産冷凍ほうれん草に残留農薬基準違反が発見され、だいぶ世間を騒がせたので、この事件を覚えている人も多いと思う。しかし、数字については覚えるどころか、気にもしていない人がほとんどだろう。残留基準 0.01 ppm を上回る、たとえば 0.21 ppm の殺虫剤クロルピリホスが検出され、多くの業者が自主回収した。「基準値の二〇倍もの残留」というのも事実であるが、「小松菜の残留基準 2.0 ppm 、キャベツや白菜の残留基準 1.0 ppm 」、その一方「ほうれん草の残留基準 0.01 ppm 」のというのも事実である。「小松菜に残留したクロルピリホスは毒性が弱い、ほうれん草のそれは強い」わけはなく、ADIが「小松菜には大きく、ほうれん草には小さく」振り分けられていただけのことである。

その畑では使用していない農薬が、隣の畑からたまたまドリフトしてくるケースは避けられない。そのため、この制度では「一律基準値 0.01 ppm 」を違反するケースが多発すると予測される。そんなとき、違反という言葉に敏感に反応するだけでなく、基準値の具体的な数字にも注意してもらいたい。もし、先の中国産冷凍ほうれん草の場合と同様であれば、そんなに大騒ぎする必要はない。

以上のように現在の農薬のリスク管理は

概ね満足できるレベルにあるのだが、まったく問題がないというわけではない。いくつかの問題点の中で著者が一番気がかりなのは「埋設農薬」の問題である。現在使用されている農薬は安全性の高いものであるが、はじめからそうであったわけではない。

合成農薬はミューラーによる殺虫剤DDTの発見（一九三八年）に始まり、その後、BHC、パラチオン、ディルドリン（以上殺虫剤）、2,4-D（除草剤）と続き、戦後我国にも続々導入された。これらが公衆衛生の向上と食糧難の克服に大きく貢献したことは、年配の方ならよくご存知だと思う。これら合成農薬の効力は抜群であったが、反面、毒性が強く、農業事故が多発した。そして、一九六二年レイチェル・カーソンは「沈黙の春」を著し、有機塩素系農薬の強い残留性が野生動物に対して致命的な悪影響を与えていると主張した。彼女の主張は衝撃をもって受け入れられ、また、その後人体に対する発がん性等が明らかになってきたため、一九七〇年代以降、これらは使用されなくなった。これら古いタイプの農薬とPCB等は現在POPs（Persistent Organic Pollutants、残留性有機汚染物質）として、ストックホルム条約で製造と使用が制限されている。

問題なのは、使用禁止になったPOP農薬の処理方法である。一九七〇年代当時では仕方なかったものかもしれないが、有害化学物質の処分についての現在の厳しい基準で埋設されたわけではない。その量、農水省の調査で六、〇〇〇トン、TBSテレビの調査で一二、〇〇〇トンに及ぶ。これ

による環境汚染は、現在までも散発的には報告されているが、世間的な認知度はまだ低い。しかし、早いか遅いかはあっても将来問題が顕在化するのは必然的で、PCBと同じような処理システムの構築が望まれる。

ボジティブリスト制実施が農家に大きな負担をもたらすことについては、農業関係従事者だけでなく、多くの専門家が危惧している。残留基準値違反によって、出荷が停止されるだけではなく、産地のイメージダウンは避けられない。一般消費者が残留基準値の意味を理解して、冷静な対応をとることを祈らざるを得ない。昔から言われてきた食中毒病原体が食の安全についての最大のリスクであるのと同様、最も危険で注意すべき化学物質は、火災時や不完全燃焼時に発生する一酸化炭素（CO）であり、次に、下水溝等限られた空間内に思いがけず充満している硫化水素（H₂S）である。当たり前の話であるが、これらは太古の地球から存在する紛れもない天然物である。それらに比較すれば、農薬等いわゆる合成化学物質は世間で言うほど心配する必要はない。最後に、説明は繰り返さないが、極端に偏食する人は残留農薬のリスク管理で守られていないことは理解してもらえたいと思う。皆さん、何でもおいしくいただきますように。

(10) 一般的にはポリ塩化ビフェニルと呼ばれるが、化学的に正しい名称はポリ塩素化ビフェニル。電気設備の絶縁油等、幅広い用途で使用されていたが、カネミ油症事件以降その毒性が社会問題となり、一九七三年、化審法が制定され、その翌年から製造と使用が禁止された。二〇〇一年、「PCB廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法」が制定され、処理プロセスとそのタイムスケジュールが法律で定められた。

(11) スtockホルム条約において、マリリア対策に限定してDDTの使用が認められていることには注意すべきである。DDTを使用することによって生じる健康被害と環境破壊のリスクより、マリリアのリスクは圧倒的に大きい。現代的な殺虫剤（たとえばクロルピリホス）は残留性が低く、したがって環境負荷は小さい。しかし、高温多湿の熱帯地域ではすぐに薬効がなくなり、一度散布したら長く効力を保つDDTに代わる薬剤は今のところ存在しないのが現実である。

●リレー掲載● 環境を考える

人間と地球環境の安全保障

松下和夫

KAZUO MATSUSHITA



松下和夫（まつした かずお）
一九四八年徳島県生まれ。東京大学卒業、米国ジョンス・ホプキンス大学大学院（政治経済学修士）修了。環境庁、OECD環境局、国連上級環境計画官等を経て、現在、京都大学大学院地球環境学教授（地球環境政策論分野）。国際協力銀行環境ガイドライン審査役、国連大学高等研究所客員教授兼務。主な著書に『環境ガバナンス市民・企業・自治体・政府の役割』シリーズ環境学入門⑫、岩波書店（二〇〇二年）、『環境政治入門』平凡社新書（二〇〇〇年）、『森林環境2004』築地書館（二〇〇四年）など。

二〇〇三年八月に閣議決定された「政府開発援助大綱」および二〇〇五年二月に策定された「政府開発援助に関する中期政策」においては、「人間の安全保障」という言葉が中核的な概念として使われている。国連においても「人間の安全保障委員会」が設置され、その最終報告書に基づき「人間の安全保障基金」が創設されている。このようにわが国では「人間の安全保障」が開発援助政策の中核をなしており、また国連などの場でも日本政府はこの考えを強調してきている。⁽³⁾

本稿では人間の安全保障の重要な分野を占める「環境の安全保障」につき、特に地球温暖化問題との関連で考察することとする。

1. 人間と地球環境の安全保障

「人間の安全保障」は、そもそもは一九四四年にUNDPの「人間開発報告」⁽⁴⁾の中で国際社会が取り組むべき方向として提起された考え方である。一九八〇年代末に起こった冷戦の終焉は、世界の人々に平和の配当がもたらす将来への希望を抱かせたが、残念ながら逆に多くの国で内戦が勃発した。

そしてグローバル化の進展が経済的な恩恵をもたらすばかりではなく、感染症や犯罪の広がりなど新たな脅威をもたらしたためである。こうしたことから、領土保全を中心とした従来の「国家の安全保障」のみでは人間の生存が確保できないとの問題意識が生まれ、「人間の安全保障」が「国家の安全保障」を補完する概念として提唱されたのである。

その内容としては、従来の国家の安全保障から人間を重視した安全保障へ、そして軍備による安全保障から持続可能な人間開発による安全保障への転換を促し、そのことによって「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」を確保しようとするものである。⁽⁵⁾ 具体的な人間への脅威として「人間開発報告」では、経済、食糧、健康、環境、個人、コミュニティ、政治の安全保障の七つの分野をあげている。

人間の安全保障論は、国連でもアナン事務総長などによって積極的に取り上げられた。アナン事務総長は、二〇〇〇年八月のミレニアム・サミットで、その報告（「われら人民」）⁽⁶⁾の中で「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」を中軸にすえ、さまざまな脅威や暴力からの個人の保護を強調し、

個人の潜在的可能性を発揮させる機会と選択を保障する包括的な概念として人間の安全保障を提示した。その後このミレニアム・サミットでの国連事務総長報告を受け、さらに日本政府の支援を得て発足したのが「人間の安全保障委員会」（共同議長はノーベル経済学賞を受賞したアマティア・セン教授と緒方貞子元国連難民高等弁務官）であり、二〇〇三年五月にはアナン事務総長あて最終報告⁽⁷⁾が提出された。

報告では、人間の安全保障を「人間の生にとつてかけがえのない中核部分を守り、すべての人の自由と可能性を実現すること」と定義している。センは特に人間の潜在的可能性の実現に注目する。そして国家の安全保障との関係について、以下の四点でそれを補完するものであるとした。

第一は、国家よりも個人や社会に焦点を当てていること、第二に環境汚染・国際テロ・感染症などを安全への脅威に含めていること、第三に、国家だけでなく、国際機関・地域機構・NGO・市民社会なども安全保障の担い手に含めていること、第四にその実現のために人々や社会の能力を強化すること、である。

以上のような人間開発を促進し、平和と

(1) 政府開発援助大綱（二〇〇三年八月）においては、I. 理念 1. 目的 (2) 「人間の安全保障」の視点で、次のように述べられている。
「紛争・災害や感染症など、人間に対する直接的な脅威に対処するためには、グローバルな視点や地域・国レベルの視点とともに、個々の人間に着目した「人間の安全保障」の視点で考えることが重要である。このため、我が国は、人づくりを通じた地域社会の能力強化に向けたODAを実施する。また、紛争時より復興・開発に至るあらゆる段階において、尊厳ある人生を可能ならしめるよう、個人の保護と能力強化のための協力を行う。」

(2) Commission on Human Security 2003, Human Security Now 2003 人間の安全保障委員会事務局訳「安全保障の今日的課題—人間の安全保障委員会報告書」朝日新聞社

(3) ただし、人間の安全保障という言葉は、日本では使われるほどは国際的な開発議論のなかで使われず、むしろ平和構築との関連で「脆弱国家（fragile state）」という言葉がよく使われている。（稲田十一「参議院国際問題に関する調査会会議録第4号、平成一八年三月一日」）

(4) UNDP 1994, Human Development Report 1994 1994 「人間開発報告書1994」国際協力出版会

(5) 「恐怖」の具体例としては、紛争、テロ、犯罪、人権侵害、難民の発生、感染症の蔓延、環境破壊、経済危機、災害などがあり、「欠乏」の具体例としては、貧困、飢餓、教育・保健医療サービスの欠如などがある。

(6) Amman, Kofi A. 2000, We the Peoples, United Nations

(7) 注2参照

安全保障と開発を統合する概念としての人間の安全保障を踏まえ、次に「環境の安全保障」について考えてみよう。

「環境の安全保障」という言葉が世界的な注目を集めるようになったきっかけは、一九八九年に世界資源研究所の副所長をしていたジェシカ・マシューズが「フォーリン・アフェアーズ」に発表した「安全保障の再定義」という論文である⁽⁸⁾。

この論文の中でマシューズは、環境を安全保障の重要な要素として加えるべきとの主張をした。その理由は熱帯林の破壊や砂漠化、水資源の枯渇などの問題が世界各地で進行し、それらが地域紛争の原因や安全保障の脅威となっているからである。典型的には、中東におけるイスラエルとアラブでの紛争の背景には水資源をめぐる紛争があり、アフリカにおける環境難民の発生や部族対立の要因として森林の減少など環境の荒廃がある。例えば、一九七七年から七八年にかけて起こったソマリアとエチオピアの紛争には、環境破壊により遊牧民が放牧できる範囲が狭まり、その結果、土地や水をめぐって、定住している農民（定住部族）と紛争が激化して衝突が起こったという事情がある。

ジェシカ・マシューズがこの論文を発表した一九八〇年代末から九〇年代初めはちょうど東西世界の冷戦構造が崩壊する時期であった。それと軌を一にするようにして、オゾン層破壊や地球温暖化の問題が国際政治の重要課題として浮上してきたのである。当時の国連総会で、モルディブのガウム大統領が、地球温暖化によって自分の国

は海面上昇によって絶滅の危機に瀕している、という悲痛な演説をして訴えたことも有名なエピソードとして残されている。

「環境の安全保障」を考える際には次のような側面を考える必要がある⁽⁹⁾。

その第一は、環境破壊が地域紛争や国際問題の要因となりうることである。既述のように一九七七年から七八年におこったソマリアとエチオピア間の争いは、土地や水をめぐる紛争であった。また、現在も続くアラブ諸国とイスラエルの紛争の根底には水資源の獲得をめぐる紛争がある。

第二は、環境破壊そのものが、国家の存立や国民にとっての脅威となっていることである。旧ソ連邦の体制崩壊の背景には、環境問題の深刻化と、環境をテーマとしたNGOの活動の活発化があった。また、表1に見るように、森林火災による森林消失は急速に拡大しており、各国の経済にも自然にも大きな打撃を与えている。さらにインドネシア（ボルネオ島）で毎年繰り返される商業的植林のための火入れによる森林火災とそれに伴うヘイズ（煙霧）は、海を越えてマレーシア・シンガポール・タイなどの各国民に大気汚染と健康被害を生じ、交通機関への障害も引き起こしている。二〇〇六年二月のレイテ島の地滑り被害のように、フィリピンでの森林減少が洪水など自然災害の被害を増幅している。急速な成長が続く中国でも北部地方での深刻な水不足と南部での洪水、そして内陸部での砂漠化の拡大が、経済的な格差の拡大と経済成長の制約要因となっている。

第三の視点は、地球環境問題の深刻化が、

国家を超えて、人類の生存基盤そのものを脅かし、環境安全保障への脅威が現実化していることである。オゾン層破壊や気候変動は生態系を破壊し、まさに人類の生存に関わる問題である。熱帯林の減少は、世界各地で洪水や旱魃を激化させている。

こうしたことから、環境安全保障が今や人間の安全保障の一環として、新たな外交と国際協調の重要課題となっている。気候変動をめぐる条約や議定書の枠組み、その下での技術移転・温室効果ガス削減プロジェクト・適応策に関する協力などは、安全保障や経済活動とも深く関連した重要な外交課題である。特に日本が位置する東アジア地域各国は、政治体制・経済状況は実に多様であるが、生態的なつながりからみると継ぎ目のないひとつの系として構成され

表1 2003年夏：猛暑と干ばつによる記録的な森林火災面積

国名	2003年1月から8月	注
ロシア	23,710,000 ha	日本の国土面積の約6割
アメリカ	2,888,738 ha	東京都の面積の約14倍
ポルトガル	417,000 ha	国土面積の8%焼失

(United Nations Economic Commission for Europe (UNECE))

(8) Mathews, Jessica T., Redefining Security, Foreign Affairs, Spring 1989

(9) 以下の分析は、「平成一〇年度地球環境安全保障に関する基礎調査報告書」(株)野村総研研究所、一九九九年三月、に依拠している。

しており、環境面からは「東アジア環境共同体」とも呼ぶべきアプローチが必要である。現在進行する地球環境問題群は国境を越え相互に複雑に関連している。このような問題の解決には国境を越えた地域的・地球的な協力と協働が不可欠である。したがって各国の外交の規範も狭隘な国益ではなく、宇宙船地球号の乗組員としての人類共通の利益、すなわち「人類益」ないし「地球益」におくべきことが要請されている。次節では気候変動を例にその具体的内容についてみてみよう。

2. うなぎのぼりの損害保険金支払い

近年異常気象が頻発している⁽¹⁰⁾。

二〇〇三年八月には史上最大の熱波がヨーロッパを襲い、合計で三万五千人の死者（フランス一万五千人、ドイツ七千人、スペイン四千人、イタリア四千人など）が生じたと推計される。特にフランスでは摂氏四〇℃以上の日が続いた。また、WHOの推計によれば、気候変動により二〇〇〇年だけで一五万人が死亡しており、しかもこの数は三〇年後には倍増すると予測している。

気象学者によると現在起こっている異常気象は気候変動の直接の結果とは断定できないとされている。しかしながらIPCC第三次報告書⁽¹²⁾によれば、適切な対策がとられず現状のまま推移してその結果地球温暖化が進行すると、このような現象（異常気象）が頻発することが予測されている。これは地球環境と人間の安全保障に多大な

脅威をもたらすことになる。

人間の安全保障に対する脅威のひとつの指標として、損害保険会社の自然災害に対する保険金支払いをみると、急激な増加を示している。

図1は大規模自然災害の増加傾向を示したものである。これはミュンヘン再保険会社（ミューニックリー、Munich Re）という、大規模自然災害などの巨大リスクを引き受ける再保険会社のうちで世界最大の会社がまとめた資料である。

図の棒グラフが各年の経済的損害の推移を示し、濃い色の棒がそのうち保険で支払

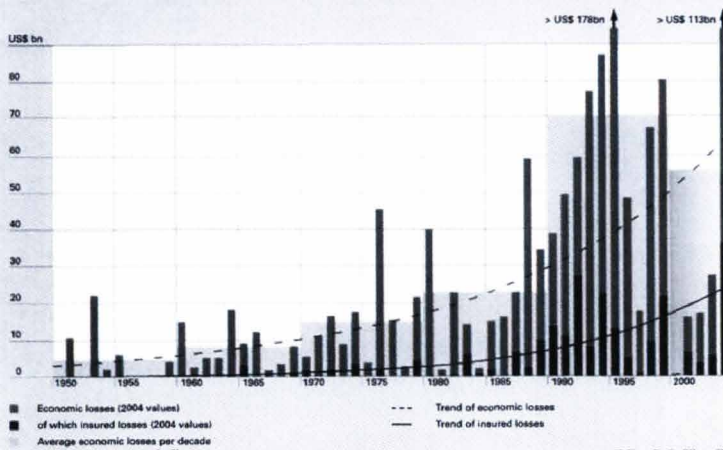
った分である。トレンド（折れ線グラフ）では、経済的損害、保険で支払われた金額ともに上昇傾向が顕著であり、特に、近年急激に増加しているということが見てとれる。

表2は保険金の支払額の大きい順に過去三五年分の具体的な案件を整理したものである。筆頭がハリケーンアンドリュー（アメリカ、一九九二年）の台風損害である。これを見ると、大きな自然災害はすべて一九九〇年以降に集中し、上位一件のうち、二〇〇一年九月一日のニューヨーク世界貿易センタービルへのテロと二〇〇四

大規模自然災害(1950年～2004年)

Economic losses and insured losses – Absolute values and long-term trends

The chart presents the economic losses and insured losses, adjusted to present values. The trend curves verify the increase in catastrophe losses since 1950.



出典: Topics Geo Annual review: Natural catastrophes 2004, Munich Re Group

図 1

(10) 異常気象とは、「気候が平均的状态から大きく偏った状態」をいい、気象庁では、「気温、降水量などの気象要素が過去30年以上にわたって観測されなかったほど著しく高いか、あるいは低い値を示す場合」と定義している。IPCCでは「極端な気象（気候）現象（Extreme Weather (Climate) Event）」という用語を使用しており、第3次評価報告書（TAR）では次の通り定義している。「特定地域における気象現象の確率分布から見えて稀な現象。「稀」の定義はまちまちだが、通常、10%以下あるいは90%以上の現象をいう」。

(11) Earth Policy Institute (EPI) 推計「二〇〇三年による」。

(12) IPCC（気候変動に関する政府間パネル）編、IPCC地球温暖化第3次レポート、中央法規、二〇〇二年。

年一二月のインド洋津波を除くと、全てハリケーンや台風などの自然災害である。ちなみに、二〇〇五年のアメリカのニューオーリンズを襲ったハリケーン・カトリナは、この表のはるか上をいく六兆七兆円の保険金支払いが見込まれている。

現状ではこのように巨大なハリケーンなどの被害が次々に出ており、これに伴って保険金の支払いがうなぎ登りに増えている。その結果、起こっている影響のひとつは保険会社の災害多発地域からの撤退である。アメリカ南部の州ではリスクを避けて次々と保険会社が撤退してしまい、残った保険

会社の保険料は非常に高い、という状況が進行している。たとえばテキサス州では、営業している保険会社の数が、この十数年間で半減してしまい、約三〇〇社が約一五〇社になっている。

自然災害の増加は米国だけに限らない。二〇〇四年の台風一八号は、その年に日本に上陸した史上最多の一〇個の台風のうち、一番被害が大きかった台風で、損害保険金支払い見込み額は三八〇〇億円を超える。またその年の一〇個の台風上陸に対して、損害保険金支払の合計が過去最高の七、二〇〇億円にのぼった。日本においても台風

保険金支払い額のランキング

1970年～2004年：世界の高額付保損害(単位100万ドル・2004年に物価スライド)

付保損害額	犠牲者数	年月日	災害形態	国
21,542	43	1992.08.23	ハリケーン・アンドリュー	米国、バハマ諸島
20,035	3,025	2001.09.11	世界貿易センタービル等へのテロリスト攻撃	米国
17,643	61	1994.01.17	カリフォルニア州・ノースリッジ地震	米国
11,000	124	2004.09.02	ハリケーン・アイバーン石油施設損害	米国、カリブ海諸国
8,000	24	2004.08.11	ハリケーン・チャーリー	米国、カリブ海諸国
7,831	51	1991.09.27	ハリケーン・ミレイユ(台風19号)	日本
6,639	95	1990.01.25	冬嵐ダリア	フランス、英国ほか
6,578	110	1999.12.25	冬嵐ローサー	フランス、スイスほか
6,393	71	1989.09.15	ハリケーン・ヒューゴ	プエルトリコ・米国ほか
5,000	38	2004.08.26	ハリケーン・フランシス	米国、バハマ諸島
5,000	280,000	2004.12.26	インド洋津波	インドネシア・タイほか

自然災害&1990年以降に集中

※付保損害額：保険でカバーされた損害額。保険金支払額。

出典：スイス再保険 sigma 2005年第1号より再編保ジャパン作成

SOMPO JAPAN

表2

損害の増加傾向が顕著である⁽¹⁴⁾。

以上、現在の状況をまとめてみると、異常気象の発生状況（その頻度、強度等）は確実に変化しつつあり、人間活動や社会への被害も増加傾向にある。異常気象と温暖化の関係については、個々の異常気象と温暖化の関係についてはまだ不確実性が高い。しかし、気候モデルによる研究によると、温暖化の進行とともに、異常気象の発生の仕方が変化すると予測されている。

それでは私たちはどのような対応をとるべきなのだろうか。

異常気象はいつたん発生すると人命や財産に多大な被害を及ぼす。地域、国、さらには国際的にも大きな影響を及ぼし、人間の安全保障の基盤を大きく揺るがす可能性がある。

温暖化の進行とともに、異常気象が増加する可能性が指摘されていることを考えると、まずは温暖化防止のために温室効果ガスの削減を早急に進めることである。さらには、異常気象が発生した際の被害を抑えるために、異常気象に対して脆弱な社会や都市の構造を変えていく（これを適応策という）ことが必要である。

洪水や地滑りなどの災害対策と気候変動対策などの環境対策に統合的に取り組む視点も重要である。今後の災害予防策には気候変動による影響をあらかじめ考慮に入れた対応が必要となろう。

こうした観点から、人間の安全保障を標榜するわが国の政府開発援助においては、途上国の気象災害対策を含む気候変動の悪影響に対する適応策をより重点的な分野と

(13) 保険会社と与える影響について、二〇〇五年九月に米国の環境団体セリーズ(Ceres)が出した“Availability and Affordability of Insurance Under Climate Change”というレポートによる。

(14) 損保ジャパン資料による。

することが望まれる。

3. 京都議定書と長期的な目標

国際社会では、地球温暖化問題に対処するため、九二年に気候変動枠組条約が採択され、九四年三月に発効した。この条約は、大気中の温室効果ガスの濃度を安定化させることを究極の目標とし、温暖化防止のための国際的な枠組みを定めている。具体的には九〇年代末までにCO₂排出量を九〇年レベルに安定化させるという努力義務を先進国だけに課した。しかし条約の目標に法的拘束力はなく、また二〇〇〇年以降の取り組みについて具体的な規定がなかったことから、長期的・継続的な温室効果ガス削減の第一歩として、九七年一月に京都で開かれた地球温暖化防止京都会議（第三回締約国会議、COP3）で京都議定書が採択された。

しかしながら、京都議定書はその約束が完全に実施されたとしても、対象となる先進国の温室効果ガス排出量を全体で二〇一二年までに一九九〇年比五・二%削減するに過ぎない。京都議定書は、地球温暖化対策の究極的な目的からするとほんのささやかな第一歩でしかないといわれるゆえんである。では温暖化対策の究極的な目的とはなんだろうか。

気候変動枠組条約第二条では条約の目的を次のように定めている。「…気候系に対して危険な人為的干渉を及ぼすこととならない水準において大気中の温室効果ガスの濃度を安定化させることを究極的な目的と

する。そのような水準は、生態系が気候変動に自然に適応し、食糧の生産が脅かされず、かつ、経済開発が持続可能な態様で進行することができるような期間内に達成されるべきである。」

この究極的な目的を達成するためには、排出される温室効果ガスの量と吸収される温室効果ガスの量とが均衡し、地球の大気中の温室効果ガスのストックとしての量に変化しない状態にする必要がある。現時点では、世界全体の温室効果ガスの大気中への排出量は海洋や森林に吸収される量の二倍程度となっており、その結果、大気中の温室効果ガス濃度は上昇の一途をたどっている。IPCC第三次報告書によると、人為起源の化石燃料燃焼により年間約六三億炭素トンのCO₂が排出されるのに対し、地球の吸収量は約三一億炭素トンと推計されている。温室効果ガス濃度の安定化のためには、排出量が吸収量と同等のレベルになるよう、現在の排出量からの大幅な削減が必要である。

産業革命以前に比べ地球の気温上昇が二℃を超えると地球の生態系や食糧生産、保健衛生などに深刻な影響が出るというのが多くの科学者の見解である（産業革命前と比較して現在までにすでに地球の平均気温は〇・六℃上昇しているので現状からは今後一・四℃以内の上昇幅に相当する）。

こうしたことから欧州連合（EU）では、京都議定書の交渉時の一九九六年に産業革命前と比較した気温上昇を二℃以下に抑える長期目標を設定している。また、その長期目標を念頭に、二〇〇五年三月のEU首

脳会合では、二〇二〇年における先進国は一五・三〇%の排出削減が必要であるとし、さらに環境大臣会合では二〇五〇年の先進国の排出削減の必要量として六〇・八〇%の削減を打ち出している。すでにイギリス、ドイツをはじめとするEUの主要国では二〇〇三年頃から、二〇五〇年を目標として温暖化対策の長期目標を定め、温室効果ガスを四五・八〇%削減する国家レベルの中期計画を相次いで発表している。わが国では国立環境研究所を中心に京都大学も加わり、「脱温暖化二〇五〇研究プロジェクト」(<http://www.2050.nies.go.jp>)が発足し、二〇五〇年を着地点とし、脱温暖化社会のビジョンを描く作業を進めている。

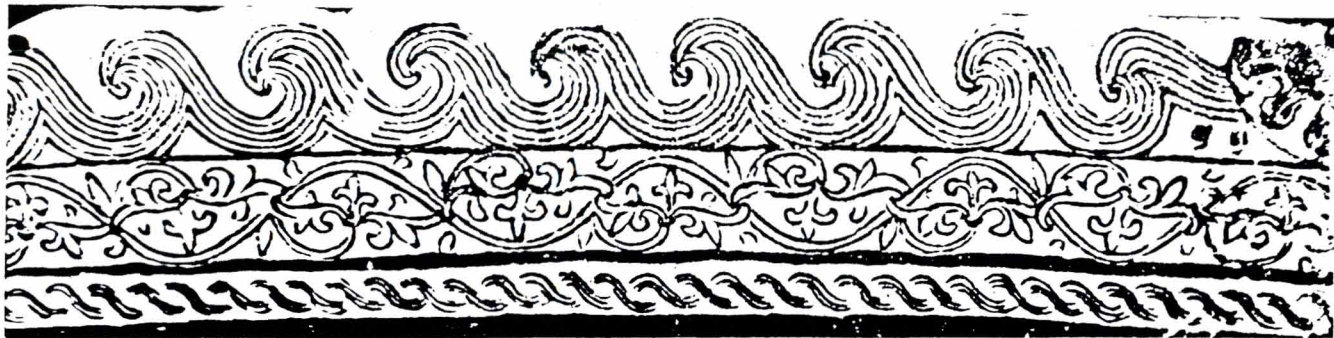
条約の究極目的を達成するためには、いづれにしろ今世紀の半ばまでに大幅な温室効果ガスの削減が求められる。先進国の相対的な責任の大きさを考慮すると、現在の経済社会の構造を脱温暖化型社会に抜本的に転換することが必要であり、また、途上国のより環境負荷の少ない発展パターンの変革への協力も重要な責務である。

この長期目標を前提に逆算すると、二〇一三年以降は先進国に課せられた削減もより多くなればいけないし、途上国もそれなりの努力が問われる。各国が自主的にできることをやる、というのではこうした目標には到底到達できない。京都議定書のうえに立って、これを拡大・発展させた国際的枠組みが必要である。そのためには、一定期間内に達成すべき数値目標を掲げ、それと連動した市場メカニズムを生かした柔軟な仕組みがあることが望ましい。

わが国も議定書の目標達成にまず真摯な努力をするとともに、温暖化対策の長期的な目標を明らかにし、温暖化の悪影響を回避し持続可能な発展ができる社会（脱温暖化社会）についての明確なビジョンと道筋を描いていく必要がある。気候変動問題に対し将来の目指すべき方向が不透明な状態のままで、温暖化対策にも配慮した適切な公共投資や地球温暖化対策に貢献する大規模な民間投資などは期待できない。気候変動対策に本格的に対処するために、民間投資、技術開発制度創設など、幅広い取組を促進するためには、長期目標の設定により、信頼できる政策シグナルを発信することが不可欠である。

まとめ

本稿では人間の安全保障の重要な分野を占める「環境の安全保障」につき、特に地球温暖化問題との関連で考察した。地球温暖化の進行による人間の安全保障への脅威は現実的な課題となっている。まずは温室効果ガスの削減対策を早急かつ着実に進めることが肝要であり、同時に気候変動対策についての明確な長期ビジョンを明らかにすることが必要である。そして国際協力においても、クリーン開発メカニズム（CDM）やODAを活用して再生可能エネルギー・省エネルギーの促進などの温室効果ガスの抑制・削減策を支援するとともに、災害対策と温暖化の悪影響への適応策を統合する活動への協力を重点化することが必要である。



コラム「お国の食べ物」 多民族国家コロンビアの伝統料理 マリア・ルシア・コレア

（異文化理解教育・人間社会論議M2）

食べ物とはしばしば、旗や花などと同じように、国の象徴として見られ、その国のアイデンティティや統一性を表現する。「イタリアといえばピザ」とか、「スペインといえばバリエア」とかといった言い方は、そのことをよく表している。だが、ある国のアイデンティティや統一性は、じつは断片から創られるのではないだろうか。国民全員が同じ背景や現状、同じ教育や歴史をもつことはありえない。したがって、本来はばらばらな国民を一体化させるために「国民の表象」なるものが創造され、それが広められるのではないだろうか。

コロンビアの場合にも、同じことがあてはまるように思う。

南アメリカの北西部に位置するコロンビアは、「生物多様性の国」と呼ばれるが、これは地理や生態系だけでなく、社会や民族の面から見ても本当である。コロンビアの五つの地方（太平洋に接するバシフィック地方、カリブ海のアトランティック地方、アンデス山脈地方、広大なサバンナの広がるヤノス地方、そしてアマゾン川地方）に、アフリカ系、ヨーロッパ系、原住民系の人々が豊かに混じり合っており、暮らしている。それでは、このような異なった民族を繋ぐ共通点は何だろうか。それは、トウモロコシをおいて他にない。様々な環境に適応できるトウモロコシは、低地でも高地でも栽培できるので、国土の至る所でそれが家庭料理の主な原料になったと言われている。

トウモロコシを使った伝統的なコロンビア料理はいくつかあるが、最も一般化されたのは「アレバ」といって、トウモロコシをパンのようにしたやわらかい食べ物である。それぞれの地方や民族で、使われるトウモロコシの種類や作り方が異なるが、アレバがコロンビア人の食生活に不可欠であることには変わりはない。

コロンビア国民にとっては、この丸いトウモロコシのパンが、国家のひとつのアイデンティティを構成していると言えるかもしれない。

知識人をめぐって

前川玲子

REIKO MAEKAWA



前川 玲子（まえかわ れいこ）

1952年、兵庫県生まれ。Case Western Reserve University 大学院アメリカ研究科修了。Ph. D. 京都大学教養部、総合人間学部助教授を経て、現在、大学院人間・環境学研究科教授。専門はアメリカ知識人史。著書に『アメリカ知識人とラディカル・ビジョンの崩壊』（京都大学学術出版会、2003年）、『帝国と市民—苦悩するアメリカ民主政』（共著、山川出版社、2003年）、『アメリカの文明と自画像』（共著、ミネルヴァ書房、2006年）などがある。

1 はじめに

ある日、大学院の授業をしていたときのこと、ロシアからの留学生が「ほくには日本に関する十分な知識がないのだけれど、日本には知識人＝インテリゲンチヤがいますか」という質問を投げかけてきた。留学生からのこうした直球は珍しいことではないが、はっとさせられる問いではあった。そういえばアメリカ留学中に、寮で一緒だった医学部のアメリカ人学生から専攻を聞かれ、「アメリカ研究」だと答えたところ、「アメリカに特に研究に値するような文化や文明があるかい」と逆に質問されたことがあった。異なる言語・文化圏で育ち教育

を受けた人々との対話の中から、自分が今まで当然のことと考えていた前提や概念の再検討あるいは修正を迫られる瞬間というのは繰り返し訪れる。ただ、時には、こうした作業はおっくうに感じられこともある。自分がいままでも慣れ親しんだ世界の中で、同じ言葉を話し、その背景にある暗黙の了解事項を分かち合える相手とだけ心乱されずに過ごしたいと感じるのも人間の習性かもしれない。

アメリカの歴史家リチャード・ホーフスタッターは『アメリカの反知性主義』（一九六三年）の中で、「知性は頭脳の批判的、創造的、思索的側面といえる。知能がものごとを把握し、処理し、再秩序化し、適応するのに対し、知性は吟味し、熟考し、疑い、理論化し、批判し、創造する」と書いているが、知的な営為というのは知能が発達した大人にあつてはむしろある種の苦痛を伴う「しんどい」作業なのではない。

一九三〇年代から四〇年代にかけて、日本の知識人の多くがなぜ、「吟味し、熟考し、疑い、理論化し、批判し、創造する」ことをやめ、「総力戦」や「国民精神総動員」さらには「大東亜共栄圏」の掛け声に加わっていったのか。この問いが学生時代から私を悩ましてきた。この問題に正面からぶつかる勇気がなくて、アメリカ知識人という自分から距離のある集団に光を当てること、なんらかの糸口をみつけれないかと思ひ、手探りでアメリカ知識人史を扱ってきた。ロシア人留学生の「日本に知識人はいますか」という問いにドキッとさせられたのは、あの原初的な疑問に引き戻

されてしまったからだ。

2 知識人と社会環境

ある文化風土、政治・社会体制の中で、ある人間が生まれ活動するとき、そうした環境はその人間の思想形成や表象活動にどのような影響を与えるのか。この素朴な疑問を抱きながら、私は人間・環境学という茫漠たる原野をさまよっている。私が特に興味をもっているのは、文明の内包する諸問題や矛盾、自国の社会や文化の歪み、社会的マイノリティに関する差別などを、みずからの存在に関わるテーマとして引き受けようとしてきた知識人たちの社会的関与のあり方である。

第一次世界大戦を挟んだ時期にコロンビア大学で教えたジェイムズ・ハーヴェイ・ロビンソンという思想史家は、知識人は時代を動かす原動力であり、歴史の創造者であるが、と同時に、一つの時代の物理的、知的な環境の産物にしかすぎないという見解を表明している。ロビンソンによれば、一方では、知識人は時代遅れになった思考方式や信条を捨て、新しい時代や環境にふさわしい新たな思考を作り出すことで、歴史に働きかけ、現実社会や政治を変えることができる。他方、知識人はさまざまな歴史的事件や思想的・政治的な対立抗争といった荒波に翻弄され、歴史の「進歩」を担う存在よりも、むしろ自らが意図しない役割を負わされることもある。過去の歴史のなかで知識人が意図的あるいは意図せず演じた役割を振り返ってみると、その

(1) リチャード・ホーフスタッター著、田村哲夫訳『アメリカの反知性主義』（みすず書房、二〇〇三年）、二一頁。

(2) James Harvey Robinson, *The New History: Essays Illustrating the Modern Historical Outlook* (1918); *The Mind in the Making: The Relation of Intelligence to Social Reform* (1921)を参照したい。

功罪は半ばして、その両義的な存在が浮かび上がってくるのである。

しかし、知識人と歴史の関係がアイロニーに満ちたものであり、その現実へのコミットの仕方が結果的にマイナスのベクトルに歴史を動かすことがあったとしても、だからといって、知識人を役立たずとして揶揄したり、有害な輩として糾弾したりするだけで問題が片付くわけではない。彼らや彼女らは、知識人の独自の営為として、自らのおかれた社会的・政治的および文化的状況の矛盾を意識し、これらの解決を模索しようと試みたのである。したがって、それらの成果と限界を検証することは、利用可能な知識、知性を駆使して未解決の問題に立ち向かうとする広い意味での全ての「知識人」に必要なことのように私には思われる。

3 知識人の社会的関与

知識人は、個別にみれば、小説家であったり、文芸評論家であったり、ジャーナリストであったり、物理学者であったりする。彼らは不特定の読者に向けて執筆したり、専門家や一般の聴衆を前に講義をしたり、国際的な会議で意見を表明したり、自国の政府あるいは国際機関に提言したりする。知識人は第一義的にはあくまで個人として活動するが、同時にグループを形成したり、特定の政党や社会運動団体に参加したりすることで、積極的に現実にコミットしようとしてきた。

特に二〇世紀に入ってから異なった国

や文化圏に属する知識人の物理的な移動が容易になったので、知識人たちが自国だけではなく、世界的な社会・文化思潮から影響を受け、またそれらに大きな影響を及ぼす可能性が出てきた。日本でも一九一〇年代から三〇年代にかけて『白樺』や『種蒔く人』の創刊やプロレタリア文学運動に関わった知識人は、ロシア、フランスなどの社会・文化潮流から多くの影響を受けた。

たとえば、一九二一年に秋田県土崎町の小さな印刷屋で産声を上げた『種蒔く人』の発行責任者である小牧近江は、パリ法律大学で学び、第一世界大戦が始まるとフランスの反戦運動に共感を抱くようになった。小牧は、個人的にも親交のあったアンリ・バルビュスやアナトール・フランスなどによって組織された『クラルテ』の運動の影響を受け、日本でも革命的知識人の国際的連帯を確立する運動を起こそうとして、同郷の同人を募って『種蒔く人』の発刊にこぎつけた。『種蒔く人』の表紙に示るされた「行動と批判」という文字は、小牧らの積極的な社会的関与の姿勢を示しており、



雑誌『白樺』と『種蒔く人』（山田清三郎著『プロレタリア文学史』（理論社）上巻カバー写真から転写）

実際、同人たちは、過激思想取締り法案や欧米列強と協調した日本のシベリア出兵に反対するなど、言論による批判と実践とを結びつけようとした。『種蒔く人』は、そのインターナショナルイズムと反戦の主張のために再度にわたって発売禁止処分を受け、関東大震災を機に廃刊となった。

その後、一九三〇年代から四〇年代にかけて、積極的に「時局」に協力しない日本の知識人は、強制的な「転向」を迫られたり、執筆停止処分によって沈黙を強いられたりするなかで、次第に、閉塞した時空の中で蟄居することを余儀なくされた。この知的な鎖国期とでもいうべき時期が、日本の近代知識人にとって「一時的な逸脱」であったのか、あるいは、こうした知的閉塞状況や言論封殺を生じさせる文化的・社会的環境はまだ手付かずのまま私たちを取り巻いているのか。少なくとも、こんなことを考えるうえで、閉塞に先立つ時代に「批判と行動」の種が蒔かれたこと、にもかかわらず、それが芽のうちに摘み取られてしまったことを、正と負の二重の歴史としてもう一度考えて見たい気がする。

4 アメリカの亡命知識人

アメリカの知識人、ドイツの知識人、中国の知識人といった国家的な枠組みで知識人集団を括ることは一応、可能であるにしても、二〇世紀半ばまでに、こうした枠組みではとらえきれない個人が多数、出現してきた。ここ数年、私はナチズムを逃れてアメリカに亡命したヨーロッパの知識人に



1939年アメリカに着いたフェルミ夫妻とその子供たち（ローラ・フェルミ著 掛川トミ子・野水瑞穂訳『亡命の現代史1 二十世紀の民族移動』（みすず書房）カバー写真からの転写）

関心をもっている。両大戦間の時期、アメリカの主要都市には多様な国籍と専門分野をもつ亡命知識人が集まり、大西洋を越えた知のネットワークとでもいうべきものを形成していった。

アメリカが亡命知識人の避難所となる一九三〇年代に先立つ時期を振り返ってみると、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、アメリカの学者、芸術家、一財産を築いたビジネスマンの子弟たちは、ヨーロッパの主要都市にこぞって留学した。彼らの経験した文化的衝撃や摩擦は、精緻な心理描写を得意とするヘンリー・ジェイムズの代表作のなかに垣間見ることができる。アメリカが世界経済・政治の中心に躍り出た第一次世界大戦の後でも、ヘミングウェイなどをはじめとする作家の卵たちは、アメリカ中西部の退屈な小都市や物質主義的な価値観に嫌気がさして、セーヌ川の左岸に漂う「文化」の香りを吸収しようとした。そんな彼らが、株とともにドルも暴落した一九二九年以降、アメリカに戻ってきたよ



1940年、アメリカ市民になるための宣誓式に出席したアインシュタイン（Jarrell C. Jackman and Carla M. Borden, eds., *The Muses Flee Hitler* (Smithsonian Institution Press, 1983) からの転写）

うすを、文芸評論家のマルコム・カウリーはその著書『亡命者の帰還』で描いている。一九三〇年代に入ると、二〇年代にアメリカ人がヨーロッパに「亡命」しようとしたのとは逆の流れが、より差し迫った政治的状況のなかで出てきた。モーリス・デヴィスは、国会議事堂事件の起こった一九三三年からドイツ降伏の四四年までの間にナチズムやその他のファシズム体制を逃れてアメリカに入国したヨーロッパからの難民は二四万から三二万程度と算定している。このうち、教師を含めてなんらかの知的職業についていたのは約二万五千人だとされる。ローラ・フェルミは、著名な物理学者の夫エンリコ・フェルミと共に培った幅広い交友関係と丹念な伝記的資料の発掘を通じて、独自に一九〇〇名の亡命知識人リストを作り、彼らの移動の歴史や個人的成功なしいは挫折の軌跡を追っている。フェルミは、アインシュタイン、トーマス・マンなど既に世界的に知られた亡命者、およびテ

ハンナ・アーレントなど当時無名であった知識人が、アメリカで創作や研究を継続することが許されたことで、その思想は葬れずに飛躍の機会を与えられたことを強調している。フェルミが、「知識人移民」のアメリカへの移動の物語を、異質な要素に寛容なアメリカの文化風土と長い学問的伝統のなかで育ったヨーロッパ知識人との幸運な出会いの物語として語っている点は興味深い。こうした解釈は、アメリカのリベラリズムと「良識」を評価する戦後の「コンセンサス・ヒストリー」の流れに沿うものだともいえるが、文化的な異種混交（cross-fertilization）に注目している点では、デiasポラが生み出す文化の交差、衝突、混交などに焦点をあてるカルチュラル・スタディーズ的なパースペクティヴを内包しているといえるかもしれない。

5 知識人の移動と受け入れ

ナチス政権の下に一九三三年四月、「職業官吏団再建法」が公布されると、ユダヤ系や左翼および反ファシズムの立場をとる大学教員の多くが、休職させられたり、定年になる前に退職を強いられたりした。閉鎖に追い込まれたフランクフルトの社会研究所はジュネーブでの一年の後に、一九三四年にコロンビア大学の中に迎えられた。これは、アメリカの高等教育機関が、ドイツの研究機関のまるごとの「亡命」ないしは緊急避難に手を貸した例だが、これとは対照的に、すでに存在したアメリカの進歩的な研究・教育機関の中に亡命者のための

(3) こうした作品として、『アメリカ人』（1877）、『ディジー・ミラー』（1879）、『ある婦人の肖像』（1881）、『使者たち』（1903）など多数ある。

(4) Malcolm Cowley, *Exile's Return: A Narrative of Ideas* (New York: W.W. Norton & Company, 1954). 現在手に入る普及版として、一九五一年に改訂された *Exile's Return: A Literary Odyssey of the 1920s* を参照されたい。

(5) 亡命知識人の数に関しては、Maurice R. Davie, *Refugees in America: Report of the Committee for the Study of Recent Immigration from Europe* (New York: Harper & Brothers, 1947), pp. 23-24, 41; Laura Fermi, *Illustrations: Migration from Europe 1930-1941* (Chicago: University of Chicago Press, 1968), pp. 11-13 を参照されたい。



「亡命大学」開講当時の亡命社会学者たちと学長のアルヴィン・ジョンソン（前列左から二番目、その左隣がエミール・レーデラー）（1933年10月4日号の『ニューヨーク・タイムズ』）

大学を創設した例もあった。ニューヨークの「ニュー・スクール・フォア・ソーシヤル・リサーチ」の中に創設された「亡命大学」がこれに当たる。「亡命大学」という名称は、一九三三年一〇月の開講時には、「政治学および社会科学大学院」と名称変更されるが、当初のメンバーには東京帝国大学でも教えた経済学者のエミール・レーデラーやゲシュタルト心理学者のマックス・ヴェルトハイマーなどがいた。

「ニュー・スクール」の学長だったアルヴィン・ジョンソンは、一九二七年から『社会科学百科事典』の編纂に携わり、事典への寄稿を要請したドイツの社会学者たちとの間に幅広い個人的ネットワークを築いていた。一方、招聘教授の給与を負担したロックフェラー財団もまた、フェローシップなどの給付をとおして、一九二〇年代からヨーロッパの学者たちと独自のネットワークを作り上げていた。ロックフェラー財団のスタッフとジョンソンとの間に取

両者の間にも亡命知識人の選択基準などに關して考えに開きがあったことが窺われる。ジョンソンがすでに確立された名声や業績よりも、亡命の緊急性や必要度を重視したのにたいし、ロックフェラー財団側は、アメリカの学界および国益に貢献するような人材を望んでいた。さらに、財団の理事の間には、ユダヤ系や左翼が多くをしめる外国の学者集団を助成することへの慎重論もあった。

三〇年代はじめといえば、移民の入国を制限するもつとも厳しい移民法（ジョンソン・リード法、一九二四年に議会通過）が何度か延期されたのちに一九二九年七月一日に発効したばかりだった。ナチスの台頭によって危機にあるヨーロッパの状況はまだ一般にはあまり知られていなかったし、アメリカ市民も経済恐慌のなかで喘いでいたときだけに、亡命知識人の運命への一般的関心はかなり低かった。その一方で、ジョンソンのようなリベラル派の知識人にとっては、苦境にあるヨーロッパの同僚を救いたいという人道主義と、新しいブレインの導入によってアメリカの経済・社会構造を変革したいと情熱があい半ばしていた。ヨーロッパの危機を逆手にとって、大西洋を挟んだ知的な共同体づくりの端緒としようとする「したたかさ」と柔軟さをもっていたともいえる。

6 結びにかえて

一九八〇年代以降、メディア論でよくいわれるような「潜在的送り手と潜在的受け

手との間の相互流通」に注目する視点が亡命者研究でも強調されるようになった。多文化間の異種混交の可能性が強調されるようになったからでもある。今後の亡命知識人研究においては、「新しい環境」の中で個々の知識人の思想変容の過程を検証する研究と、「新しい声」に耳を傾け異質な才能を受容することのできる文化的・社会的条件に関する研究が同時平行的に進むと思われる。さらに、戦後のキューバ、ベトナム、カンボジア、中国、パレスチナなどからの亡命知識人の流入によって、従来アメリカではヨーロッパを中心に考えられていた「亡命知識人」の概念がどのように変容していったかも興味深いテーマである。日本と絡めていえば、これまで日本の知識人は「亡命」あるいはトランス・ナショナルな知的活動のための移動を一つの選択肢と考えたのか、今後そうした可能性がどのような展開を見せるのかという問題もある。さらに、日本に一時的に避難ないしは滞在することを選ぶ外国からの研究者、あるいは定住外国人に、自由な研究と発表の場を提供し、思想的・文化的な異種混交を試みることができる環境が、現在あるといえるだろうか。日本の知識人が再び知的閉塞状況に陥らないための鍵はそのへんにもありそうである。

(9) Claus-Dieter Krohn, *Intellectuals in Exile: Refugee Scholars and the New School for Social Research*, trans. Rita and Robert Kimber (Amherst: University of Massachusetts Press, 1993), pp. 29-38.
ロックフェラー財団側の内部資料については、Rockefeller Archive Center (www.rockefeller.edu/archive.cfm) で閲覧可能。

フロンティア ■京都からハルカ遠くの京都大学 ― 別府地球熱学研究施設より ■ 齋藤武士

TAKESHI SAITO

別府温泉をご存知だろうか？「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」の文言でも知られる、日本を代表する温泉保養地である。九州の大分県に位置し、近年は「風のハルカ」の湯布院や阿蘇の黒川温泉などに人気を奪われているが、温泉の湧出量は断トツの日本一、世界でも二位を誇る世界的温泉都市である。

その別府に京大の時計台を小さくしたような建物がある。私が在籍する地球熱学研究施設である。理学研究科に属する歴とした京都大学の研究機関なのだが、別府の京大に勤めているというと怪訝な顔をされることがある。京都大学はあくまで京都にしか存在しないと思っているのだ。

京都以外にも京都大学がある。そのような大学本部から離れて遠隔地に存在する研究所を「隔地研」と呼ぶ。京大の場合、北は北海道釧路郊外の研究林から、南は九州屋久島のニホンザル観察ステーションまで、実に三三もの施設がある。それぞれその土地でしかできない独特の研究・教育を行うために設立された。別府の場合、専ら温泉の研究をしていると思われるかもしれないが、温泉も含めた地熱現象、さらに広く言えば地球の営みを探る「地球科学」という分野を担っている。なぜわざわざ別府で地球を科学するのだろうか。

地球熱学研究施設の開設は大正一二年に遡る。第三代京大総長の菊池大麓は京大で地球物理学を始めるために、当時一高教授だった志田順を招き、地球物理学講座を開いた。上賀茂に地震計を置いて地震観測をはじめた志田はすぐに、「地震は浅い所では起こらない」という当時の定説を覆す、地下三〇〇km以深で発生する地震の存在

を確信するようになる。そのような時に訪れた別府で、偶然用地と建設費の寄付を提案され、そしてできたのが別府地球物理研究所、現在の地球熱学研究施設であると言われている。しかし本当にただの偶然なのだろうか。

志田は大正一五年の開所式で、「深発地震存在の提唱」と題した講演をする。深発地震の存在と、日本列島を横断する深層地震帯の存在を指摘し、日本列島の地殻変動の真因はそこに伏在すると宣言したこの記念碑的な講演の中で、志田は深層地震の分布図を示している。日本付近の深発地震の震源をプロットしたこの図を見ると、西日本では九州に六点あるのみであり、そのうちの一点が別府に打たれているのが分かる。別府の下で深発地震が起きている。深発地震の存在を強く信じていた志田にとって別府は全く偶然の場所ではなかったはずだ。

そして、志田の見識の正しさ、別府という場所の特異性は、科学の進歩とともに明らかになる。地下深くでおこる地震は、沈み込むプレートによって引き起こされる破壊であることが証明され、逆に、発生する地震の分布から日本列島に沈み込むプレートの姿が描かれるようになった。現在では別府は、九州に鋭角に沈み込むフィリピン海プレートの東北端で、かつ、日本を切り裂く中央構造線の北に形成された大陥没地帯、別府―島原地溝帯の東端にも当たる、地球科学上非常に特異な場所と認識されている。

さらに別府はマグマの生成限界を示す火山フロント上に位置し、活火山である由布・鶴見火山群の東麓にもあたる。地下深くに沈み込むフィリピン海プレート。それ

齋藤 武士（さいとう たけし）
一九七五年生まれ
出身地 横浜
最終学歴 京都大学大学院人間・環境学研究所博士
士後期課程修了 京都大学博士（人間・環境学）
専門分野 火山学・磁気岩石学



図1 地球熱学研究施設
当時の営繕課長永瀬狂三の設計で大正12年に竣工。永瀬が武田五一らと設計した事務局本館（通称時計台）が竣工するのは、その2年後の大正14年である。



によって生成されたマグマが上昇し、中央構造線に伴う東西方向の断層を境にして南北に裂ける別府―島原地溝帯を埋めるように火山が噴火する。さらに地下浅部にもたらされた地熱によって温められた水が、断層沿いに上昇して温泉をもたらす。まさか志田には全てお見通しだったというわけではあるまいが、別府はまさに地球科学を研究する上で最良の場所だったのだ。

しかし、最近どうも別府のような隔地研の旗色が芳しくないらしい。他の大学では、スタッフが本部に引き上げて縮小されたり、また閉鎖されたりしたものも多いと聞く。そのような中で、京都大学は西日本を中心にいまだに多くの隔地研を有している。「フィールドワークの京大」の伝統故だろうか。フィールドでしか出来ない研究がある。フィールドでしか出来ない教育がある。私は現在、別府―島原地溝帯を対象に、火山帯の磁気と岩石の磁性の相互作用に関する研究を続けている。磁気を使って火山の構造や性質を調べることで、地下のマグマの動きや噴火のメカニズムを探るのだ。その上で、多様な活火山の集中する中部九州に在る、という地の利は大きい。別府という最前線を拠点に、今日も私はフィールドと研究室を往復する日々を送っている。

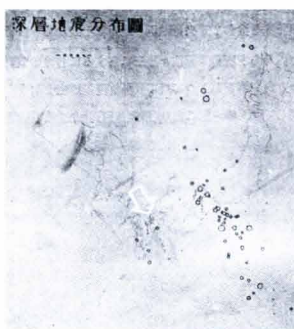


図2 別府地球物理研究所開所式において所長志田順教授が示した深層地震分布図（地球物理学第一巻、第一号より）別府にも一点打たれている（矢印）。

緑濃い海浜植物帯を抜け、真っ白なサンゴ礁が散りばめられたホシスナの浜に下り、サンゴ礁に潜る。枝サンゴや塊状サンゴが作るサンゴの森の中、一面絨毯を敷き詰めたような藻類の群落があちこちに現れ、手のひらほどの黒っぽいスズメダイが一斉に浮かび上がってこちらを威嚇する。このクロソラスズメダイは、自らが摂餌する藻類群落、すなわち藻園のまわりになわばりはついているのだ(図)。私は、琉球列島のサンゴ礁でこれらのスズメダイ類と藻類の関係について研究を進めてきた。

スズメダイ類の藻園は、他の藻食者から守られることで様々な藻類が生育することが知られていたが、沖縄のサンゴ礁でクロソラスズメダイを調査したところ、一種類の糸状紅藻イトグサ属藻類が強く優占する特徴的な藻園を持っていた。潜水観察したところ、クロソラスズメダイは藻類を口でついで、なわばり外までくわえて運び捨てる、という「除藻」行動を発見した。これは世界で初めての魚類による除藻の実証に繋がった。すなわち、捨てられた藻類を回収すると、そこにイトグサは全く含まれていなかった。また、スズメダイの胃内容と、腸およびフンの内容を比較して各種藻類の消化率を算出した結果、イトグサは極めて高い消化率を示し、一方で選択的に捨てられる藻類は消化率の低いものであったのだ。さらに、実験ケージでスズメダイを他の藻食者ともども藻園から囲い出すと、「除藻」されていた藻類が繁茂してイトグサは一週間で被覆され消失してしまった。これらの研究により、藻類をついで藻園外に捨てるという行動が、餌にむかない藻類の除藻であり、クロソラスズメダイは競争力のあるそのような雑藻類から餌であるイトグサを守り、その単作の藻園を維持していることが明らかとなった。

琉球列島には少なくとも六種のなわばり性スズメダイが生息しているが、それらのスズメダイ類と比較すると、クロソラスズメダイは除藻を伴う極めて集約的な藻園管理により、面積あたりの収量が高い、とりわけ狭い藻園を持つ。琉球列島全域にわたるスズメダイ類の藻園内外からの徹底した藻類採集と分子マーカーを用いた探索の結果、クロソラスズメダイの藻園で単作となるイトグサは、その藻園以外では全く生息していなかった。クロソラスズメダイは、イトグサを餌として収穫する一方で、雑藻の除藻やなわばりの防衛によって、藻園内のみでのイトグサの生存を保障しているのだ。このような、ヒトと栽培植物のように互いの生存を強く依存している関係は、栽培共生と呼ぶことができる。また、他のスズメダイ三種、スズメダイモドキとダンダラスズメダイ、およびルリホシスズメダイについても、それぞれの藻園に一種づつ、種特異的なイトグサ類三種が生育していた。スズメダイモドキの藻園に優占するイトグサは、スズメダイに餌として利用される一方、スズメダイモドキの藻園外にも生育できるもので、両者の関係は条件的栽培共生とすることができると言える。さらに他の2種のイトグサ類は、随伴雑藻と言うべきものである。これらのイトグサ類は、それぞれのスズメダイの藻園にのみ特異的に生育してい

畑 啓生(はた ひろき)

一九七五年、兵庫県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。

京都大学博士(人間・環境学)。現在、京都大学理学研究科動物学教室の学術振興会特別研究員。サンゴ礁に生息するスズメダイ類と、その藻園に栽培される藻類の生態について研究を続けている。



とこの大きなスズメダイの藻園にイトグサが生息している。スズメダイは藻園を移動するときに、藻園の隅々までくわえて運び捨てる。このように、スズメダイは藻園を維持している。



るが、藻園で優占することはなく、スズメダイがそれだけに依存することはない。両者の関係は片利共生である。このようにスズメダイ類とイトグサ類との間には、絶対栽培共生から、条件的栽培共生、そして片利共生に至るまでの様々な相互関係が成立しているようだ。さて、このような栽培共生は他の水圏生態系でも見られるのだろうか？

タンガニカ湖は、アフリカ大陸東部にある大地溝帯に水が溜まってできた巨大な湖であるが、そこにはスズメダイの姉妹群にあたるシクリッド類が適応放散している。その中に、スズメダイと同じように藻食性で藻園を持つものがある。私は二〇〇六年に、タンガニカ湖で四か月にわたり野外調査を行った。サンゴ礁では紅藻類が利用されているが、湖では糸状の緑藻類が利用されていた。この緑藻とシクリッドとの関係は栽培共生まで達しているのだろうか？もしそうなら、サンゴ礁とタンガニカ湖という全く異なる二つの生態系で栽培共生が独立に進化したことになる。

さらに、アフリカからの帰途、インド洋や紅海の各地、モリシヤスやモンバサ、シナイ半島、モルデブ島およびタイを訪れた。この広い海域にも、クロソラスズメダイは生息している。それぞれの場所から得られたスズメダイの藻園の藻類を分析することによって、栽培共生の進化の歴史がひもとかれてゆくにちがいない。

●リレー掲載● 環境を考える

律令国家誕生の地 飛鳥藤原地域の考古学

松村恵司 KEIJI MATSUMURA



松村恵司（まつむら けいじ）

一九五〇年、山梨県生まれ。明治大学大学院文学研究科修士課程修了。文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官を経て、現在、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第一研究室長として飛鳥・藤原宮跡の発掘調査研究に従事。歴史考古学専攻。主な論文に「無文銀銭考」（二〇〇三年、『新世紀の考古学』）、「古代銭貨の銭文」（二〇〇五年、『文字と古代日本』四）、「吉川弘文館」、『日本初期貨幣研究史略』（二〇〇五年、『金融研究』第二四巻第一号）、「高松塚古墳の調査」（二〇〇六年、奈良文化財研究所）などがある。

今、飛鳥藤原地域の考古学が面白い。大化改新で炎上した蘇我入鹿邸とみられる甘樫丘東麓遺跡の調査、天武天皇の飛鳥浄御原宮の正殿や苑池の調査、最古の具注暦木簡や天武朝の木簡群を出土した石神遺跡の調査、キトラ古墳の四神や十二支像の壁画、酒船石遺跡の亀形石造物、飛鳥池遺跡の富本銭など、注目すべき考古学的な発見が相次ぎ、『日本書紀』や『続日本紀』に記された古代国家形成期の世界が活き活きと甦りつつある。

計画都市と都市住民の誕生

藤原京は、飛鳥の北方に初めて建設された中国式都城である。碁盤目状に走る条坊道路によって整然と区画された街区をもつ人工都市で、近年の調査成果により、方五・三kmの規模をもつことが明らかになった。この壮大な都の建設は、天武五（六七六）年に計画され、天武天皇の急逝による中断期間をはさみながら、約二十年の歳月をかけて持統八（六九四）年に完成した。藤原宮に勤務する官人たちは、生産基盤のある本貫地から切り離され、律令官人としてこの新都に居住させられた。わが国初の

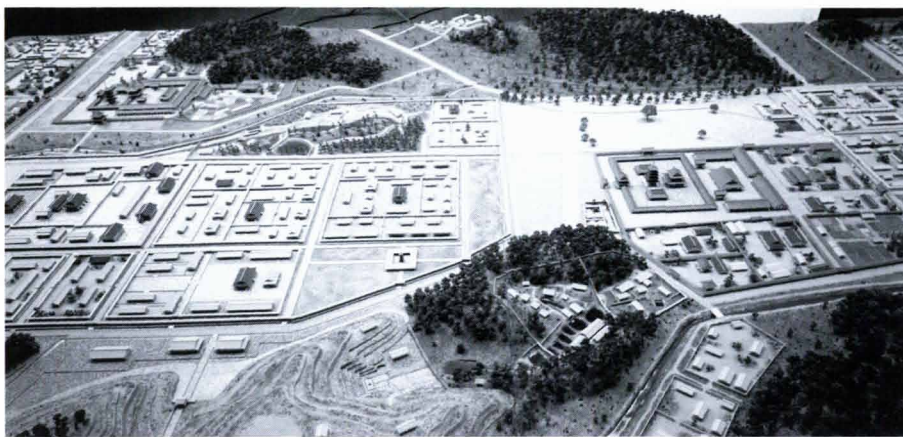
都市住民の誕生である。その人口は三万人とも五万人とも推計されている。

瓦葺き宮殿や役所、寺院が建ち並ぶ華やかな新都は、全国各地から集まる人と物資でにぎわうが、都市住民は生活物資の調達や屎尿処理、疫病対策などの都市問題に直面する。日本人は藤原京で初めて都市生活の明と暗を経験することになった。藤原京の発掘では、本格的な文書行政の始まりを示す木簡群や、全国から貢納された税の荷札が大量に出土し、律令国家の繁栄を物語る一方で、都市住民が病の治療や祓いに用いた人形などの祭祀具、邪気や悪鬼を防ぐための呪符木簡が出土する。藤原京で発見されたトイレには、条坊道路側溝を流れる水を邸内へ引いた水洗式トイレと、穴を掘っただけの汲取式トイレがあるが、後者の埋土からは、食料の残滓とともに大量の寄生虫卵が発見され、藤原京住民の衛生状態の悪さをうかがわせる。街路の側溝を下水に利用した水洗トイレも、渇水期には京内に汚れや臭気を漂わせたであろうことは想像に難くない。事実、『続日本紀』慶雲三（七〇六）年三月十三日条には、「京城の外に多く穢臭あり」と見える。慶雲年間（七〇四～七〇七）には天候不順による全



藤原京の模型 中央の藤原宮（方形区画）の周囲に条坊街区藤原京が広がる。奥に耳成山、右端に天香山が見える。

国的な凶作が続き、その結果発生した飢饉と疫病は、慶雲三年には京畿内にもおよび、文武天皇が重体に陥るといふ政治的危機を迎えている。新都における屎尿や塵芥処理の未熟さが疫病の拡大を増幅させたのであろう。疫病が猛威をふるう慶雲四（七〇七）年二月には、攘災招福の呪力を求め、諸王臣による遷都の審議がおこなわれている。膨大な資材と労働力を費やして建設した藤原京が、わずか十六年の短命に終わった理由については、これまでに様々な説が提唱されているが、その形制や地勢上の問題に



古代の飛鳥模型 左に飛鳥浄御原宮、右に飛鳥寺、手前に飛鳥池工房遺跡が見える。

とどまらず、人間と都市・環境の視点から改めて考究し直す必要がある。

飛鳥の工房と古代技術

藤原京の前代に栄えた飛鳥は、古代国家形成の中心舞台であり、飛鳥・白鳳文化の創出の舞台である。奈文研も飛鳥の遺跡の調査を数多く積み重ねてきたが、近年では飛鳥池遺跡の調査成果が最も社会的な注目と関心を集めている。

飛鳥池遺跡は、天武天皇の飛鳥浄御原宮（飛鳥京跡）の北東四〇〇mに位置する古代の工房遺跡である。一九九一年に近世の溜池「飛鳥池」の池底深くから発見され、一九九七年から一九九九年にかけて一万四〇〇〇mにおよぶ発掘調査が実施された。工房の操業時期は七世紀の後半、天武・持統朝を中心とする。遺跡は飛鳥寺の寺域東南に接した谷間に立地し、谷に面した丘陵斜面を擁壇上に造成して各種工房が配置されていた。工房の操業時に生じた炭や灰が谷の窪みに廃棄されており、一m近い厚さで谷を覆っていた。調査では、この廃棄物層をすべて土囊に入れて持ち帰り、二ミリメッシュの電動篩器を使用して水洗作業をおこなった。その数およそ十万五千袋。気の遠くなるような水洗作業の結果、通常の発掘では見落とされがちな微細な遺物を細大漏らさず回収することができた。現代ではその処理をめぐって社会問題化する産業廃棄物も、古代のものとなると宝の山。古代の技術の解明に欠かせぬ貴重な資料である。

発掘調査の結果、この工房遺跡で、金・銀・銅・鉄を素材とした金属加工、ガラス・水晶・琥珀を使った宝玉類の生産、漆工、べっこう細工、屋瓦の焼成などがおこなわれたことが確認され、この遺跡が古代の手工業技術を集積した巨大な総合工房であることが明らかになった。

さらにこの工房遺跡からは富本銭の未製品が大量に出土し、鑄銭司を兼ねていたことも明らかになった。その鑄造年代は、わが国最古の銅銭とされてきた和銅元（七〇八）年発行の和同開珎よりも古く、七世紀

後半にさかのぼる。

『日本書紀』には、天武十二（六八三）年に「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いることなかれ」という詔が見える。この詔に登場する銅銭や銀銭が一体何か、古銭研究の始まった江戸時代からさまざまに議論されてきたが、飛鳥池遺跡の調査によって、銅銭が富本銭、銀銭が銀地金として流通した無文銀銭であることが明らかになった。銅銭に刻まれた「富本」の文字は、「国や民を富ませる本」という意味であり、その出典は、唐の武徳七（六二四）年に欧阳詢が撰上した類書『芸文類聚』や、『晋書』に記された後漢の「五銖銭」鑄造復活の故事に由来する。天武天皇は、藤原京の建設に向けて、新たな都市住民が生み出す膨大な消費活動を保証するために、官営市場を設置するなど流通経済の機構の整備を図るとともに、中国都城の経済システムを模倣して鑄造銅貨の流通を企図したのである。富国、富民を願う「富本」の文字と、陰陽五行の調和を図像化した七曜文は、初めて鑄造する銭貨にふさわしい銭文である。

飛鳥の中枢部に営まれた飛鳥池工房遺跡は、相次ぐ寺院の造営や宮殿建設、宮廷生活や役所の必需品を生産した国家的な工房であり、律令国家の形成を物質面で支えた工房と考えられる。出土遺物の分析を通して、古代の技術や物づくりの知恵が解明されつつあるが、その詳細に関してはまた別の機会に紹介することにしよう。



飛鳥池遺跡出土の富本銭の未成品 鑄造時に溶銅が流れた湯道部分も出土した。

シンガポールの街角がスペクタクルになるとき

田中雅一

MASAKAZU TANAKA



田中雅一（たなか まさかず）
一九五五年、和歌山県生まれ。ロンドン大学経済政治学院
ECON、国立民族博物館助手を経て、現在、京都大学人文科学
研究所教授、大学院人間・環境学専攻（協力教員）
専攻は文化人類学、著書に、『供養世界の姿貌—南アジア
社会の歴史人類学』（法蔵館、編著）『暴力の人類学』（京
都大学出版会）『女神—聖と性の人類学』（平凡社）
共編著に『ジェンダーで学ぶ文化人類学』（世界思想社）
『ミクロ人類学の実践』（世界思想社）など。

1 はじめに

文化人類学者に街角は不似合いだ。文化人類学は小規模な社会をこれまで取り扱ってきたからだ。とはいえ、文化人類学においても規模の大きな街や都市を研究対象にする人々が現れた。わたしもスリランカの漁村、南インドの寺院などのフィールドを経て、都市として遜色のない場所、シンガポールにたどりついた。

シンガポールは沖繩本島より少し大きめの小さな島国であり、ほぼ赤道に位置する。日本からは飛行機でおよそ六時間の距離である。

シンガポールの繁華街は一年中日本人観光客でにぎわっている。シンガポールは、治安がよく、衛生的で、しかも物価が安い。世界の高級ブランドも集まっている。食事もおいしい。ハワイや香港とならんで日本人には人気の高い観光地だ。最近では六〇万人近い日本人がシンガポールを訪れている。シンガポールは中国人の街だが、英語が公用語でインド系やマレー系の人々が住む多民族国家である。「エスニック」な世界を身の危険を感じることなく気ままに楽しむことができるのもシンガポールの魅力だ。しかし、こうした民族性はチャイナ・タウンやリトル・インディア（インド系の街）、あるいはアラブ街に行かなければ、

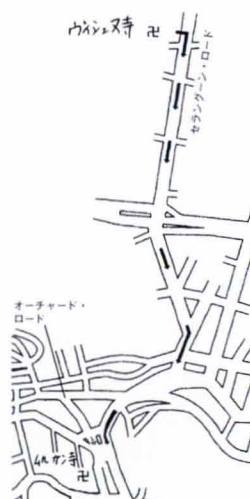
なかなか味わうことができない。シンガポールの中心街を支配するのは、現代の都市を特徴づける高層ビルとさまざまな商品なのである。

そんなシンガポールの繁華街に、一日だけインド世界が突如として出現することがある。それがタイ・プーサムとよばれる祭りの日だ。以下では、この祭りについて紹介したい。

2 多民族国家シンガポール

シンガポールは一九六三年にマレー連邦の一員として独立、その二年後に分離独立する。シンガポールは、いまでもその治安の高さで有名であるが、マレーシア連邦への参加直後の一九六四年七月にマレー人による大規模な暴動があった。独立当初はむしろ民族融合、新たなシンガポール人の創出が試みられた。その後各民族の特徴を強調する政策転換が生じることになる。

一九七〇年代末以後における多民族主義の前提となったのは、シンガポールは中国系Chinese、マレー系Malays、インド系Indians、その他Others（ヨーロッパ系など）の四つ（英語の頭文字をとって、CMIOと表現される）の諸民族から成立しており、これらの集団には特定の言語、文化、宗教などが対応するという考え方である。そし



シンガポール中心部

て、七〇年代末にSpeak Mandarin Campaignが始まり、言語教育の整備がなされる。八〇年代には儒教、ヒンドゥー教、キリスト教などの宗教教育が実現した。

今日のシンガポールを含むマレー半島に居住するヒンドゥー教徒の祖先は一九世紀にインドからやってきた。かれらの多くは当時の英領マラヤにおけるサトウキビやゴムのプランテーションで働く労働者であった。当時は五人のうち四人がヒンドゥー教徒で、その多くが南インド出身の低カースト、とくに不可触民であった。反対に、高位のカースト、とくにバラモンは見あたらなかった。

二〇〇〇年のシンガポールの人口、三三二六万のうち、およそ二六万人、すなわち七・九パーセントが「インド人Indian」とされるが、この中にはインド以外の南アジア出身の人々やヒンドゥー教徒以外の人々も含まれる。そして、このインド系シンガポール人のおよそ六割がタミル語を母語と

（一）二〇〇〇年の統計では総人口が三三二六万、そのうち、中国系が七六・八パーセント、マレー系が一三・九パーセント、インド系人口が七・九パーセントである。宗教では、一五歳以上の人口に限って言うと、仏教が四二・五パーセント、道教など中国の伝統宗教が八・五パーセント、イスラームが一四・九パーセント、キリスト教一四・六パーセント、そして、ヒンドゥー教徒が四・〇パーセントである。それ以外の宗教が〇・六パーセント、無宗教が一四・八パーセントである。二〇〇三年の統計では総人口が三四四万である。ただし、これに加えて外国人居住者が八〇万人近くいる。（<http://www.singstat.gov.sg/keystats/2000/handbook.pdf>参照）

する南インド出身者である。ヒンドゥー教徒はインド系シンガポール人の半分を占める。かれらは、徐々にその地位を高め、代わりにより一八八〇年代に増加したインドからの出稼ぎ労働者が最下位の階層を占めることになった。

3 タイ・プーサム

タイ・プーサム祭は、タイ月（タミル暦一月半ばから二月半ば）の満月になされる。タミルの神ムルガンはタイ・プーサムの日に南インドのヴァイディーシュヴァラ・コイルというところで母のパールヴァティから、スーラパドマの軍勢と闘うために武器（*ve*）を送られたという。タイ・プーサムがムルガン神と結びついているのはこのような故事に由来する。

タイ・プーサムを祝う寺院はタンク・ロードに位置するムルガン（*Thandayuthapani*）寺院である。これは一八五九年に建立された。シンガポールで勢力を誇ってきたチェッティヤール（金貸し、商人）・カーストが建立し、今日も管理している（地図参照）。この寺院から四キロほど北のセラングー・ロードのヴィシヌヌ（*Srinivasa Perumal*）寺院にたくさんの人々が集まっ



図1 カーヴァディの基本（18世紀末にフランスで公開された書物より）

てくる。このヴィシヌヌ寺院はカーヴァディの出発点に選ばれただけで、儀礼的なつながりは存在しない。かれらは境内で簡単な礼拝をし、これから行うカーヴァディの準備をする。カーヴァディとは一種の天秤棒で、両端にミルクの入った壺を吊し、棒にはアーチ形の板を取りついたり、布を張ったりしている（図1）。この基本形に、紙でできた飾りやクジャクの羽で飾り立てる（図2）。さらに、金属製の枠で自分の体を覆うようなカーヴァディもある（図3）。これは胴に巻いたベルトと肩パッドで四五キロ以上もある金属棒を支える。外から見ると、円形に広がったスカートを頭からかぶっているような形になる。この上に（つまり頭上に）ムルガンの像を描いた絵を掲げ、さらにその上にクジャクの羽などの飾りがつく。そして、ここにミルク壺二つが収められている。壺に入ったミルクはムルガン寺院のご本尊に供えられ灌頂に使われる。これからムルガン寺院に行進する人々の多くは、額や頬にムルガンの武器ヴェールのミニチュアを刺している。また金属製のカーヴァディには金属棒から内側に一メートル近い長さの針が上半身に刺さっている。中には背中に直接ひもの付いた鉄鉤を刺して、小さな山車を引っ張っている人もある。あちこちで針刺しの光景が見られる。ほかにも、壺のみを頭にのせて行進する人もいる。カーヴァディが男性用であるため、これは圧倒的に女性が多い。そして、暗い夜道をムルガン寺院へと歩き始める。この行進は夜の一時くらいまでは一日中続く。二〇〇二年にはおよそ二万人が行進に参加した。

4 タイ・プーサムの変貌

平日の場合、夕方から行進に参加する人々が増え、見物客が沿道にあふれかえる。とくにインド系の女性たちはきれいなサリーを着ていて、いっそう艶やかである。

トウキョウやニューヨークとさほど変わらないようなシンガポールの中心街。そこで突如繰り広げられるインド系住民たちの「野蛮な」儀礼。今からさかのぼることおよそ七〇年、一九三〇年代のシンガポールではこうした野蛮な儀礼をなくそうという運動が活発に政府に働きかけ、つぎのような手紙をおくった。「金属針による身の毛もよだつ自傷行為がこの国にあまねく見られる。これは最近ではとくに労働者階級の間にますます増えている。…海峡政府にこの悪い慣習の廃止を推薦することを願うばかりである。」

ところが、現在のタイ・プーサムはどうだろう。これを野蛮と非難する声はもはや聞こえない。代わりに、インド系住民の誇るべき伝統と解釈され、年々派手になり、参加者も増大している。それだけではない、中国系シンガポール人の参加もしばしば見られる（図4）。政府は、こうした非インド系住民の参加を多民族共存の証として讃えている。

暴力は、今日野蛮の徴ではなく真摯な信仰の証へと変貌した。その真正さをこの目で確かめるために信仰に関係なく多くの見物人がやってくる。外国からの観光客も多い。タイ・プーサムは、多民族国家シンガポールを彩る一大スペクタクルへと変貌したのである。



図4 金属製カーヴァディを担ぐ中国系シンガポール人



図3 金属製カーヴァディ（南インドの事例から）



図2 カーヴァディを担ぐインド系シンガポール人

吉田南構内の自然緑地の重要性 —希少種カトウツケオグモを発見—

西川完途

松井正文

KANTO NISHIKAWA MASAFUMI MATSUI

吉田南構内の緑地



吉田南構内の緑地は、第三高等学校の造成の際に以前からあった雑木林をキャンパス内に残したものとされ、その後、更に植栽が行われてきた(図1)。樹齢百年を越える大木もあることから、当時の植生を残したという話も恐らく嘘ではないだろう。本研究科の加藤真教授によると、カタツムリなどの陸貝の仲間であるナミコギセルも生息しているそうで、彼らも京大の歴史とともに一世紀以上個体群を維持してきた可能性がある。緑地は南北に長く、面積も一千平方メートル以上もあるにもかかわらず、多くの学生や職員にはほとんど意識されることはないようだ。たとえ意識されるとしても、目立つ花も咲かず鬱蒼と茂る木々に、不快な気分にするものかも知れない。

そのような緑地ではあるが、生物にとっては良好な環境で、肥沃な土壌には多様な土壌動物が見られる。また、よく目を凝らして地表を探せば、俗に冬虫夏草と言われる菌類や、秋から冬にかけては、倒木上にヒラタケやエノキタケなど一般にも馴染みのある食用菌が見られる。緑地内に点在する水場には多くのプランクトンや、再生実験で有名な扁形動物の一種プラナリアも生

息している。我々が生態調査を行っているカスミサンショウウオは、驚くべきことに緑地の一平方メートル当たり到一个体以上生息しているという推定がなされており(本誌十七号 松井正文・二〇〇五・「吉田南構内のカスミサンショウウオの生態」参照)、この数値はそれだけ豊富な餌動物が棲息していることを示しているのに他ならない。多くの哺乳類や鳥類にも餌場、水場、そして休憩場所として利用されており、数年前には、迷い込んだと思われるタヌキに出会ったことがある。

カトウツケオグモの発見

カトウツケオグモ (*Phrynachne katoi*)¹

は、鳥の糞に擬態していることで知られるカニグモ科のクモである。鳥の糞に擬態しているクモは他にコガネグモ科にも見られるが、どうして糞に擬態するのか理由はよくわかっていない。捕食者の目を欺くためとか、または悪臭を放つ種がいたりから、糞と間違えて近づくハエを捕食するためとか言われたこともあるようだ(真偽のほどは怪しい)。彼らは非常に精巧に鳥の糞に擬態しており、脚の白色の部分など鳥の糞の尿酸が固まっている部分にそ

西川完途(にしかわ かんと)
人間・環境学研究所助手。一九七五年、福岡県生まれ。京都大学農学部卒業。人間・環境学研究所博士後期課程中退後、現職。専門は両生類の系統分類学。
松井正文(まつい まさふみ)
人間・環境学研究所教授。一九五〇年、長野県生まれ。信州大学繊維学部卒業。京都大学大学院理学研究科博士後期課程中退後、京都大学教養部助手。助教授、人間・環境学研究所助教授を経て、現職。専門は動物系統分類学、爬虫両棲類学。

っくりである。カトウツケオグモは全国的にも発見例が少なく、都道府県版レッドデータブックでも、愛知県で絶滅危惧IB類、兵庫県で要注目種、長崎県など複数県で情報不足として掲載されている。

筆者らの所属する研究室では、約十年間にわたって上述のカスミサンショウウオの生態調査を行っているが、三年前の調査中に緑地内の池の近くで本種を偶然に発見した(図2)。葉上で小さく丸くなっており、一見しただけでは鳥の糞に見間違える奇妙な姿をしていた。このクモの同定を引き受けてくれた国立科学博物館の小野展嗣博士によると、分布が不連続で生態も不明な点が多いとのことであった。京都府下の未発表の記録は数例あるようだが、府のレッドデータブックには現在のところ掲載されていない。

緑地の重要性

近年、いわゆる里山環境の保全の必要性が叫ばれているが、本緑地も自然状態に近い植生や土壌が維持されているために、都市環境に生息する野生生物にとって砂漠の中のアアシスに例えられる環境であると言えよう。一方で、西洋的に管理された公園

(1) 和名および学名は、前出の加藤教授とは無関係。蟬の研究者加藤正世に献名されたもの。

(2) 現在、ニホンミツバチの巣は時計台の南西にあるクスノキの樹洞に細々と残っている。

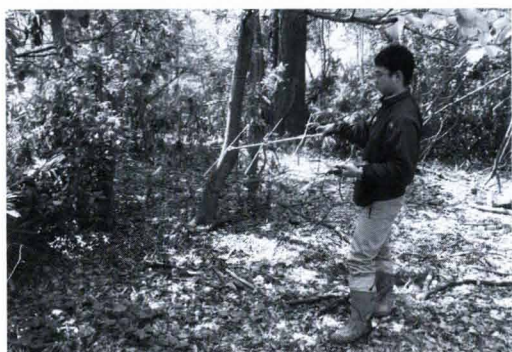


図1 緑地にてサンショウウオの行動範囲を調査中。とても大学構内にいるとは思えない。

などとは異なり、雑草の生え放題のところも散在して、藪をかき分けないと先に進めないところもある。周辺住民の方々からの落ち葉や蚊の発生に対する苦情もあり、構内での駐輪スペースの確保などから緑地の縮小化の案もあると聞く。しかし、この緑地のお陰で、大学構内にいながら学生と野外採集を行いサンプルを入手して、すぐに隣の校舎での実習に用いることができる。その背景には、過密になった授業時間割と、近場の自然環境が激減していることから、授業時間内での野外実習が困難になりつつあるという現状がある。また、緑地では院生による生態研究も日々行われており、いくつかの卒業論文、修士論文、そして学術論文が実際にこの緑地での調査から生まれている。なによりも、研究室の直近に調査地があることは研究を続ける上で非常に有利なことである。更に女子学生でも安心して夜間調査ができる。そして、その日々の



図2 吉田南構内の緑地で発見されたカトウツケオグモ。

調査の中でカトウツケオグモのような希少動物の生息が確認されたのである。
現在、本学構内では様々な工事が急ピッチで行われ、多くの樹木がどんどん無差別に切り倒されている。この小文を書いている間にも、本研究科の西側ではドイツトウヒをはじめとする植栽が新たなトイレ建設のために切り払われてしまった。新校舎が林立しコンクリートの地面ばかりが増え、過剰に整備された休憩場所が目立つ。近代的になったようでいて、大雨の時には水が行き場を失って建物内に流れ込むという矛盾も生じている。

のような限られた環境に営巣しているミツバチ達が受粉してくれているからである。吉田南構内の緑地は一見無駄な場所のように見えて、教育、研究、そして市街地における生物多様性の保全の上でも、実は非常に重要な場所である。全学的に構内の樹木や緑地が減少する中、吉田南構内の半自然状態の緑地をあえて改変せずに現状を維持していくことは、本研究科の理念、ひいては京都大学の環境憲章にも準ずる取り組みでもあるとは考えられないだろうか。

末筆ながら、クモの同定や学名の由来などについてご教示頂いた国立科学博物館の小野展嗣博士にお礼申し上げます。

『太陽通り』と東への郷愁

浅井晶子
SHOKO ASAI

一九九九年に公開されたレアンダー・ハ
ウスマン監督の映画『ゾンネンアレー（太
陽通り）』は二百四十万人の観客を動員し
た、ドイツ映画市場空前のヒット作である。
映画を企画し、監督とともに脚本を書いた
のは作家のトーマス・ブルスイヒで、彼は
映画公開前に同じ題材で『太陽通り』の短
いほうの端で」という小説も出版した。（以
下『太陽通り』と記す。）

『太陽通り』は社会主義体制下の東ベル
リンを舞台に、少年たちの日常を描いたコ
メディだ。友情、初恋、ロック音楽への
情熱、大人の社会への反発など、彼らの日
常の悩みや喜びは、西側の少年たちのそれ
とまったくかわらない。灰色一色だったと
思われがちな東ドイツにも、反体制運動の
闘士でもなければがちがちのイデオロギー
信者でもない、政治とは無関係なところで
日常をしたたかに生きる市井の人々がおり、
ごくありふれた青春があったのだという当
たり前の事実を西出身者に認識させると同
時に、自分たちの過去を引け目に思う必要
はないのだと東出身者を勇気づけた。「東
ドイツで青春時代を送らなかった人がそれ
を悔しく思うような作品にしたい」という
のがブルスイヒのひねりのきいた抱負であ
ったが、彼の狙いは見事に達成されたとい
えよう。

『太陽通り』は彼の三作目にあたる小説
だが、映画では変更されたりカットされたり
したエピソードやアイデアをお蔵入りに
しないために書かれたものだというこ
で、映画とは設定や筋書きの異なる独自の
作品になっている。

私の翻訳第一作は、この小説『太陽通り』
だった。翻訳に際しての困難の大半は東ド
イツの社会システムや生活、風習に対する
無知から来るものだった。翻訳に調べもの
はつきものだが、書籍、新聞、雑誌などメ
ディアを通しての調査には限界があり、途
方に暮れる私を助けてくれたのが、当時の
勤務先のベルリン・フンボルト大学日本学
科の同僚たちだった。彼らの多くは東ドイ
ツ出身者であり、皆非常に熱心に協力して
くれた。辞書にも載っていない言葉、西出身
の誰に聞いてもわからないさまざまな俗語、
兵役中の兵士たちの習慣や仲間内での特殊
な言葉にはじまり、選挙で用紙を白紙のま
ま投票箱に入れるのはなぜか、「自由ドイ
ツ青年同盟」なる組織の活動や「制服」で
ある青シャツの着用状況、その同盟の演説
が学校で行われるのはなぜか、ストーンズ
のレコードの「インド版」とはなにか、な
ど、私の細かくもくだらない質問の数々に、
時には家族まで動員して、彼らは皆熱心に、
嬉々として答えてくれた。そして、そんな

浅井晶子（あさい しょうこ）
一九七三年、大阪府生まれ。京都大学人間・環境学研究所博士後期課程研究
指導認定退学。ベルリン・フンボルト大学哲学部博士課程在籍。ドイツ文学
翻訳。訳書にトーマス・ブルスイヒ著『太陽通り』（二〇〇二年三修社）、ア
クセル・ブラウンス著『鮮やかな影とコウモリ』（二〇〇五年インデックス
出版）、ウーヴェ・ティム著『カレソーセージをめぐるレナナの物語』（二
〇〇五年河出書房新社）など。

ときに彼らがついでのように語ってくれる
東ドイツ時代の思い出はやはり今日の視点
から見れば奇抜で滑稽なもので、彼ら自身
もそのようなものとして語るのだが、それ
でもそこには隠しようもない郷愁と、西出
身者へのかすかな反発のようなものを感じ
られた。

彼らの中には東ドイツ時代に大学で学び、
留学もし、そのまま大学に残って研究者と
してのキャリアを積む予定だった人もいる
ようだ。東西ドイツの「統一」により大学
内にも変革の嵐が吹き荒れ、彼らの進路も
大きな変更を余儀なくされた。学科は西側
から教授を迎え、研究職のポストはすべて
西側出身者で占められることになった。大
学に残っていた東ドイツ出身者は、図書館
司書、語学教師など、研究者としてのキャ



旧東ドイツ時代の廃墟。現在は外観はそのまま、映画館、劇場、カフェ、ギャラリーなどが入っている。

(1) 日本では未配給。

(2) 邦訳は『太陽通り』
浅井晶子訳 三修社 二〇〇二年

(3) 一部抜粋が『Delia』誌四号(二〇〇五年六月)に発表されている。(浅井晶子訳)



ポツダム広場のベルリンの壁跡に建設された近代ビル群

リアを望めないポストに留まることになった。

一見穏やかにくつたなく見える彼らの胸の内に、悔しい思いがなかったといえは嘘になるだろう。彼らのその鬱屈した気持ちに火をつけるのではなく、逆の方向から彼らのプライドを刺激したのが『太陽通り』だったのではないだろうか。

「東にだっていいところはあった」「楽しいこともたくさんあった」…東ドイツ時代を全否定し、「統一」後の新しい社会の価値観に自分を合わせることに必死にならざるを得なかった彼らが、十年間おそらく無意識のうちに抑圧していたそんな思いを、『太陽通り』は解き放った。小説の登場人物は「僕は滑稽だった。そしてそれに気づいてさえないなかった」と、東ドイツ時代の自身の姿を笑う距離感を持ちながら、同時に東ドイツでの青春時代を「人生でもっとも美しい時代」と表現する。登場人物の滑稽さに笑いながら、東ドイツでの人生を全否定する必要はないのだ、「幸せだった」と堂々と口にしていいのだという、私のよ

うな部外者から見ればごく当然の感覚を、彼らは取り戻したのではなかったろうか。『太陽通り』に対する彼らのあの熱狂には、自身の過去に対する愛情と郷愁が、確かにあったのだと思う。

しかし『太陽通り』には同時に、東ドイツを一種のカルトとして祭り上げることで、体制の持っていた非人間性を無害化してしまふ危険性が潜む。西ドイツ市民並みの経済的豊かさを期待して、「統一」という名の西ドイツによる「併合」を歓迎したが、結果的には求めていた豊かさは得られず、「二級市民」扱いを受けそれを甘受するしかなかった旧東ドイツ市民が、「オスタルギー」(東を意味する「オスト」と郷愁を意味する「ノスタルギー」を組み合わせた造語)に逃げ込む危険もある。

これらの危険性をいち早く見抜いていたのが、ほかならぬ『太陽通り』の著者自身であった。『太陽通り』に先立つこと四年、一九九五年に発表され大ベストセラーとなった小説『我ら英雄たち(Helden wie wir)』(未邦訳)で、ブルスイヒは、声なき市民であることで結果的に社会主義体制の維持に貢献してきたにもかかわらず、ベルリンの壁の崩壊後一斉に自分は反体制だったと言いつつ旧東ドイツの民衆の風潮を、そして期待とは違った「統一」後の生活への不満をぶちまけ自身の責任から目を逸らす彼らの欺瞞を、鋭く指摘し批判している。昨年、「文学サロン」という名のベルリンのごく小さな朗読会に、ブルスイヒと私は作家とその翻訳者という立場でよばれた。前述した東ドイツ出身の当時の同僚のひと

りが主催者に私の名前を伝えたことから実現した企画だった。朗読会を聴きにきた人々には東の出身者が多かったようで、ブルスイヒの新作長編小説『輝くさま(Wies leuchtet)』(未邦訳)との関連で、「統一」前後の東ドイツの状況についての話が盛り上がった。そのとき、東ドイツ社会の非人間性と政治制度の欠陥について延々と語っていたある男性が、『太陽通り』の中に出てくる兵役軍人の俗語の話になると突然相好を崩し、「そうそう、こう言うんだよ。兵役に行ったことない人にはわからないよね、こんな言葉」と、懐かしそうな様子になってしまったのが印象的だった。

一方、東ドイツで成人し、兵役も経験したブルスイヒ(一九六五年生まれ)の世代と違って、「統一」時にまだ子供だった若い世代には、東出身であることはハンディにはならず、「東ドイツ」は出身国という以上の大きな意味を持つてはいないように思われる。ブルスイヒははじめ彼と同世代の作家たちは、それ以前の世代とはまったく違う視点で「東ドイツ」というテーマと向き合ってきたが、彼らの「東ドイツ」がさらに若い世代にはどのように受け取られ、受け継がれていくのか、関心を持って見つけている。

東谷 護二著

評者・舌津智之（立教大学教授）

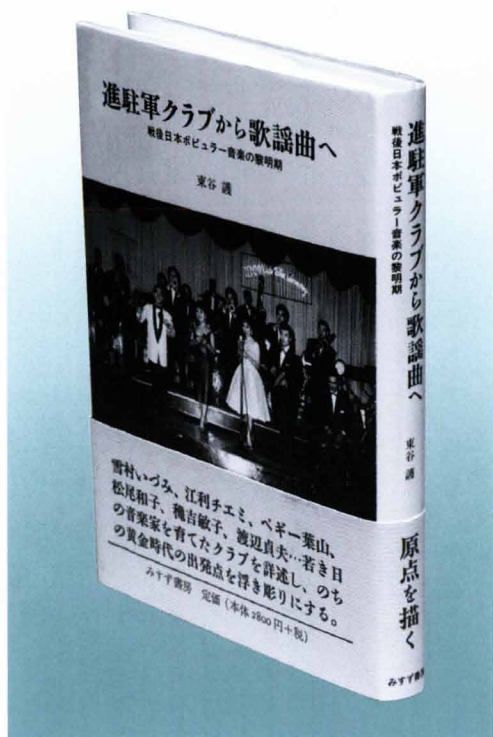
「進駐軍クラブから歌謡曲へ」——戦後日本ポピュラー音楽の黎明期

みずす書房

二〇〇五年四月

二二二頁

定価二、八〇〇円



ポピュラー音楽とは、学術研究対象として、実に困難な代物である。研究者は無論、音楽ファンの蘊蓄や職業ライターの影響批評をこえる何かを示さねばならない。そこで、多くの場合、社会的ないしは理論的な枠組みが導入されることになるのだが、いたずらな抽象化や過度に専門的な言語化は、庶民の息吹きや情感あつてのジャンルに対する知的な冒流行為とも化してしまう。

その点、本書のバランス感覚は絶品である。アカデミック・エンターテインメントであると言つてよい。京都大学に提出された博士論文にもとづく学術書であ

りながら、何よりもまず、読み物として面白く、評者は数時間で一気に本書を読み終えた。この面白さは、貴重な時代史料である写真や図表のリアルな彩りとともに、複数の隠し味によって担保されている。まず、著者は、音楽文化研究を、自らが生まれ育った横浜の郷土史のうちに位置づけている。それはまた、日本の戦後史の縮図でもあり、それゆえ、日米関係論の再考を促す示唆にも富んでいる。つまり、ポピュラー音楽学者のみならず、戦後風俗史に関心を寄せる者や、評者のごとくアメリカ文学研究に携わる人間など、本書に触発されるであろう読者層は

広い。

特筆すべきは、本書の多彩な問題意識の根幹を貫く人間中心主義への信頼である。「個人史の集積がメディアの狭間で埋もれてしまったものを補ってくれる可能性」を思いやる著者は、占領期の横浜にあった進駐軍クラブで働いた無名の人々に地道なインタビュウを行い、知られざる「オフリミット」の空気を鮮やかに呼び覚ましている。主として一九二〇年代に生まれたかつてのバンドマンやクラブ従業員の肉声をすくい取ることは、戦後六〇年を過ぎた今、すでにギリギリの可能性である。本書は、今しか作れない一次資料を後世に残した点、昔の新聞・雑誌を掘り起こして事足れりとする「カルスタ」とは一線を画している。たとえば、アメリカ人兵士について、「戦争で人を殺した後の人間というのは何と言つたらいいのだろう。臆病でびくびくしているみたいに見えた」という日本人の実感を引き出した著者であればこそ、「合衆国から立ち現れる文化形態を、ひとつの統一された「支配的文化」としてみることは難しい」との（昨今ではあまり流行らない）理解をも確認しえたのだろう。

もちろん、今も昔も、アメリカの文化帝国主義を批判することは容易いし、戦後日本の不如意を嘆く言説も根強い。が、こうした問題について、著者は、吉見俊哉が示したような「マクロな立場からの理論化」に異を唱え、「ミクロな視点から当時を生きた人々の具体的な思いや活動の実態を明らかにすること」の意味を説く。言い換えるなら、ポストモダンな「政治性に染められた批評風土の相対化」であり、芸術創作活動における作家主義の復権である。

そのような視座から見えてくる進駐軍クラブとは、「アメリカ」の音楽やシステムを「強制」と受けとめるのではなく、むしろ自らの経験なり何なりを活かす好機として、逆に自分たちにとって都合のいい形で受容し、消化し、発展させ、その結果として新たな文化創出の基盤作りに貢献すること」を可能ならしめた空間である。歌謡曲の原風景をめぐるこの力学は、期せずして今日の護憲／改憲をめぐる問題をもあぶり出し、本書が潜在的に持っているであろう射程の広がりを感じ起こさせてくれる。

ただし、個人の葛藤に信を置く本書のヒューマニズムに対しては、実証主義をこえる理論的な考究が不十分である、との批判も当然ありうるだろう。なるほど、ポピュラー音楽研究を知の技法として日本の土壌に育んだ三井徹や細川周平や増田聡の洗練を、著者の東谷護は必ずしも共有していない。しかし彼は、洗練派の研究者が決して模倣しえないある種の朴訥さをもつて、いわば不器用さを武器に、人間愛の滲みを慈しむ。これは圧倒的な才能である。

そもそも、文系の学問は、理系のそれと同じような意味では「科学」にならない。そのことは、限界であると同時に美德でもある。確かに、楽理として、統計学として、あるいは文化理論としてのポピュラー音楽研究もありえるだろう。けれども、大衆の琴線にふれる調べの本質とは、その人文性に由来するものである。人文研究とは、とりもなおさず人の文の研究である。本書は、その点、すぐれて審美的かつ臨場的であり、「科学」に傾く（ことで実学志向の国家政策に懐柔されゆく）文系学問の流れに対し、ささやかに逞しく抗っている。

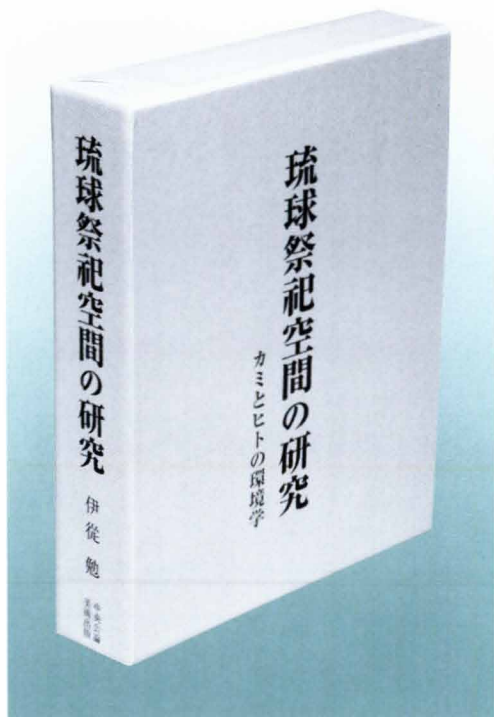
「琉球祭祀空間の研究」

中央公論美術出版

二〇〇五年四月

八四八頁

定価四三、〇〇〇円



琉球・沖縄の祭祀をめぐる研究は、伊波普猷（一八七六―一九四七）から数える一世紀ほどの時間を有するが、現在の状況を見たとき、克服すべき深刻な課題を内包しているように思える。一言でいうならば、諸ジャンル（民俗学・人類学・歴史学・考古学・文学など）において得意とするそれぞれのテーマの精緻化は格段に進んできたものの、総合的な視点・方法をふまえて、琉球祭祀の全体構造ともいべき問題を捉えようとする努力が希薄化している点である。その課題に向かつて、意欲的な研究に取り組んできたのが伊從勉氏の一連の仕事、すな

わち本書に収録された論文群である。彼は沖縄島とその周辺島嶼（伊是名島・粟国島・久高島・久米島など）において、ここ二〇年余にわたりフィールドワークを重ねながら、これまで誰も本格的に試みることがない視点・方法に立って問題を抽出し、その見通しを提示して見せた。祭祀の現状を観察し、関係者から聞き取り調査を行っただけではない。既述の調査や研究の成果を丁寧にフォローしているだけでもない。祭祀における施設状況を観察し、必要とされる歴史文献を詳細に吟味することを通じて、その祭祀が内在する態様と変化を把握し

た。この地帯を得たとき、伊從氏が見聞した現行の祭祀は「純粹無垢の自発的な地方文化の発現ではなく、五世紀にわたり存続してきた琉球王国統治下の祭祀慣行が変貌した果ての残存形態である」（序——沖縄から琉球への旅）ことを実感することとなった

地方祭祀で得たこの知見をもとに、伊從氏の研究は首里城へと向かう。その城を軸に営まれたかつての王府祭祀について、関連文献を徹底的に分析することはもとより、祭祀が営まれた空間状況に対する展望を織り交ぜながら、公的かつ国家的な琉球祭祀の態様とその変化の問題を提示した。この視点に立つことによつて、伊從氏は、地方から首里城へ、首里城から地方へと問題を絶えずフィードバックさせながら、琉球祭祀の全体構造に迫るという独自の方法に達したといえる。

神殿を持たず、祭式を中心に営まれ、かつ祭祀の場において神女が自らカミとして振舞う琉球祭祀の特徴は、首里城および地方に通底するものだった。琉球祭祀に古代日本の原像を嗅ぎ分けようとするいわゆる「南島論」は伊從氏の議論によつて遠ざけられ、琉球祭祀はそれが属したところの琉球・沖縄のたどった時間にも正しく置き戻されたことになる。

本書に収められた二一本の論説のうち、唯一未発表の論考が「琉球王国国家祭祀における首里城と斎場御嶽のアナロジーの起源について」（第一〇章）である。私を含む琉球史の研究者が主導してきた「庫理論」を批判し、それを政治・行政制度のみの問題に留め置くのではなく、祭祀の観点から検討することの必要性を豊富な事例をもとに訴えている。そのような理解に立ったときに始めて、政治と

祭祀が二重に機能した王国の実態について、「庫理」というカテゴリーは雄弁に語ってくれるはずだ、という伊從氏の議論はまさに刺激的だ。

地方祭祀の状況にのみ傾斜して語られてきた旧来の琉球祭祀論の枠組みを脱けたことにより、伊從氏の仕事は必然的に琉球研究に関与する多くの学問ジャンルに多大なインパクトを及ぼす。過去と現在の状況を一つのテーブルに載せて、琉球祭祀の全体構造をどう語るべきか、という共通論題が提起されたからだ。

首里城の復元に深くかわつてきた私の思いを補足すれば、本書は首里城のいわゆるソフトを復元した仕事に相当する。首里城の個々の建造物や彫刻、碑文などの建築空間はたしかによりがえりつつあるが、その場においてかつてどのような祭祀が営まれていたのか、この問題を首里城という空間に即しつつ具体的に検討する研究者は残念ながらごく僅かである。伊從氏の仕事は、その意味で、首里城復元を単なる事業に終わらせてはならないという問題提起でもある。

最後に一言。伊從氏は本書の骨子をぜひ新書版程度の入門書にまとめて欲しい。昨年五月に那覇市で開催された出版祝賀会でも同様の注文が発せられていたが、本書で展開された琉球祭祀の世界をより多くの人々に届けるために、研究者にとつて欠かすことのできない責務だと私も思う。

※本書は二〇〇六年一月に、沖縄学の父・故伊波普猷にちなみ、沖縄文化の振興と沖縄学の発展に顕著な貢献を行った業績に授与される「伊波普猷賞」（一九七三年創設）を受賞した。（編集委員会後記）

藤原辰史Ⅱ著

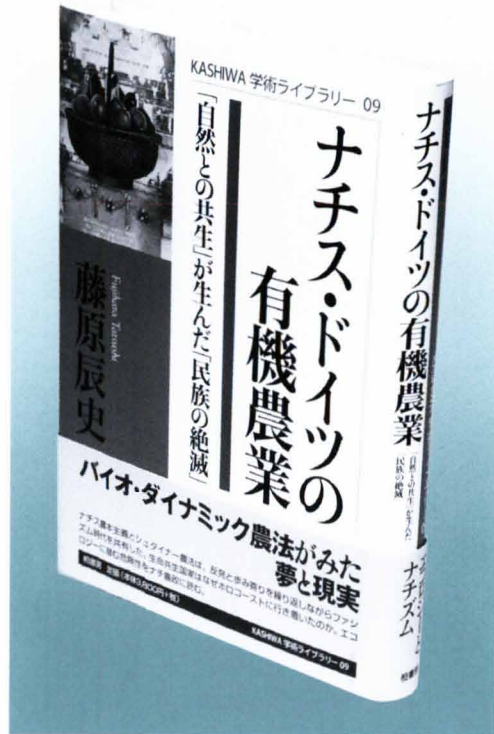
評者・伊藤淳史（京都大学大学院農学研究科助手）

「ナチス・ドイツの有機農業―「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」

柏書房

二〇〇五年二月 三〇六頁

定価三、九九〇円



近年、大量生産・大量消費・大量廃棄という二〇世紀型システムへの反省から、人間と自然のオルタナティブな関係を「環境先進国」ドイツから学ぼうとする論調が日本において広がりを見せている。だが、そのドイツにおいて「自然との共生」が「民族の絶滅」に帰結した過去が存在することはほとんど知られていない。本書は、人智学者シュタイナーにより「生成」（第一部）をみた有機農法Ⅱバイオ・ダイナミック農法（BD農法）がドイツ第三帝国においてナチス農本思想と「混淆」（第二部）し、「変容」（第三部）を遂げてゆく過程を明らかにしたきわめてインパクトの強い研究である。ナチ党

員にBD農法支持を呼びかけ、戦後は「BD施肥法の闘士」となった食糧・農業大臣ダレー、人智学禁止後も「BD農法全国連盟」の活動を守り抜こうとした総統代理ヘス、東方占領地における（入植ドイツ人による）BD農法実施を構想するとともに、強制収容所において（囚人の強制労働による）BD農法菜園を経営した親衛隊隊長ヒムラー……。一方でBD農法実践者たちの側でもナチスへの歩み寄りをはかるなかでBD農法のもつ人智学に基づく秘儀的性格からの脱却がもたらされてゆく。農本主義的なナチズムとエコロジカルな農業のグロテスクな同盟（一九頁）。ここに「人間非中心主

義」的な「土壌―植物―動物―人間の生物学的共生」というスローガンは「他民族との共生」を拒む凶器へと転じた。著者は有機農業を通じて、ナチス・ドイツにおける「生命の充溢」が「生命の解体」と一体の関係にあったことを克明に描き出している。

本書の第一の意義は、これまで意識して論じられることの少なかった「自然との共生」のはらむ暴力性を、有機農業という具体的な事例に即して論じたことにある。ともすれば「自然との共生」のひとつの理想形として語られがちであった有機農業であるが、今後はその可能性（と陥穽）について「自然との共生」そのものの吟味も含め根本的に捉え直すことが迫られるだろう。また、「被害者」としてばかりではなく加害者としての農業および農学」という指摘（二六一頁）は、評者自身に突きつけられた問いでもある。本書はその衝撃的な内容から多くの書評において取り上げられ、概ね好意的な評価をもって迎えられている。そこで、ここではあえて辛口のコメントをしておきたい。著者は「同時代史のなかのナチス農業」（二五頁）というアプローチを重視したとするが、はたしてその試みは成功したのか。「生産戦」および「無駄なくせ闘争」について（第七章・第八章）、著者はこれらの政策に「ナチス・エコロジズムの心理的基盤」（一三〇頁）を見出そうとしている。しかしここで唱導された経営多角化・自給肥料による地力維持・隣保共助の活用・都市厨芥の農村への還元といった事柄は、同時期の日本でも経済更生運動以来繰り返し唱えられていたものである。ドイツにおける（固有の）「ナチ化」と（日本等にも共通する）「戦時体制化」について、より細かな腑分けが必要ではないだろうか。また、結論部にあたる「エピローグ」で著者は「満洲国」の「循環農法」Ⅱ「北海道農法」（第一四章）・英領インドの「イン

ドル方式」（第二章）との比較の上で「農業におけるナチス・エコロジズムの発現は、「農民のアイデンティティ」の問題として捉えることができる」（二五〇頁）と主張する。しかしナチス農政の中に意識的に取り込まれたBD農法、世界中の大英帝国植民地に移植された「インドル方式」に対して「北海道農法」は政策として強力に推進されることになった砂粒のような存在にすぎず（試みられたのは「満洲国」総農家・総耕地面積・総農業生産の一・二%でしかない日本人農家のさらにごく一部。これを支配的な農法であったとする（二四八頁）のは完全な誤認）、「満洲国」崩壊以前にその内実を失っていた（田中耕司・今井良一「植民地経営と農業技術開発」『帝國』日本の学知第七巻「岩波書店近刊」）各々の農法の同時代における位置付けの決定的な差異。これを無視しては、「比較」により導出された結論については、その有効性を疑わざるをえない。政策レベルの言説分析でなく農民のアイデンティティにまで踏み込むというのであれば、比較に際して各々の条件規定性へ目配りすることは、単なる思いつきでなく社会科学的研究として主張を行う以上は必須の手續であろう。評者の能力から指摘は同時代の日本の勢力圏にかかわる範囲にとどまるが、その範囲における史料の「動員」のありかたをみるかぎり、全体の叙述においても同様の懸念は拭い去れない。

以上、やや厳しいコメントを述べたが、著者の目指した「今後の研究のための「たたき台」として、ひとつの全体像を提示する」（二七頁）という試みに評者自身大いに刺激を受けた（この小文は触発による産物である）。著者の問題提起はひとり農業史のみならず思想史・農業問題・環境問題といった多様な領域に開かれている。本書の刊行を機にジャンル枠組みを越えた実りある議論が行われ、ゆくことを期待したい。

『共存の哲学 複数宗教からの思考形式』

弘文堂

二〇〇五年十二月 三〇二頁

定価四、二〇〇円



古今東西を問わず、宗教をめぐる争いは絶えない。異なる宗教どうしの闘争もあれば、ある宗教内部での「異端」と「正統」をめぐる争いもある。宗教とは、ある意味、自己の信ずるところを絶対視するものである以上、そこでいくらか「寛容」が説かれたところで、他者への寛容は存立し難いようにも見える。本書は、そのような中で「共存」の可能性を突きつめようとしている。

本書では、まず、宗教間対話の促進をめざす既存の組織として、WCRP（世界宗教者平和会議）、IARF（国際自由宗教連盟）などのNGOが取り上げら

れている。だが、著者によれば、そうした対話のあり方は少なからぬ問題性を孕んでいるという。そこでは多様な宗教が出会うことができる反面、それらは教団の紹介という意味合いが強まり、祈りの厳粛さや密度が伝わりにくい。また、大規模な宗教教団と小規模のそれとは、おのずと「対話」の意味も異なる。大教団は相互の対話を訴えようとする傾向にある一方、先住民・少数民族の宗教はむしろ、その存続のために自己の存在をアピールすることに比重が置かれる。必然的に、そうした「対話」においては、コミュニケーション・ギャップは免れえ

ない。

そのような問題性の克服のために著者が掲げるのが、「インターレリジナス・エクスピリアンス」（IRE||inter-religious experience）という概念である。それは、宗教間対話inter-religious dialogueや宗教的経験religious experienceにとどまるものではなく、「そのそれぞれを前提しつつもその存在を超える」思考である。その実例として、著者はマハトマ・ガンディーやマザー・テレサの実践をあげている。ヒンドゥー教徒であり続けたガンディーは、自らの信仰に忠実であったがゆえに、イスラム教やキリスト教など他宗教を体験しようとした。それは、インドパキスタンの紛争やヨーロッパでの非暴力主義の可能性を問うものであった。また、マザー・テレサも、さまざまな人々の心のなかに「キリスト」を見ていたがゆえに、ヒンドゥー教、イスラム教、仏教等、宗教宗派を問わずに、インドの地において、困窮に喘ぐ人々の救済に携わり、また、さまざまな平和活動を実践した。

本書のこのような思考は、歴史社会学者たる評者の関心からすると、丸山眞男「現代における人間と政治」（一九六一年）を想起させる。丸山はこの論文のなかで、チャップリン「独裁者」を引きながら、「逆さの世界の住人」は自らの世界が「逆さ」であることを認知し得ないと述べ、「異端」（ユダヤ人）が「正統」（ナチ体制）をいくらか批判したところで、それは「逆さの世界」にある「正統」には届き得ないことを指摘する。では、いかにして相手に届く批判が可能なのか。丸山は、「正統」と「異端」の境界領域にその可能性を求める。異なったイメージの交錯に晒されるこの境界領域は、「内側の住人」と「実感」を領ち合いながら、しかも不断に「外」との交通を保ち、内

側のイメージの自己累積による固定化をたえず積極的につきくずす」とそうとする。それは「正統」の権力にとつては、「初めからの異端」とは比較にならないほどの脅威に映る。評者が本書の「インターレリジナス・エクスピリアンス」論に感じるのも、「内側の住人の実感」に立ちつつ、「外」との「対話」を可能ならしめようとするアクチュアリティである。それは、一方的に「外」からの外在的な批判や問いかけとは異質なものであろうし、そこに本書の実践的な可能性があるのではないだろうか。

もつとも、本書の斬新さはこれにとどまらない。宗教間対話の議論では、往々にして無宗教が抜け落ちがちであるが、本書では無宗教との対話についても多く論じられている。とくに、そうした観点から、「チャペル・ウェディング」の成立を論じた「付章『無宗教』への対話」は、日本の現状を考えるうえで興味深い。ちなみに、本書は、学際的な研究を掲げた京都大学大学院人間・環境学研究科に提出された博士論文をもとにしたものであるという。「無宗教も含めた」宗教間の対話」といったテーマは、宗教学や社会学・政治学など、多様なディシプリンが絡むだけに、ともすれば、さまざまな「難癖」をつけられやすい研究課題ではあるだろう。だが、学問の価値は、小ぢんまりとまとめられたものの「精度」のみで測られるべきではない。さまざまなディシプリンを横断しながら、誰もが避けてきた難問に正面からぶつかる「蛮勇」も、それと同等か、あるいはそれ以上に評価されて然るべきであろう。もの静かな筆致の行間に滲む本書の「熱さ」は、まさに、そうした「人環らしさ」を裏打ちしているのかもしれない。

橋爪博幸Ⅱ著

評者・吉川壽洋（和歌山工業高等専門学校名誉教授）

『南方熊楠と「事の学」』

鳥影社

二〇〇五年一月 二六〇頁

定価1,100円



シカゴの万国宗会議が果てて後、英京ロンドンにやって来た土宜法龍と南方熊楠が出会ったのは横浜正金銀行ロンドン支店長中井芳楠方の夜会でのことである。意気投合した両者は、その後手紙のやりとりを始め、主として大乘非仏説論や比較宗教学について議論を闘わせることとなる。

明治二六年一月三日から翌年六月の法龍帰国までの間に交わされた往復書簡において、法龍の巧みな問いかけが功を奏してか、熊楠独自の宇宙観、世界観ともいべきものが、彼の中でだんだんに形づくられ、情熱的に語られて行くこと

になる。それがちに南方曼陀羅として構想されて行く思想の萌芽ともいべきものである。この構想は、熊楠によって「事の学」と命名されるに至る。熊楠は言う。「心界が物界と雑りて初めて生ずるはたらき」が「事の学」であり、「この物心両界」が形成してのち始めてその果を心に感じ、したがってその感じがまた後々の事（心が物に接して作用を現出すること）の因となるなり」（『南方熊楠土宜法龍往復書簡』）と。

本書執筆の意図を橋爪博幸氏は、この「熊楠が創案した『事の学』という独特の表現と内容をもつ学問に着目し、その

意義を浮かび上がらせようとするものである」とする。そのため氏は南方と土宜との往復書簡を詳細に分析するとともに、「事の学」の実践例として熊楠自身がみずからの代表作と称してはばかることのなかった論文「燕石考」を選んで、その創作過程を検討することを併せ行い、ある種評論家的にみずからの背丈で対象を切り取るということとせず、「熊楠自身が語りかける内容に素直に耳を傾ける」ことによって理解を深め、「事の学」の独創性に迫ろうとする。この真摯な態度は注目に値するものといえる。「事の学」の実践例として松居竜五氏がすでに英文論文「ムカデクジラ論」や「神跡考」を掲げて論じているが、複雑そのものの「燕石考」を例に「事の学」との関連性を明らかにしたことは評価されてしかるべきである。

ロンドン時代に法龍との意見交換によって熊楠の中に生じた「事の学」についての構想は、あくまで萌芽的なものであり、これをいわゆる「南方曼陀羅」にまで発展させるためには、帰国後の那智での淡水藻や菌類、粘菌類等の自然観察と孤独の中で深められた思索を必要とした。一方、途中で中断することがあったものの大学予備門以来ロンドン滞在時まで続行された抜書「課餘隨筆」や大英博物館での抜書「ロンドン抜書」といった膨大な量の知識の集積が那智での思索を深めるための基盤となつて貢献している。

これらの抜書には、所々に彼自身がその作業中に得た思いつきが記されており、それがだんだんと膨らみを帯びて行つて、後に一見無関係に思われる事柄と事柄とをみごとに結合させるアイデアを生み出し、一つの創造的な論を形成するまでにいったことが数多くあったものと思わ

れる。そういう抜書による知識や自然体験及び観察から得た知識相互の関係を想像力によって結び合わせることに成功したとき、熊楠は大きな「心内の快楽」を感得したに違いない。そのことを橋爪氏は「南方の考えるところでは、外界から得られた知識を思考や想像という手段によって、つなぎ合わせることににより楽しみを味わうことであり、知識と知識とが結び合わされ理解が得られた際に生じる快い感覚」こそが「心内の快楽」であると、的確に述べておられる。また「森羅万象の世界にある道筋を発見することが南方の科学であり、科学の成果が得られると同時に『心内の快楽』も生まれる」のであるとも説明している。

最終部の第七章「失意の底」は、それまでの文体とは違って、少々感傷的ともいえる文体になっているのは気になるが、後から加えられたものということなので、いたし方ないとして、熊楠が森羅万象の世界つまり宇宙の中に、事・物・心・理の四つの不思議を想定し、「事の学」は宇宙を網羅する知識を得ようとする学であると考えたが、人間の知識では認識しがたい世界として「大日如来の不思議」があることに触れている点に着目して、橋爪氏は熊楠の「日記」にある「自讃」という語に結びつけて説こうとしている点は興味深い。

なお、最近、梅尾の高山寺から新たに南方の土宜宛書簡三八通が発見され、「事の学」の創造に関わる重要な内容を多く含む物として注目されている。橋爪氏のめざすものがきわめて手堅い方法を駆使しての解明であることを考えるとき、新資料を用いての新たな考察結果の発表を期待するところ大である。

（参考・松居竜五他編『南方熊楠の森』）

奥田敏広 著

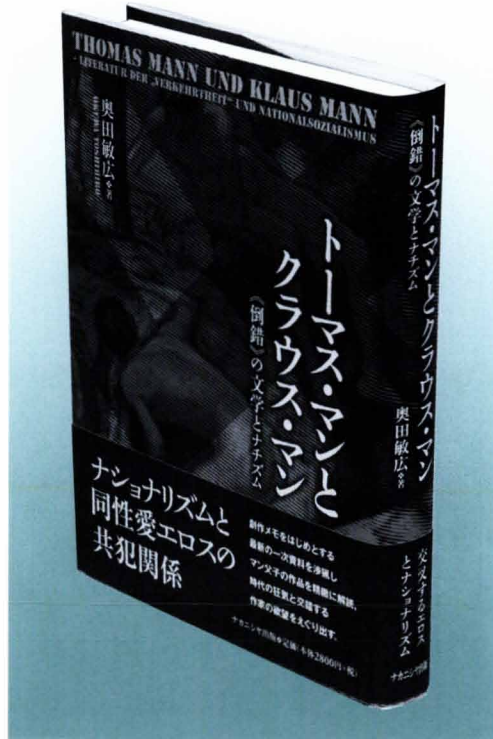
評者・福元圭太（九州大学大学院言語文化研究院助教授）

「トーマス・マンとクラウス・マン」

ナカニシヤ出版

二〇〇六年一月 三一四頁

定価二、九四〇円



本書は、マン父子における私的・審美的領域としての同性愛エロスと、社会的領域としての政治思想、具体的にはナショナリズムの関連を、両者の文学作品を通して考察する、スリリングな試みである。

トーマス・マンについては言うに及ばず、彼の長男であるクラウス・マンについても、近年その日記や創作メモ、手紙や蔵書への書き込みが公開され始め、マン父子の文学や政治的発言に新たな光が当てられるようになってきた。息子クラウスが同性愛的な禁忌を大胆に侵犯する作家であったことは周知の事実であるが、

父親である偉大なノーベル賞作家トーマス・マンもまた、同性愛的なエロスにはほとんど感嘆した作家であったことが明らかにするにつれ、「現代の古典」然としたその文学や政治的発言にも、別様な解釈が提出されるようになった。

トーマス・マンにおいては、自作への解説のみならず、手紙や日記などに膨大な量の自己言及がある。本書の特長の一つは、このトーマス・マンの自己言及の呪縛から逃れるために、クラウス・マンというもう一つの極を設定した点にある。二つの中心を持つ構図——おそらくは父親の半径の方が極端に大きい歪んだ構図——

を想起していただきたい。奥田氏は、この両者における同性愛エロスとナショナリズムの関係を、お互いの文学を対比させながら読み解いていく。氏の論が特に興味深いのは、ヴァイマル共和国への支持や反ナチズム闘争という具体的な反ナショナリズム活動を超えた次元に、同性愛エロスとナショナリズムの密やかな相乗的関係——それが否定的なものとなる共犯関係となる——を看破した点である。例えばドイツ青年運動の理論家で、トーマス・マンが一時期集中的に読んでいたハンス・ブリューアーや教育者グスタフ・ヴィネケンにあつては、同性愛エロスとナショナリズムが分離していないどころか相互に高めあっていること、またナショナリズムと同性愛がともに肯定的なものとしてとらえられていることを指摘するのである。実は評者もこれに隣接するテーマで、本書とはほぼ同時に拙著を公刊した（『青年の国』ドイツとトーマス・マン）九州大学出版会。あわせてお読みいただくと嬉しい。

さて、奥田氏の筆が俄然熱気を帯びるのはその第六章「同性愛とナチズム」においてである。ながらく「失われた」とされていたクラウスの評論「同性愛とファシズム」のタイプ原稿をミュンヘンで調査した氏は、原稿に書き込まれていた父トーマス・マンの自筆コメント（その真偽を巡って氏は筆跡の鑑定まで依頼している）の意味を考察している。ヴィスコンティの映画でも有名なヒトラーによる突撃隊隊長レームの暗殺、いわゆる「レーム事件」を契機に、同性愛とファシズムの両者を同一視する当時の傾向を、この評論を書いた本人であるクラウスが非難しているのに対して、トーマスは同性愛とファシズムの同一視を留保つ

きで賛成していると氏は結論づける。トーマス・マンにとってナショナリズムとは、「身体とエロスに基づく《共同体》と啓蒙的精神による近代的政治制度を統合しようとする試みに他ならなかった」（一七六頁）からである。

副題にある「倒錯」もまた同性愛の単なる別名ではない。氏の言う「倒錯」とは、根源的で盲目的なエロスの情熱が理性や分析によって解体されずに、両者が共存し、それどころか前者が後者によって高められさえする、という現象の倒錯性そのものを指すのである。この否定的認識と肯定的情熱の共存というアンヴィバレンツは、トーマス・マンにおいては若い頃からあつたが、クラウスにおいては当初、同性愛賛美のみが勝っていた。それがクラウスの『敬虔な舞踏』や『悲愴交響曲』という初期の作品をやや月並みで単調にしている原因であると氏は分析する。しかしクラウスは、その白鳥の歌である『火山』では、ナチズムと闘うべき亡命者たちの心の奥底にも、エロスの欲望という形で——その象徴が『火山』である——ナチズムと同じような破壊的な暴力に繋がりがかねない野蠻が潜んでいるという認識を得るに至る、と氏は論じている。

蓋し、「ナショナリズムとエロスの情熱がともに情念的な通底する部分を持っている」ということ、その共通するものは創造の根拠力にもなれば、また破壊的な暴力ともなるきわめて両義的なものであるということ（二九五頁）を、氏はマン父子の文学を分析することによって鮮やかに描き出したのである。

中野昌宏 著

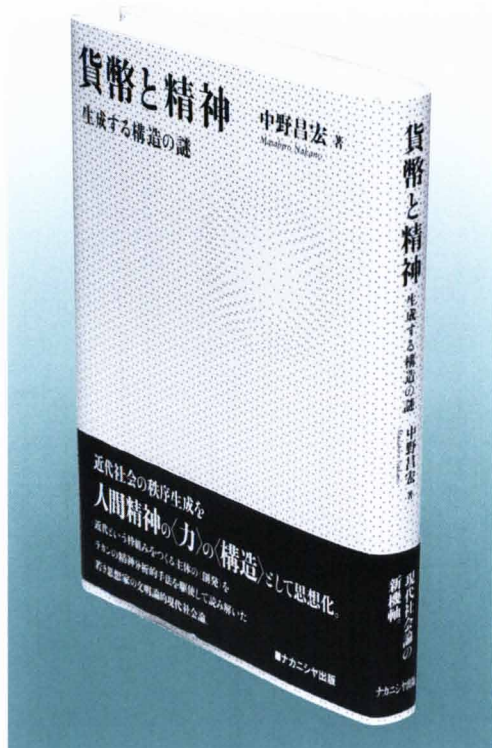
評者 神野照敏 (釧路公立大学助教授)

『貨幣と精神 生成する構造の謎』

ナカニシヤ出版

二〇〇六年三月 二六一頁

定価〇、〇〇〇円



あらかじめ本書における著者のメッセージをひとことで表せば、「理論家は「倫理」的であらねばならぬ」ということ、そのことに尽きよう。自然科学にせよ、社会科学にせよ、およそ理論家が自らの理論を構築する際には、すべて賭けの要素を含む。なぜなら、理論化という行為は、証明できないが真実だと信じるにたる立場を理論家があらかじめ選択するという契機を必ず含むからである。そして著者は、理論化におけるこの賭けるという行為の有無に理論家の「倫理」を見るのだ。

かつて内田義彦は人間の認識は常に賭

けを伴うと述べたが（『社会認識の歩み』）、こうした主張を著者があえてここで繰り返すのは、実際「倫理」的でない理論家が世の中には大勢いるからである。そして、後述するように、本書ではそうした理論家たちの主張が徹底的に論駁される。では、本書で著者が自身の理論化の対象としている問題とはいったい何なのだろうか？ それは、本書の副題に「生成する構造の謎」とあるように、社会科学上の古典的な難問、つまり、「自由な個人」というバラバラの要素からいかにして社会という秩序が形成されるのかという「秩序問題」である。

著者によれば、この秩序問題には従来対照的な二つの解決案が示されてきたという。一つは「傾性論」とよばれるもので、「自由な個人」の側にあらかじめ秩序化される契機を読み込む楽観論である。もう一つは、「懐疑論」とよばれ、「社会秩序」の存在そのものを否定する悲観論である。だが、この両者の立場は方向を逆にしつつともに「ランダムな要素からなぜ、いかにして秩序が形成されるのか」という当初の問題そのものを消去してしまっているという点で、著者には到底首肯できない。それゆえ、ここで著者はこの難問をあえて本来の問題構成そのままの形で受け入れて見せるのだ。

では、この難問に著者はどう答えているのか？ 本書ではこの「秩序問題」が「貨幣論」というフィールドを主戦場に論じられる。ここでの文脈で貨幣が論じられること自体はまったく的を射た戦略であるのだが、なぜ「貨幣論」なのかと疑問に思うむきもあるかもしれない。

「あとがき」にもあるように、本書のもとになった学位論文が構想されたのは一九九〇年代のことである。当時を振り返れば、岩井克人『貨幣論』（一九九三年）の刊行により、貨幣をめぐる議論が再び脚光を浴び始めた時期だった。当初、本質的に懐疑論を胚胎している岩井の議論に疑問を感じた著者は、その批判を通じて自らの理論を築いていったのである。

もちろん、こうした時代的背景が著者の議論を貨幣論へと向かわせる大きな契機となったのは事実であろう。だが、ここでより本質的なことは、貨幣について論じることが先の秩序問題に答えるための有効な方法であったということである。すでによく知られていることだが、ホッブズが切り開いた秩序問題というアポ

リアは、以後、ロックからルソーへと社会契約論というかたちで受け継がれていく。そしてこうした議論を大きく展開させたのが、古典派経済学の始祖であるスミスの市場社会論である。だが、スミスを含め以後の古典派経済学者たちは市場における商品交換を自明の前提としてしまい、そもそもの商品交換が実現される謎を解き明かすことができなかった。そしてこの謎を謎として問題の対象に据えたのがマルクスだった。

マルクスが明らかにしたことは、商品交換が成立するには他の商品と非対称的関係にある貨幣が同時に生み出されていなければならないということであった。それゆえ、貨幣の生成を論じることそのままだと社会という秩序の成立を論じることとでもあったのだ。だが、問題はまさに他の商品の中から特権的な商品である貨幣がなぜ、いかにして出現してくるかということであった。社会秩序の「創発」という難問を解く鍵はここにあるのだ。

一方、マルクスの貨幣論が描くのは、貨幣を生み出すわれわれの側にある論理の飛躍である。では、こうした飛躍が生じてしまう根拠はどこにあるのか？ 言い換えれば、われわれが他の商品ではなく貨幣を欲してしまうのは、際限なく欲望を欲望してしまうのはなぜなのか？ こうした問いを解答不可能として避けることは、理論家が「倫理」的であることを放棄することに等しい。だからこそ、著者は執拗に同じ問いを繰り返すのだ。この一見ドンキホーテ的な著者の挑戦は、だが決して丸腰の戦いではない。ラカン派の精神分析を駆使した著者の応答が成功しているのかどうか。その判断は本書を手にする読者自身にゆだねよう。

小倉紀蔵Ⅱ著

評者・小針 進（静岡県立大学国際関係学部助教）

「歴史認識を乗り越える」日中韓の対話を阻むものは何か

講談社現代新書

二〇〇五年十二月 二二七頁

定価七五六円



「酒で言えば、ナショナリズムの度数は日本がビール、韓国が焼酎といったところか」——日韓のナショナリズムを比較する時、評者がよく言う俗論だ。たとえば、国際スポーツの観戦で日本は「対戦国応援」もありえるが、韓国は「自国応援」で一色となる。実際、サッカーのワールドカップ（W杯）ドイツ大会で日本の対戦相手クロアチアを新潟県十日町市の人々が応援したことに触れた、『敵国』応援する日本人」という見出しのコラムが『東京新聞』（二〇〇六年六月二一日付）に載っていた。一方、同じ頃、韓国にいる親友から「W杯でマスコミも、

人々も、コマーシャルも、韓国応援の一色で、大げさな表現ばかり。もう、見ていられないって感じですよ」というEメールをもらった。

ナショナリズムをめぐる日韓の差は、日常思う歴史認識の違いによる結果でもある。本書は、『歴史認識を乗り越える』日中韓の対話を阻むものは何か」という直接的なタイトルの下、日本と周辺国のナショナリズムや閉塞するアジア外交を考えるヒントがたくさん詰まっている良書である。また、「はじめに」で小倉は歴史認識問題における日本の欠陥として、日本人の言葉がアジアと対話になっ

ていない点、国民の関心が真摯に収斂されていない点、学問的・政治的な軸が定まっていない点という確な三点を挙げている。自ら「本書で、以上の三つを克服するためにどうすればよいかを、思想的に考えてみた」と言うが、「考える」だけでなく小倉の「解決提言」が盛り込まれた主張の書でもある。

特に、小倉が一貫して指摘しているのは、日本では「日本人」という「主体」を打ち立てられないできた困難さと曖昧さである。もちろん、「主体」とは言っても、「単一民族共同体」の構成員としてナショナリスティックに「主体」を強調する「右派」の立場にも、歴史の過誤に対して改悛し贖罪的に「主体」を強調する「左派」の立場にも、小倉はくみしない。「加害者としての自己の立場を深く自覚しつつ、加害者の立場に安住してはならないというのが、朝鮮半島との関係において発言を始めてからの私の、一貫して変わらぬ立場である。安住するとは（優位）に立つことだと、私は知り尽くしているからだ」と、明快な主張を繰り返している。「自覚」とは「右派」つまり「自虐史観」批判論者へ、「安住」とは「左派」つまり「進歩的知識人」に向けての苦言であり、本書の随所にその具体例が示されている。「対戦国応援」もありえる日本を自虐だと糾すのも、「自国応援」で一色の韓国を微塵も異様と思わないのも、あるべき姿ではないであろう。

では何があるべき姿かと言えは、歴史認識において、小倉は「自由と民主主義」を土台とする「センター」の確立だと言う。つまり、「反省と謝罪を通じたアジアとの和解」のみを掲げる「左派」と、『国際貢献』のみを掲げる「右派」の立場を総合する『第三の道』こそが、

日本の「センター」であるべきだと私は考える」と記述している。

評者も、この意見には賛成である。それゆえ、講演などで小倉の書を引用しながら、受け売りで「謝罪し国際貢献する日本」を主張することがある。ただ、講演の主催が保守色の強い団体であれば、「謝罪」という言葉が出ただけで「中韓に何度謝ればいいのか」と言われ、進歩的な団体では評者が「イラク復興での日韓協力による国際貢献も含まれる」と言及しただけで、「自衛隊の海外派兵による貢献など論外」と猛反発を受けた。左右の論者たちの極論に影響を受けた人々への説得の方法論を小倉にはもう少し展開してもらいたかった。

地域研究者として本書を通読して評価する点のひとつは、韓国社会の対日歴史認識の問題点的確にあり出している点だ。たとえば、「唯一の真なる解答」をふりかざして子供を叱りつけるように日本人の発言を封じ込める姿勢、「ドイツは道徳的、日本は不道徳」のレッテル貼り、自国民の結束のために作成された教科書に代表される歴史観の排他性などである。歴史観の幅は日本のほうが自由だから、中韓の歴史観を日本のほうに引っ張るべきとも言う。「嫌韓」の立場ではなく、NHKのハンゲル講座講師を務め、日本における韓流現象を肯定的に評価する小倉だけに、その数々の指摘は説得力を持つ。

本書には『朝日新聞』、『読売新聞』、『世界』、『諸君！』などに小倉が発表した叙述が組み込まれている。相反するオピニオン紙誌での論考が一冊になっている。読後感にはまったく違和感がない。それは、『センター』の確立を主張する立場から、左右の「奇妙な歴史認識」に物申しているからであろう。

人環図書

— 本研究科教官の新著より —

カフカ『断食芸人』へわたし
のこと

三原弟平著

みずす書房、二〇〇五年

「理想の教室」と銘うち、高校生を対象に「教える―学ぶ」ための新シリーズの一冊として書かれたもの。高校生たちと教室の取り合わせにいい思い出はないが、この教室は二次元のもののなので、一人読むことでしか中に入らぬ。カリキュラムとしては、まず「断食芸人」の新訳が掲げられ、その後3回の授業。授業は必ず3回にせよと最初に言い渡されたので、各回ごとに違った基本方針でもって臨むことにする。1回目は、どこまで可能かはわからないが、研究者的な情報を外から持ち込むことは一切やめ、カフカが書いたということさえも忘れて、ただ物語だけを相手に読解ゲームをしてみようという方針。2回目は、書かれた物語を書いた作者まで含めて考え、とどういうことになるか、ともに考え、最終授業の3回目は……、それは授業を受けるときのお楽しみに、という方針で臨んだ。

授業をやり終えたものとしての感想をいえば、〈私小説〉と関連づけた3回目がいちばん楽に書け、ついで2回目。1回目を書いていていちばん苦しかったが、なんといつても最も苦しんだのは最初の訳で、最後まで時間をもつばこれに取られてしまった。ちなみに、タイトルに出てくる「わたし」ということは、は、重層的な意味が込められている。

〔B5版 一五五頁〕
定価 一、三六五円

サン・テグジュペリ
『星の王子さま』

稲垣直樹訳

平凡社ライブラリー、二〇〇六年

『星の王子さま』は途方もないベストセラーである。一三〇種類以上の言語に翻訳され、全世界で毎年百万部以上が売れており、これまでの累計販売冊数はなんと五千万部にのぼる。一九九九年の世界ベストセラーランキングで、第一位の『聖書』、第二位の『資本論』に次いで第三位であった。日本では一九五三年に翻訳が世に出て以来、五〇年間に六百万部が読者の手に渡った。これは戦後児童書販売累計の第二位だそうである（ちなみに一位は『セーラーモーン』）。

その版権が二〇〇四年二月末で遺族の手に離れたのである。これに伴い日本でも、一出版社の独占翻訳権が消滅し、誰でも訳せ、どの出版社も出版できるようになった。かくして雨後の筈のように、二〇〇五年の一年間で一〇種類近い「新訳」が上梓された。そんな一年が明けて、二〇〇六年一月に本書は書店に並んだ。

子どものための本であると同時に、おとなのための本であり、その両者であることの両義性を戦略的にフルに生かした三重構造。そうした奥行きを深さも含めて、作者の意図に最も忠実な訳を目指した。幸い、読解が緻密で、日本語文の完成度が高い「定番訳」との評判をいただき、刊行後間もなく増刷となった。本書をベールに番組を組み立て、二〇〇六年四月・五月・六月の三ヶ月間、二六回にわたって、NHKラジオ・フランス語講座応用編で『星の王子さま』を訳者は講じることとした。

〔文庫版 一七九頁〕
定価 九九八円

知の教科書 フロイトⅡラカン
（選書メチエ）

新宮一成・立木康介編著

講談社、二〇〇五年

精神分析家J・ラカンのスローガンが「フロイトへ還れ」であったことは、よく知られている。

だが、ラカンが精神分析の知をフロイトからどのように受け継いだのかを、個別の概念やテーゼに即して具体的に明確化しようとした試みは、わが国ではこれまでほとんどなされてこなかった。本書は、この空

隙を埋めることを意図して編まれている。第一部では、話す存在としての人間の関わる「現実」とは何かという、フロイトとラカンの間に存在する根本的な問いの連続性を取り出されたのち、本書の中心をなす第二部において、「大文字の他者」、「シニフィアン」、「性関係はない」といったラカンの一五のキーワードと、それらに対応するフロイトのタームとのあいだの継承関係が、ラカンのテクストからフロイトのそれへと遡行しながら明らかにされてゆく。

さらに第三部では、貨幣論や歴史論争をはじめとする七つのテーマについて、「応用フロイトⅡラカン学」ともいうべきアプローチを試みられ、最後に（第四部）ラカンの代表的著書である「エクリ」と既刊の諸「セミナール」の概略、および、現代のラカン派のリーダーであるJ・A・ミレールの業績と、ラカンをういた政治社会理論に定評のあるS・ジジェクのそれとが、紹介されている。

〔B6判 二五四頁〕
定価 一、六八〇円

諸刃の援助 紛争地での援助
の二面性

メアリー・B・アンダーソン

大平剛訳

明石書店、二〇〇六年

本書は、紛争地における援助がもたらすば状況を悪化させてしまいかねない、ということを経験した援助事例をもとに示した点で他に類を見ない内容の書である。援助は、たとえそれが良い意図で行われたものだとしても、様々なメッセージを含んでいるがために、期せずして紛争状況に何らかの影響を及ぼしてしまう可能性をはらんでいる。原著のタイトルがDo No Harmであることからわかるように、「害をもたらしなさい」ことを念頭に置いて援助は実施されなければならない。

著者は「平和へと向かう現地の力」を重視し、「人々をつなぎ止めるモノ」を現地で探し出すことに重点を置いている。紛争後復興期の脆弱な社会状況下であっても、そのような力を見出すことは可能であり、援助機関はたえずそのような力を見つけて出す努力をし、それに基づく援助プロジェクトを作成しなければならぬ。実際に、本書で示されたアイデアの多くは、すでに多くのNGOによって実践に移されている。紛争要因分析手法の開発が様々な援助機関に進められているが、それらの多くは紛争状況を所与のものとして捉え、新たに持ち込まれる援助が状況を悪化させないことにのみ注意を払うだけである。そのようなアプローチではなく、どうすれば平和を創り出すことが出来るのかという問いを本書は示唆してくれているのである。

〔四六版上製 二八〇頁〕
定価 一、九〇〇円

瓦版

◆“人環”とは？

本雑誌の表題「人環フォーラム」の“人環”は、平成三年四月に新たに開設された「京都大学大学院人間・環境学研究科」の略称です。

◆催し物のご案内（詳細は各連絡先にお問い合わせください。）

◆民族自然誌研究会・第四五回例会

- 日 時 平成一八年一〇月二八日（土）午後一時から五時
- 会 場 京都会館（参加費 五〇〇円）
- 講 演 資源をめぐる葛藤と協働―生物と人間それぞれの世界から
- 話題提供者 福井勝義、佐藤廉也、巖佐庸、西田隆義、池谷和信、山極寿一
- 連絡先 福井勝義（電話 〇七五―七五三―六六一四）

◆日独文化研究所主催・第一六回公開シンポジウム

連続テーマ〈時間〉第二回「自然の時間」

- 日 時 平成一八年一〇月二八日（土）午後二時―一七時半
- 会 場 みやこめつせ大会議室（地階）（左京区岡崎成勝寺町九の一）（入城無料）
- 挨拶 岡本道雄（元京都大学総長、日独文化研究所理事長・所長）
- 講演 本川達雄（東京工業大学教授）「生物の時間」
- 木村敏（京都大学名誉教授）「自己・生命・時間」
- コメンテータ 大橋良介、高橋義人
- 連絡先 高橋義人（電話 〇七五―七五三―六六七二）

◇日独文化研究所創立五〇周年記念講演会

- 日 時 平成一八年一月二四日(金) 午後三時～六時
- 会 場 ウェスティン都ホテル京都(地下鉄東西線「蹴上」駅下車すぐ)
- 講 演 有馬朗人(元東京大学総長、元文部大臣、テーマ未定)
- 連絡先 高橋義人(電話 〇七五―七五三―六六七二)

◇日独文化研究所主催哲学講座冬学期『ダ・ヴィンチ・コード』と聖書の新解釈

- 日 時 平成一九年一月二四日(水)～三月七日(水)、二月一四日を除く毎水曜日、午後六時半～八時
- 会 場 日独文化研究所(京都市左京区吉田河原町一九の三)
- 講演者 勝又直也、岡田温司、高橋義人(各二回ずつ)
- 連絡先 高橋義人(電話 〇七五―七五三―六六七二)

◇民族自然誌研究会・第四六回例会

- 日 時 平成一九年一月二七日(土) 午後一時から五時
- 会 場 京都会館(参加費 五〇〇円)
- テーマ 庭畑の民族植物誌(仮題)
- 話題提供者 藤本武、及川洋征、吉野馨子
- 連絡先 福井勝義(電話 〇七五―七五三―六六一四)



人環フォーラム

第20号予告 HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM NO.20

巻頭言

奥田光郎

特別
寄稿

私の大学紛争総括

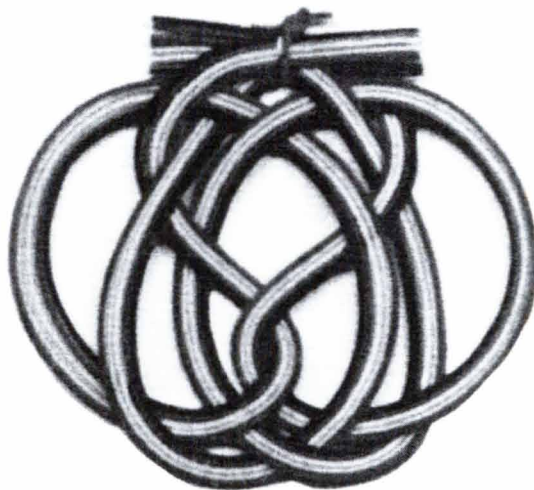
岡本道雄

特集

男と女

岡田温司／津田謹輔／西山良平／小山静子／
松井正文／須田千里

表紙写真 ス페인、ビルバオのクッゲンハイム美術館。フランク・ゲーリー
設計（撮影）立木康介（二〇〇五年九月）
裏表紙写真 カレーヴァディを担ぐインド系シンガポール人。本文五七頁参照
（撮影）田中雅一
カット（目次）中国・漢時代の石刻画（張鴻修編著『陝西漢畫』三秦出版社、
一九九四より）（四七頁）同・（七二頁）同・（奥付）水引「思い結」（制
作）山中喜美子
裏表紙背景 宮崎興二名誉教授提供



編集委員会

委員長
副委員長
委員

高橋 山田 義
加藤 垣田 直
川上 藤 昭
西村 雅 幹
杉山 比 人
立木 陽 介
宮垣 安 比
木宮 陽 介

人環フォーラム 第19号

平成一八年九月三〇日発行

編集 『人環フォーラム』編集委員会

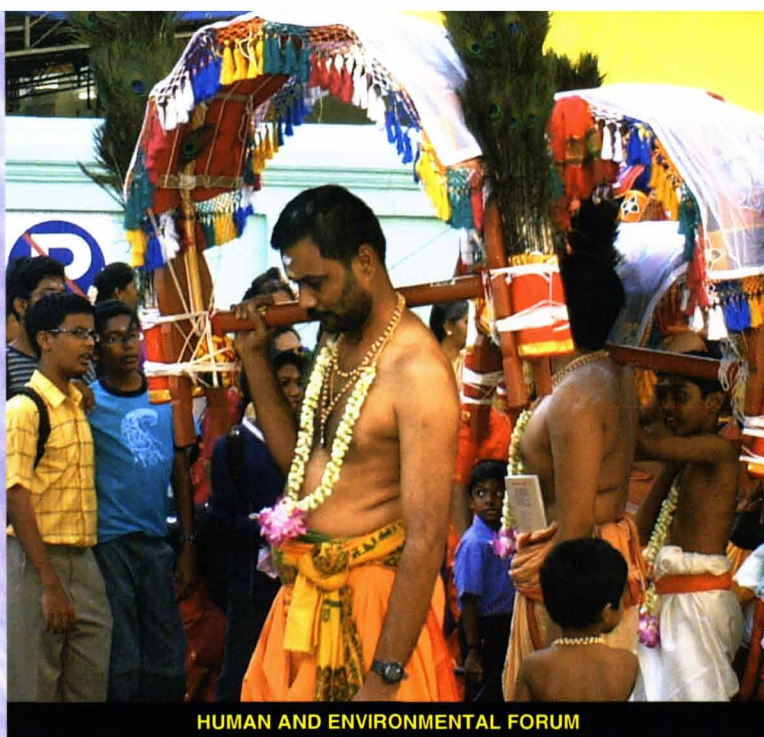
発行 京都大学大学院人間・環境学研究科

〒六〇六・八五〇一 京都市左京区吉田二本松町
FAX 〇七五・七五三二・九九九

印刷製本 ショウドウ・イープレス株式会社

編集後記

わが人間・環境学研究科の前身である京都大学教養部に赴任して以来、すでに三〇年以上の月日が経った。赴任した当時、教授会での発言を聞きながら、京都大学にはいい意味での奇人・変人が多いものだと思い、感心した。奇人・変人がどれくらいいるものかと思ひ、奇人の筆頭、変人の横綱を東西の横綱にして、暇に任せて頭のなかで奇人番付、変人番付を作り上げていったら、ともに優に一〇人を超えてしまった。それほど昔は個性的な先生が多かったし、それらの先生方とお付き合いはとても楽しかった。変人・奇人の多い京都大学、特に京大の教養部に赴任できたことがうれしかった。個性的な先生の大半は、事務能力にあまり長けておられなかった。しかし事務能力があまりなくても、そうした面白い先生方がいることを歓迎するおらかな雰囲気がかつての教養部にはあった。しかし今日では、個性的な先生方が「奇人・変人」であることを許す余裕が、京大のみならず、日本のどの大学にもなくなってしまう。旧教養部は、残念なことに「古きよき昔」となってしまったのである。（Y・T）



HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM